
ネギま！ 塩派！

昂昂昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 塩派！

【Nコード】

N3792W

【作者名】

昂昂昂

【あらすじ】

サル・スプリングフィールド。それが彼女の名前だった。

知らぬ間に『ネギま！』世界に転生していた彼は彼女となり、多くを犠牲にして生き存えるも、麻帆良にて息絶えようとしていた。

そんな彼女を救ったのは、前世で想いをよせていた、いないはずのお姉ちゃん(?)。

サルは彼女(?)の助力を得て、過激だったりゆるゆるだったりな学校生活と復讐劇を始める。

第1話・序幕

少年が枯れ葉のベッドからむくりと起き上がる。

自然と、「うあー」なる言葉が口から漏れでていた。

彼は軽い酩酊感の中、頬に着いていた枯れ葉がぼろぼろと崩れ落ちていくのを見て、数秒ぼうつと意識を飛ばし、現在の（・・・）彼自身のこととか、これまでの苦悩とか、ここで起きた出来事とか、なにやら色んなものを詰め込んだ息をふうと一つ吐きだした。

そして胸元にある違和感を拭おうとさすりさすり。

拭えず、一度シャツの上を開けて見てみると、二重円とそこから広がる罅のような痣が浮かんでいた。もう一度さする。すると今度はあつさりと消えた。シャツを直す。

十月の空気が冷たかったのか、うう、と呻き自分で自分を抱くように肩や二の腕をさする。

それからやっと周囲へと意識を向けた。

木、木、木、三つあって森。それがいっぱい。

「……以降、昼間だろうと森に入るのは自重しよう。もう秋も深いし、寒いし、麻帆良の森広いし。……はあ、それにしても……」

ふと、とある一方向へ視線を向ける。森の奥、まだ彼が踏み入れたことがない区域。でも彼は知っていた。この先に死体がある。一度も会ったことがないし、意思疎通をしたこともないが、苦悶に顔

を歪めた出来たてホヤホヤなのがあると知っている。距離がありすぎて肉眼では到底見ることができないが、それが今の彼にはよく理解出来た。

「んー？」

と、またぼうっとしてしていると、なにやら死体のある方へ人の気配が向かっていることに気付く。現在の彼の認識エリアに引っ掛かったその灰白色スーツの人間のことを記憶から引き出す。タカミチ・T・高畑。通称

「……ひゅう、デスメガネですね。あの人もあちら側なんだ」

ぐう、と切なげに彼のお腹が鳴った。
お腹をさすりさすり。

「……まあ、ほっときゃデスメガネか誰かがどうにかしてくれるよね」

独り言を呟くだけ呟いて、彼はその場を後にした。

「学園長、失礼します」

「入りなさい。どうじゃった。高畑君」

入室と同時の問いに、高畑は聞き終わる前には首を横に振り始め

ていた。

麻帆良学園学園長、近衛近右衛門はこれ見よがしにはあと溜め息を吐きだす。

「神木と繋がる地脈を利用した時空間魔法か。まさかとは思うとつたが、わざわざ本国から来て本気で実行するとは」

「属性などを持たない世界樹の魔力ならと考えたんでしょうね」

「穴だらけの理論じゃ。大昔からあるのに誰一人成功者はおらん。生存者もまた、のう。第一、あれは成功しても時空間魔法とはいえんよ」

「平行世界の自分とのパス接続と、他世界観測による未来の知識の獲得ですか。要約するとその最終目標は……これはまた大層な内容ですね……。僕は魔法理論はからつきですのでわかりませんが、学園長がそういうのですからそうなんでしょうね」

先日来たばかりで、若く才があると評判であった客員の部屋から見つかった資料をばらりと捲りつつ、高畑は煙草に火を点けた。

「それ、燃やさんでくれよ。重要な証拠なのじゃから。他に報告はあるかの？」

「特にはないですね。僕らでも失敗して解けるまで気付けないほどの認識障害結界が張られていたので、目撃者はありえませんでした。ああ、そういうえばエヴァが魔力に気付いてやってきましたが、事情を説明したら死体を確認してすぐに帰って行きました。ところであの方の死亡に関する責任関係の方は？」

「すでに手は打っておるよ。本国から問題を寄越しておいて、こつちばかりに被害も責任もとらされたんではたまったもんじゃないから。遺体の方は無傷なんじゃろ？」

「回収してありますが、無傷というわけでは……。その、胸に奇妙な痣のようなものが出来ていました」

「ほつ。説明が足りんかったの。それでいいんじゃない。それが術を行使した証のようなもの。むしろが関知しておらん証明の一つになる。あの魔法は使用者の意志と魔力でしか行えんものじゃし、催眠魔法などで他者の魔力が混じるとその痣も出てこなくなるんじゃないよ」

「そうになると、痣が出ているなら世界樹の魔力を利用した発想は間違いではなかったということですか」

「そうじゃな。じゃがそれでも失敗したんじゃない。問題は必要魔力量ではないと言われているし、発光現象のときにやっても同じ事じゃ。あの魔法は夢物語なのじゃよ。神になる魔法なんぞの」

「糞ツタレな人生だったぜ。オレがなにしてたってんだ。まったくよ

お
」

悪態を吐いても変わらない自身の容態に、少女は笑みを浮かべた。

もうすでに指先を動かすこともままならない。魔力はすでに枯渇していて、もう数刻すれば命も削りきって右目から塩化していくことだろう。そして最後には塩の柱となって崩れ消える。

最初にケチが付いたのはいつだったろうかと少女は自問した。だがすぐに浮かんだ思考は、彼女に生まれたときからだと答えてきた。クカカツと乾いた笑い声が夜に紛れて消える。

少女には前世の記憶があった。

一才を過ぎた頃にはすでにその自覚があった。そして、前世から持ち越した特殊な能力と知識で、この世界の正体と身の上の歪みを知った。

いつの間にもやら転生し、彼女が生まれ落ちたこの世界は、前世の世界で『魔法先生ネギま！』というタイトルで刊行されていたマンガと酷似していた。

そして彼女はそのマンガの主人公役、ネギ・スプリングフィールドのいないはずの双子の片割れ、サル・スプリングフィールドとして生を受けていた。

彼女も最初は何を馬鹿なと思ったが、以前の人生で仲の良かった近所のお姉ちゃんが話してくれた多元宇宙論や創造性の彼方、集合的無意識の海の話の思い出し、無理矢理現状を自分に理解させた。考えてもみれば以前の世界のと看から少女にはあんな特殊な才能があったのだ。彼女が元々いたあの世界も、なにかしらのゲームやアニメにマンガ、小説の世界だったのかもしれない。だがそれを理解したからといって、納得は出来なかった。

以前の世界のころから持ち合わせている特異な才能、他者の状況や能力を観測でき、自身の設定能力値の分配及び開発ができる『ステータス』が、彼女の理解を補助しつつも納得するのを拒ませた。

『ステータス』とは、少女が転生前から持っていた超能力のようなものの呼び名だ。

正確には『情報統合利用化能力』といい、能力範囲内の存在を情報として捉えて知覚処理し、自身も一つの情報体として捉えることで内在するエネルギーを任意に書き換え出力する能力であった。

この能力で人間を捉えた際、その人物の身体能力や所有する能力^{スキル}、現在の感情などを知ることができ、その表示のされ方がゲームなどで見るような数値化された項目に似ているため、ステータスと呼ばれていた。

また自身の項目を改変することもでき、発達習熟した自分自身の身体能力やスキルを下げることで下げた分の能力値を他の才能に割り振り、強化することも可能であった。

この能力のせいというべきかお陰というべきか、少女にはこの世界がハリボテの世界などではなく、少なくとも現在の自分と同列に存在している世界であると理解せざるを得なかったのだ。

英雄の子と呼ばれ、ウエールズにある边境の村で育ったネギとサル。

過去にあった大戦最大の英雄とされる父とよく似た容姿のネギと、秘匿されていたが前世知識で知っていた、『災厄の魔女』と呼ばれる戦争犯罪人の母によく似た白金の髪と吊り目オッドアイのサル。

強大な魔力という父親譲りの才能を持つネギと、人並みの魔力しか持たずなぜか精霊からの助力を得られないサル。

村では表立って邪険にされることはなかった。それでもステータスで自動表示される彼らの感情値をサルに隠すことなど出来るわけもなく、前世からの経験があったので彼女もなるべく気にしないようにしていたが、日に日に母に似ていく幼子の姿に大人達が危機感を持ち、未来への恐怖を感じていたことに気付かないわけがなかった。

彼女の容姿は魔法世界において、悪い意味での広告塔になる。個人的にも社会的にもサルの命を狙う輩は多く、英雄の息子として将来有望であるネギの足を、容姿や才能、表沙汰になっっていない彼女

達の血縁問題で引つ張ることになるのは明白であったからだ。なに
より英雄の息子を匿うのはまだなんとかなるが、魔法関係者全般に
大量殺戮の首謀者と認識されている者の子を匿うのは、さらに大き
な危険を伴うことになる。村に住む者達の命の問題でもあったのだ。
そして単純に、子どもらしい子どもネギと、前世の記憶と能力
があるせいで子どもらしくないサルとでは、大人ウケが違うとい
うのもあった。

親代わりの従姉であったネカネは、子どもらしく構い甲斐のある
ネギについて回った。単にネギがよく問題を起こし、その尻ぬぐい
をよくしていたからとも言えたが、好意を感じとれるサルはそこに
明確な差があるのをよく知っていた。

村で数少ない歳近い子どもであったアーニヤの好意もそうだ。元
々の世界で年頃の男の子であったサルはネカネやアーニヤにネギが
やるようなスキんシツプを恥ずかしく思っていたため、あまり彼女
達に近づこうとしなかった。それが悪かったのだらう。さらにネギ
やアーニヤが問題を起こせばネカネ以上に論理的に叱っていたのも
よくなかった。気付いたときには常に一步退かれた状態となり、ア
ーニヤどころかネギからも遊びに誘われることはなくなっていた。

だがそんなこと、前世から能力を持っていた彼女にとって慣れた
ものであり、気にはしていなかった。

ネカネが頑張つてサルを好きになつてくれようとしていたことを
彼女も知っていたし、アーニヤやネギは当時まだ幼児期だ。前世の
経験があるサルとは違って、叱ってくる者を怖く思うのは当然のこ
と。サルとしてはネギで手一杯のネカネに負担をかけたくなかつ
たからこのままでも良かったし、むしろ無理してサルを好きになる
必要なんてないと思っていた。その気持ちだけでお腹いっぱいだ。
実際にサルはその気持ちを彼女に伝えていた。アーニヤにも将来ネ
ギを支える一因になつて欲しかっただけで他意はなく、一緒に居る

時間がそれほど多かつたわけでもないので親近感もそこそこしかなかった。サルは自身が嫌われても構いはしなかった。

疎ましく思われるのも、忌避されるのも、恐怖を感じられるのも、なんら問題は無かつた。以前の世界でも、こちらの世界でも、人が人である限り、人にはない才能を持つサルは自身が受け入れがたい存在であると知っていた。それにサルの心の中には常にあちらの世界でサルを支えてくれた近所のお姉ちゃんがいて、不思議と寂しくはなかつた。

問題は村が悪魔に襲われてからだ。

襲われることは知っていても正確な日時までは憶えていなかった。サルは、雪がちらつくようになってから度々村を抜け出し、逃げる算段を立てていた。ステータスの能力で自身の能力値をいじり回し、魔力や気を小動物並にまで下げて偽装。その分の能力値を気配遮断に回して森に隠れるつもりでいた。ステータスである程度は自己を強化できるが、開発できる才能も振り分けられる能力値も限度がある。どうしても開花しない能力もあるし、条件がきつすぎて実用性がないものもある。悪魔の群に対抗できるほどの戦闘能力など、どう振り絞っても彼女は生み出すことが出来なかつた。だから逃げることだけを考えていたのだ。

将来的にあの永久石化は解けるかもしれないし、解けなくて死んでいるのと何も変わらなくなったり、むしろ襲撃時点でサルが知る事象とは違う事が起こり、イレギュラーで大量の死亡者が出る可能性も充分にあつたが、彼女は気にしていなかつた。優先的に狙われる可能性が高いのが自身であることは村人達の反応から理解していたし、下手をすると人身御供で裏切られかねない。むしろサルの危険性を理解している者達が無事に生き残ると、襲撃を受けた責任を全てサルに被せてくる可能性もあつた。最悪の想像だが、ありえない未来であつた。こんなサルだからこそそういう対応になるのだと彼女もわかつていたが、だからこそサルもそのように思考と

行動をせざる得なかった。

だがその企みも失敗に終わった。

目を離すとすぐいなくなるようになったサルを、村人達が監禁したのだ。

襲撃を予期していたとは思えないことから、サルが村の外に出て外部の者にその容姿から出生を悟られないようにするための処置だったのだろう。サルが感じたりステータスで確認した彼らの感情に忌避感があったものの殺意は無かったので、もしかしたらネカネが帰ってくるのにいなかったら彼女を悲しませるからとか、案外そんな理由だったのかもしれない。今となつてはもう知る方法はない。

そしてそのタイミングで悪魔はやってきた。

偽装や気配遮断のお陰で悪魔がサルに気付かずすぐにその場を離れたのはいいが、彼女が出て行かないよう見張っていたアーニヤの親が石化した際に巻き添えをくい、右目から石化が進行。彼女はすぐにも全身が石化してしまう状況で、一瞬で対処法を見つけてステータスをいじくり回し、完全石化は免れたものの、右目は石化したまま。しかも石化進行を抑えるために使用できる魔力がそれまで以上に少なくなってしまった。

それからほどなくして祖父に引き取られメルディアナ魔法学校へ入学したものの、親が石化したのはサルを庇ったからだと勘違いしたアーニヤとの関係は悪化の一途を辿ることとなり、逆にネカネは殊更サルに優しく接するようになったが、彼女は彼女で襲撃の際突如現れた大戦の英雄にしてサルとネギの父親、ナギ・スプリングフィールドに悪魔から助けられており、ナギにも気付かれないまま一人サルが自力で生き残ったことによる後ろめたさがその優しさの理由でしかなく、その理由が重荷となつて、彼女は気付かないフリをしていたが心の底ではサルを疎ましく感じるようになっていった。サルが望んだものではないとはいえ、ネカネ自ら望んで向ける好意と、理由があつて向けさせている好意とでは、疲労の度合いがまる

で違う。その結果だった。

そしてネギだ。それまで散々妹にその危なっかしい言動を注意され続けたのが癪だったのだろう。サルには魔力も魔法を使うための精霊と交信する才能もないとわかると、小言を言うようになった。

「そんなんじや、『立派な魔法使い』になれないよ」「だから僕がサルを守ってあげる（・・・）よ」などと。

確かな優越感を彼女に見せつけながら。

その辺りで少女は彼らがどうでもよくなってしまうた。

すでに薄くなりつつあったマンガの印象が美化されていたのか、ネギはもつと純粹でひたむきな少年であったとサルは記憶していた。だがそれがこの世界においては間違いであり、その記憶がすでに意味のないものであると理解したからだ。

そしてサル自身がその記憶の意味を無くして歪みを産んだのである。ろつと理解しながらも、だからこそ自分も自分勝手に生きて良いのだと思えたというのが、どうでもよくなった最大の理由であった。

彼らは彼らなりに生きている。だからこそ、オレもこの世界で生きていいのだと、逆説的にサルは思いついたのだ。

サルは彼女を無言で責めるアーニヤの姿に、村人が向ける視線を努めて無視する自分を幻視した。何も言おうとしない自分を見つけた。

無理してまで好意を寄せようとするネカネの姿に、彼らの近くにいつもも離れていた自分を幻視した。身勝手な好意を向けていた自分を見つけた。

優越を抱いたネギの姿に、ネギに注意をしていた自分を幻視した。知識を膏に上から目線であたる自分を見つけた。

彼らの姿に、趣くままに生きる自分を幻視した。自身を何かに当て嵌めようとしながらも、自由でもあろうともがき、生きる自分を見つけた。

ネギまにも、ネギにも、スプリングフィールドにも、災厄の魔女にも、石と化した村人達にも、その生き残りにも、気兼ねする必要なんて無い。

サルとしては最初からそのつもりであったが、まだ認識が足りなかったのだと実感した。その時の気分ほど晴れ晴れとしたものはなかったと彼女は思う。

授業をサボリ気配を遮断して、ネギとかち合わないようにながら禁書庫で必要な知識を叩き込んだ。

学校で習うような基礎の西洋魔法理論なんて、とつくに村にあった書物で終わっている。前世から彼女は非常に頭が良かったし、このサルの体はその前世を上回るスペックを持っていたから憶えるのは簡単であった。

自己ステータス設定でも精霊との相性が絶縁しているいえるほど最悪なのはわかっていたから、通常の魔法は最初から捨て置いた。相性が悪すぎて精霊の設定項目を生み出すのにも、改造するのにも、必要な数値が大きすぎたのだ。これはおそらく、サルの前世が精霊が存在しない他世界人であったからだろう。だから禁書漁りはすぐに終わり、呪物や呪符に関することなどを調べてステータス欄に追加、それらを必死に極めた。西洋魔法使いの拠点では大した呪符の知識は得られなかったが、シジルと呼ばれる悪魔などの印を知ることが出来てその知識を呪符に応用、後々随分と役に立った。

そうした中で落ちこぼれだと宣い、あまつさえ直接手を出してきた魔法学校の者達を返り討ちにするようなこともした。

同じように落ちこぼれていた者や、他とはソリが合わなかった者などと連むようになり、それまでになかった友人を作った。

そしてサルはどこからか差し向けられた暗殺者にその友人達を殺され、返り討ちにして、世界に飛び出した。

それから三年ほど経ち、今、サル・スプリングフィールドは死を迎えようとしている。

命を使い切ったことが最大の原因だ。

解呪不可能な永久石化の呪いを御するのには大量の魔力が必要だった。それを彼女はステータスをいじくって命で代払いしていたのだ。多少制御しやすくするために呪い本体をいじり、石化から塩化へと反転させたりもしたが、焼け石に水であった。古来から『呪い』による変化の代表とされる『石化』の反転により、同じく古来から世界各地で『被う』効果を持つとされた『塩』という神聖性へと変換しても、魂への有毒性は変わらなかつたのだ。それだけではない。追っ手や暗殺者から逃げたり返り討ちにするために、さらに命をベツトにして自身の精神や肉体が感じとる時間を引き伸ばし、常に体内と外界との時間差を物理的に三倍にまで広げて対処続けた。そのせいで対外的には九年しか生きていないはずの肉体は、実質十五〜六年生きている状態になり、それ相応にまで成長した。だが体内と体外の差が生み出す負荷で体は芯からぼろぼろだ。維持しようとは手は尽くしたが、それ以前の問題としてすでに掛け金の命自体がなくなりつつあった。そして最後の手段を講じようと麻帆良侵入を計画し、結界にも感知されずに侵入は成功したものの、結局体力と命が尽きて倒れてしまったのだ。

「糞ツタレだ……糞、糞、糞、クソクソクソがあ！ ああ、ほんと、嫌んなるぜ……」

彼女は悪態を吐き続けていたが、気分は悪くなかった。この悪態は放浪の三年間で身につけてしまった口癖のようなものだ。

現に瞳は未だもって爛々と輝き、言葉とは裏腹に心の底からの笑みを口端に浮かべている。

わざわざ麻帆良くんだりまで来ておいて、最後の手段もなにもあったもんじゃありません。倒れてしまったが、妙にやりきった感触が彼女の裡にあった。

元を辿れば、彼女にとって目的も何もない人生だったのだ。あちらの世界であつたならお姉ちゃんがいて、彼女の幸せを願っていたところだったのだろうが、こちらには悔いがない。自己犠牲がどうかなどではなく、生きる目的意識が欠けているのだから当然なのかもしれないし、生まれた状況を考えれば生き抜けるだけ生き抜いたのだから、よくやったと自分を褒めてもいいだろうと考えていた。

少女は誰かに殺されるのではなく、自分の意志でここまでやってきて死ねるのだ。

スタートラインや経過を考えれば僥倖といえる。

(惜しむらくは、最後に彼女にまた会いたいところか)

一番最後にある彼女との記憶は、一緒に買い物に出かけてはくれたというものだ。前世のサルは携帯を持たない彼女を見つけるために方々歩いて、気付いたらこの世界にいた。

(まあ、異世界転生があつたんだ。魂の旅路の果てに、また会えるかも、しれねえな……。あの能力も、まだ消してないし。案外、

探して、る、あの場面から、再スタート、か、も、しれな、い……)

そしたらすぐにも見つけよう。いつも見つけるのは彼女の方が良かったけど、今度こそオレから見つけるんだ。そんな決意を閉じそうなまぶたの裏に想い描く。

(……ああ、会いた、い、な。なごむ、姉、ちゃん……)

少女の右目から、ビシリと酷い痛みが走った。

呪いを押さえつけるだけの命がなくなったのだ。

暗くなってきた左の視界に、サルは大好きななごむ姉ちゃんの姿を思い浮かべた。

彼女は奇妙な人だった。顔立ちは普通なのに、見ているだけで妙にそわそわさせたり、ほっこり落ち着かせたりする、不可思議なオラを纏った人物だった。いつもふらふらとしていて、危なっかしい女性であった。

そのイメージから生まれたばかりの滲んだ人型が、枯れ草を分け入りシャクシャクと落ち葉を踏みつけて近づいてくる。

(ああ、ああ)
「 ……なご、む、ちゃ……みい、つけ……た……」

彼女が側に寄り、昔からずっと変わらない、ぱっちり開いた眼で倒れ伏すサルを覗き込んでくる。

幻であろう彼女の姿はやっぱり滲んでいて、でもその視線や表情だけは不思議とはつきり認識できていた。

もう体感時間で十年以上会っていないから、イメージ補正が

かかっているのかもしれない。サルはなぜか、大好きなお姉ちゃんが格好良くなっている気がしていた。

「ひゅう。これだから森歩きは止められないんですよ」

やはりまだ口笛は吹けないらしい。吹く真似をして、ニッコリと、なごむ姉ちゃんが笑う。

「おシオ、みつけた」

前世で彼女だけが使っていた渾名で、なごむが指をさす。

そんな彼女の様子に、オレが先に見つけたんだ、とサルは笑って、意識を闇に落とした。

ザツと影が二つ、夜に塗れた森の中に降り立った。

二つの内小さな影の方がきよろきよろと周囲を見回し、ふんと鼻を鳴らす。

「逃げたか。感じた魔力反応すらもう欠片も残っていないとはな。場所はこのあたりで間違いないはずなんだが。何か痕跡はあるか、茶々丸」

「熱反応感知。その木陰に熱量残滓を発見しました。残滓に連続性がないことから、転移などの方法でこの場を離れたものと思われ

ます。また、熱量の状態から推測して、一人ないし二人ほどの人間がいたものと思われます」

言われた場所に屈み込み、わずかばかりに残った何者かの体温を小さな影が探る。

「……そうだろうな。先ほど感じた魔力は転移の際のものだろう。ちっ、やはりもう魔力は感じられんか。ジジイ共から報告は？」
「現在のところありません。問い合わせますか？」
「いや、構わん。どうせ先ほどの魔力にも気付かなかつたのだろう。私ですら近くだったから気付けたようなものだ。……結果には侵入者の反応もなかったというのに、突如現れた未確認の魔力か」

月明かりに映える長い金髪が地に着くのも構わず、小さな影が屈んだままその場で考え込む。

思い出すのは五日ほど前に起きた、本国から客員として来たという魔法使いが無断で行った実験のことだ。実験そのものは失敗し、その魔法使いはすでに死んでいる。だがその際、少女、エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルは、不審な魔力反応を感じとっていた。

時系列的にその魔法使いが死んだ後になってから発生したとしか思えない、今のように残滓も残らないほど淀みなく綺麗な魔力反応だった。

転移魔法を使う方法は、転移符、転移特性を持つ魔法具及びアーティファクト、もしくは純粹な魔法の三つに分かれる。その内転移符は魔法具の中に含まれるため、本質的には二つともいえるかもしれないが、魔法使い達の認識ではその三つに分けられていた。

そして三つそれぞれに特性がある。

最もよく使用される転移符は値が張るが誰でも使えて、転移距離に応じて価値が高くなる傾向がある。だが簡易に利用できて移動することのみに特化されているため、隠密性が非常に悪い。転移元もそうだが、特に転移先には大きな魔力反応が生まれるのだ。常時感知結界を張っている此処、麻帆良領内に転移しようものなら、すぐに大まかにでも場所が割れてしまう。だが結界の管理者である学園長から連絡がないということは、それも無いのだろう。考え込むエヴァンジェリン自身も結界を応用し、麻帆良の中は感知出来るようにしているため、転移先反応の見逃しはありえない。そしてこれは転移符がそうであるように、ほとんどの魔法具にも当てはまる特性といえた。つまりこの状況で転移符を用いて転移を行っていた場合、転移先は自然と麻帆良郊外となるのだ。

次の例となる、アーティファクトと呼ばれる個人専用の特殊魔法具の類には、非常に稀だが効果性や隠密性が高いものもある。その場合、麻帆良内部に転移されても気付かない可能性があるが、それほど強力なアーティファクトを生み出せる魔法使いの場合、ほぼ確実に結界に本人の潜在魔力が反応してしまい、麻帆良関係者の知るところとなる。それにそれほどの代物となると、世界に一つか二つしかないだろう。危険視しても防ぎようがない類のため、考えるだけ無駄だ。

そして最後の純粋な魔法に関してはさらに難しい問題となる。転移者は一人ないし二人。元来転移魔法は個人レベルで使うには非常に難しい種類の魔法であり、集団転移のために手間のかかる儀式魔法を使うことはあっても、個人で使うことはほとんどない。ありえなくはないが、出来る者がいるとすればそれは相当上位の魔法使いか、転移魔法に特化した特殊タイプだ。しかもこの麻帆良全域にか

けられた結界や少女の感知を欺けるほどの者となると、隠行においては確実に最強クラスの存在となる。転移先にも転移の際に感じた魔力しか反応を残さないのであれば、麻帆良領内であろうと少し距離があるだけでエヴァンジェリンでも感知出来ないかもしれない。いや、最悪の場合近くであろうと、転移先の人口密度が高いと紛れてしまうかもしれない。今回気づけたのは近くであったことと、森という人が来ない場所であった要因が大きい。さらに二人以上で行動していて、複数で転移可能となると

「　　ククク、面白いことになるかもしれないな」

枝葉に蝕まれた月明かりの下、少女は牙を見せるように笑った。

第2話・和塩

「サル・スプリングフィールドかあ。サル、お猿、s a l ? ラテ
ン語で塩じゃんか。じゃあやっぱりおシオでいいね」

「いや、元はウシオ……ああ、もうなにも言わねえよ。好きにして
くれ、なごむ……兄ちゃん？」

サル・スプリングフィールドは困惑していた。

半ば思考を放棄するために先ほど煎れてもらったジンジャーテイ
ーを啜る。市販の葉で煎れた紅茶に砂糖たっぷりと下ろし生姜にゆ
るめのホイップクリーム、そしてシナモンパウダー。これは前世か
ら彼らが好んでいる飲み方だった。甘い香りと味が拡がる。色々
変わってしまった二人の間に、変わらない空気が生まれる。

「なごむでいいよ。兄ちゃんとか、こっちじゃ姉がいるせいか、な
んかむず痒い。それに肉体年齢的にはおシオの方が上っぽくない？
あ、おせんべい食べる？ 揚げせん？ サラダせん？ それとも
海苔巻き？」

少年が座卓の反対側から煎餅類が山盛りになったお茶請け皿を勧
めてきた。

「……まあ、本人がそういうのなら、なごむで。でもこれに煎餅は
ないだろ。クッキーとかねえの？」

言いながら手は伸びて獲物を口へ運ぶ。海苔巻きだ。

「昨日焼いたけど、焼きたてが美味しくてすぐに全部食べちゃった
んだよね。クッキー」

「あ、この味、煎餅も手作りじゃん。変わってない。こつちでも菓子作りが趣味なんだな。言わないと自分で粗方食べちまうのも変わってねえのか」

はにかみ、気恥ずかしそうに頷く彼もジンジャーティーを啜り、ほっと息を吐く。

不思議な印象の少年であった。体型はやせ気味。少々長めに伸びた前髪。男性としては大きめの目と、それを強調する睫毛。顔の作りはそれなりに整っているのだが、目の大きさの割に何故か派手さがまるでなく、化粧なんかを施して衣装を変えれば女の子にも見えるかもしれない。かといって目を惹く美形ということはなく、あくまでそこそこ程度であり、なんとというか、色々薄い感じがする少年だ。

だがその印象は前世から変わっていない。彼は『なごむ姉ちゃん』であったときからこのような雰囲気を纏っていた。この奇妙なチグハグ感が薄いのに濃いという印象となり、顔はなかなか思い出せないのに印象はしっかり憶えているという、不思議な感覚を他者へ植え付ける。いうなれば微少年。微少女といったところか。

だからこそサルはすぐに気づけたのだ。なごむ姉ちゃんだ、と。実際のところ確信した理由はそれだけではないのだが。

「それにしてもあのおシオがこんな別嬪さんになっちゃうなんてねえ。ビックリした」

だが対するサルも見た目という点での印象は強烈だ。

シヨートに刈られた白金の髪。恐ろしく小作りで整った顔の左側にはまつた、意志の強そうなエメラルドの瞳。右半分は大きな眼帯でほとんど隠れているが、むしろそれがアクセントとなって左右非対称の造形美を際立たせている。先ほどまでかさついていた肌や唇

も治療によって細胞レベル以下の単位で再生しており、シャワーで身を清めたことで本来の肌理と潤いを取り戻し、湯上がりのせいもあって白の奥の赤が引き立ち輝くようである。細くしなやかな少女性を発揮する体軀も、驚くほど均整がとれていた。

なごむにとつておシオは自分の後ろをついて回っていた愛らしい男の子である。それが今やどこに出しても恥ずかしくない絶世の美少女となっていた。

「嬉しくもねえ。この見た目のせいでもれだけ苦労したことか」

「魔法使いの英雄の父と災厄の女王の母とか、すごいね。どこのロプレの主人公だよって感じた。あ、でもマンガでこの世界観があるんだっけか。同じようなものか」

「オレとしちゃ、なごむもこっちにいたことに驚きだけだな。しかもそんなデタラメな力まで持つてるしよ。まあお陰で助かったけど」

「自分も『なごむ』を知っているおシオがいることに驚きだよ。すでにこの世界以外の『なごむ』は『自分』が存在した可能性を取り込んだから、どの世界でも存在しなかったことになっているはずだからね。別の分岐世界からの転生とかあっても、おシオは『なごむ姉ちゃん』を知らないはずだったんだけど」

「その矛盾を解消するためにこっちにオレが喚ばれたんだろうな」

「あれ？ そんなこと出来るような能力だったっけ？ おシオのステータスって」

「ステータスいじって作ったんだよ。なごむとはぐれたあの日に、なごむを捜すためにな。『エンカウンター』って名付けた。会ったことがある相手のことを考えるとまた会えるだけの能力だ。出会い運を上げてちよつといじっただけで固有能力としての形が出来たよ。こっち来たときもそのこと思い出して使おうとしたけど、なごむの反応自体がなかったから諦めて最小値まで能力値下げて半封印してた。こっちに来た原因があるとしたらこれの効果だな」

サルは語らなかつたが、反応が無かつた時点でエンカウンターを完全に消して、他のステータスに回せる残存数値に戻すことも出来た。だが彼女がそれをやらなかつたのは、一度消してしまうと登録されているなごむの名前が消えてしまうからである。そして登録できたのはこれまででなごむだけ。他者を避けるために逆利用できないかとネギや悪魔を登録しようとしたこともあつたが、出来なかつた。本当に会いたいと思つている人物しか登録できない、少々使い道に困る才能であつた。

「オレが九年前に転生してきたのにその原因が五日前つてのはおかしな話だが、なごむが能力を得た経緯を考えると、まあありえそうだろう。世界が別もんだし、時間とか無視できそうだし」
「なるほど」

サルがこちらの世界に来てエンカウンターをしようとしたときに『なごむ』の反応が無かつたのは、当時まだサルの知る『なごむ姉ちゃん』がこの世界に来ていなかったためである。

だがここにいるこの世界の『なごむ』に、サルの知る前世の『なごむ姉ちゃん』が引き寄せられ統合されて、『五日前』同一人物となつた。そしてサルは『九年前』その引き寄せに巻き込まれ、この世界へ来たのだ。

全ての原因は、五日前に行われた儀式魔法にあつた。

『魂繋ぎの儀』 『妖精環の縁』 『ifの未完詩篇』 『神々の例え話』 等々、呼び名は幾つもあるけど、その儀式魔法の内容は同じである。

通常、人間にとって未来とは知らないが故に、確定していないが

故に、未来たり得ている。そのため、もし予知で百パーセント完全な未来を知ることが出来るとなると、逆説的にその未来は確定していることになってしまう。そうなるとどんなに避けたい未来も、変更したい未来も、如何なる予防策も対抗策も存在しなくなり、唯々受け入れるしかなくなるだろう。そこに予知の意味はない。未来を確定させる（・・・）予知など、視点を変えたと他の未来を殺すことと変わらない。本当の意味での未来を観測するとはそういうことなのだ。

だがこの魔法は違う。

こことは違う時間を歩み進んだ、もしもの世界にいるあり得たかもしれないもう一人の自分。その自分と直通のパスを繋げることが目的の魔法であり、直接この世界の未来を知るのではなく、他のそっくりな世界の未来の事象を観測することで、結果的に極めて近似で変更可能な未来を知れるのではないか？ というものであった。成功すれば、どんな物事も自分の意のままに出来る魔法と言える。

だが五日前、この魔法を行使した魔法使い本人は魔法の効果によって得た『死』の知識に耐えられず、ショック死した。

当然といえば当然であった。

三千大千世界の自分の知識を一度に得れば人一人分の脳では到底処理しきれず、文字通りパンクする。特に神秘に関わる知識はそれだけで魔術世界的な質量を持つ。それが複数同時に収納される、その意味は脳や魂の変質では収まらない。ちょうど重力が収束され偏重をきたすと空間を変異させるブラックホールが生まれるように、周辺世界の改変もありえる事態だ。それを回避するために知識を直接得るのではなく、あくまでパスを繋げて同期させ、任意に必要な

もののみを得るという内容の魔法であったが、このパスは『死んでいる自分』にも当然繋がるのだ。そして今この瞬間『死ぬ自分』とも繋がる。全ての世界の自分に繋がるとはそういうことだ。知識や知恵に制限をかけても、繋がり、同期した感覚に紛れ込んでくる『死』には対応できなかつたのだ。そしてもしこれに制限をかけても、繋がった感覚がないことにはどのパスからどんな知識や知恵が得られるかすらわからない。それではこの魔法の意味はなく、いつかは繋げないといけなくなる。それ故の魔法使いの死であった。

それはこの世界で不死者となっている者でも同じ事である。全ての他世界でもまったく同じ不死である可能性はない。これまでこの魔法を行使した不死者達は、不死の中に生と死の概念が紛れ込み、永遠と眠り続けるか、不死を無視した新たな矛盾を解消するため、不死が解消され、改めて死ぬかの二択であった。

だが例外は存在した。

魔法使いが試した、属性を持たない世界樹の魔力を利用するという方法。これによって起きたイレギュラーは魔法範囲の広域化であった。そしてそこに巻き込まれてしまった存在がいたのだ。

なごむだ。

この世界にいた『なごむ』も含め、サルの知る『なごむ姉ちゃん』などの分岐世界上の『なごむ』はサルのようにとある特異な才能を有していた。

『信受』

サルのステータス上にはそのような名前前で表記されるそれは、ステータスのように使い勝手のいい代物ではない。その特性を述べるならば、あるべき答え以外の「誤魔化しは効かなく」なり、その「答えを受け入れる」ことができる能力という、なにを答えとするか

も曖昧な、非常に不安定で取り扱いに困るものであった。

だが確かなことは『なごむ』はこの異能故に認識障害結界をくぐり抜け、儀式魔法に巻き込まれて、そこで生まれたパスで繋がった全てを受け入れた（……………）。

結果、それぞれの世界にいたはずであった『なごむ』の過去から未来までの全てを受け入れた彼は、全から一へと返還、帰結し、三千大千世界の『なごむ』が存在した可能性を取り込み一つとなって、唯一無二の『なごむ』となった。

そして『そうであったかもしれない可能性』などという時間的制約をもたないものを取り込んだが故に、それに巻き込まれたサルもまた、時間に捕らわれずにエンカウンターの設定通り（……………）九年前に転生を果たすこととなった。

まだ九才であった前世のサルが、十四才の『なごむ姉ちゃん』に会いたがった通りに。

「なあ、なごむはこの世界の未来を把握しているのか？」

談笑と共にちびちびとジンジャーティーを楽しみつつ、その中の一つとしてサルがなごむに問う。内容は非常に重要なことであったが、現在のサルにとってはそれほど重要なことではなかった。ここでなごむに会えたことで、ある意味すでに思い残すことがないような心境に彼女はなっていた。

「把握しているといえば把握しているし、分からないといえれば分からないよ。この体はあくまで人間だからね。思い出そうとしなければ思い出せないんだ。それに、『なごむ』と『おシオ』がいる世界は完全に『ここ』だけだから、思い出しても十全じゃないはずだよ。

なにか知りたいことでもあった？」

「いや、そういうわけじゃないんだがな。だがそうか、その様子だと、あんまりその知識を使うつもりもないんだな」

「ぶつちやけ未来なんて、一部の事柄以外どうでもいいからね。人の身としては知ってしまうと楽しいめない事柄が多すぎるし、ほとんどのことをあえて忘れているよ。人間の体でも、不老不死や若返りを望めば幾らでも可能だし……。というかすでにそんな感じになっちゃってるのか。今気付いたよ。魔法の影響で改変起こしてる。あ、じゃあ自分に接続して、向こう側に情報置いて治したおシオもじゃん」

「うげ、オレも不老不死なの？」

「うん」

事も無げになごむは頷く。

「接続切るとまた元に戻るけど、どうする？」

……他にあった

かな？ おシオの状況で助かるようなの……」

「あー、いや、とりあえずこのままでいいよ。わかってたけど、まあやっぱり無茶苦茶だな、なごむは。全てのなごむが持っていた『力』をまとめて使えるとか、無限大に近い可能性なんだし、実質出来ないことはないんじゃないか？」

「多分ね」

本当に事も無げである。実際になごむにとってそんなことはどうでもいいのだろう。

「その割には使う力は最小限なのな。さっきの転移とか、魔力消費してたし魔法ぽかったけど、効率化が凄まじかったじゃん」

「一応この世界に合わせて魔法もどきでやったけど、精霊を介して

いなかったから。自分自身を媒介にしたらああなったんだよ」

「自分自身を媒介？ 精霊の代わりにか？」

「そそ、ほらこれ」

となごむが上着を脱ぎ、平たい綺麗な胸を撫でた。すると何もなかったそこに、二重円と全身に広がる罅のような痣が浮かんだ。さらに下も脱ぎ、下着一枚になる。

「これが最初に繋げたパスの名残でね、時空間術式の基礎になるんだ。これを元に全身に なんて赤くなってるの？」

その下着すらも脱ぎごうとしていたなごむをじっと見ていたサルの顔が真っ赤になっていた。

言われて、怒ったようにサルが睨む。

「いや、あのな、一応オレ今女として十五年ほど肉体的には生きているわけよ。少しは察したりしないのか？ なごむも女だったことがあるわけだし」

「自分は前から気にしてなかったでしょ。一緒にお風呂入ってたじゃない。 あー、でもそっか、あっちでは九才の男の子だったけど、おシオはこっちだと女の子として十五年分生きているんだもんね。」

…… 思春期か」

「ほんと察しろよ。殴んぞ。気にしなかったなごむ姉ちゃんがおかしかつたんだ」

「え、じゃああっちでも気にしてたんだ？」

ふふつ、となごむはサルに含み笑いを向ける。挑発のつもりなのか、女性的な笑い方だ。下着一枚で男がやっていい笑い方ではない。サルはとりあえず「きめえ」と吐き捨て、嫌悪も露わに視線を逸らす。

なごむは見た目絶世の美少女から向けられた侮蔑の感情に崩れ落ちた。それがちよつと楽しかったことは彼だけの内緒であったが、しつかりサルはその感情に気付いていた。

そんなお遊びも終え、なごむが服を着ると空になったカップにまた紅茶を注ぎ、砂糖に生姜やクリームを入れていく。もちろん、サルのカップにも一緒にだ。

「ところで、これからどうするの?」

シナモンをかけながらなごむが訊く。

「あー、すぐに麻帆良を出るつもりだ。手段は変わったが、ここに来た目的の延命はなごむのお陰で果たせたからな。今後の予定としては……そうだな、MMの元老院とか、オレに悪意向けたヤツらにとりあえずお礼参りしとくかなあ。放っておくのも負けたみたいで癪だし」

「じゃあここにいたらいいじゃん。どうせ行くところないんでしょ?」
「そういうわけにもいかねえだろ。なごむは問題ないだろうけど、麻帆良にオレがいたら何かの拍子にオレのことバレかねない。っていうかオレお尋ね者だし。それでオレからなごむへ、なごむから家族や友人へって、迷惑かけちまうかもしれないねえ」

「それなら心配いらないよ。予知とかはしてないけど、さっきのこの世界の話から考えるに、このままいけば家族と友人が巻き込まれるの確定しているから。まあ嫌々じゃなければ巻き込まれる当人達にそこは任せるとして、この状況を上手く使えばおシオの報復も嫌疑解消とかも全部一辺にできるでしょ? だから介入してみたらどうかなって。できれば頼みたいこともあるしね」

サラダせんを頬張っていたサルの頬袋が動きを止め、彼女は眉根を寄せた。次にはそれをさっさと噛み砕きのみ込んで、さらに眉を

顰める。

「いや、まあ、嫌疑とかはわかるとして、でも巻き込まれるってそれ、どういうことだよ。まだなごむのこと麻帆良にバレてないんだろ？ なごむなら隠匿可能だろうが」

「あー、あのね」

なごむはきつくなったサルの視線に手を振り、受け流す。

「自分ね、数度しか会ったことないけど姉がいるんだ。父の再婚相手の連れ子で、生まれが早かったから便宜上の姉だけど、同じ学年なんだ」

「まで。ん？ なごむって今いくつ？」

「十四。麻帆良男子中二年」

「……名字は？」

「宮崎」

「……マジかよ」

サルが眉間に指をあて、揉んだ。彼女にとってそれは非常に思い当たるものがある名字であった。頷いたなごむが説明を続ける。

「義理の姉の名前はのどかさん。宮崎のどか、ていうんだ」

「では私は案内してきますね。失礼しました」

女子中等部教員源しずなの声を後に、学園長室の扉が閉まる。それを合図に室内に残された二人が視線を合わせた。

「どうかね、タカミチ君」

先ほどまで散々念話でも話し合った内容を改めて問う麻帆良学園長近衛近右衛門に、女子中等部教員にして学園の裏のNo.2、タカミチ・T・高畑は近右衛門の前面、机の上に置かれた一枚の履歴書に視線の先を変える。

「幾分やんちゃなようですが、特別不自然な点はなかったかと思えます。ただ……」

「ほっ？ ただ？」

口ごもったタカミチを近右衛門は促す。

「……どこかで会ったことがある気がしましたね」

「……裏かどうかは？」

「すみません。そこまでは……」

ふむ。と近右衛門が頷いた。その様子を察するに、大して気にしてはいないのだろう。

「そうか。他人のそら似ということもあるからの。儂の方でも読心をして見たのじゃが、気の強い性格じゃというだけで不審な点は見つからなかった。しかし」

近右衛門の視線もまた、履歴書に移る。

左上部の『目時詩緒』と記載された名前欄。

そしてその隣には黒髪黒目の美しい少女の顔写真がある。本当に美しい人の顔は左右線対称であるという雑学通りに、写真の主たる少女もまた、そのまま中心で半分に折れば線対称を証明できそうなほど完璧な顔立ちであった。

だがその下、履歴書の保護者欄や世帯主欄には名前が載っていない。それらに関する事情や連絡先は全て一枚目の下になっていた一枚目、近右衛門が一枚目を捲った先にまとめて記載されていた。

「孤児……のう。両親を数ヶ月前に海外での事故で亡くし、本人もその事故のショックで一部記憶障害とは……。身元引受人がおらず、年齢的な問題もあり孤児院にかたちだけ入り身元を立て、現在は両親の保険金で一人暮らし中。そして奨学金を頼りに麻帆良へ。一般人としてはなかなか壮絶じゃの……。しかも調べてみると、その出自は東北の古い呪術の血脈に連なる最後の者であったと。これは、保護せねば（……）なるまいの」

「両親の代からすでに魔法関連は伝えられていなかったようですが、本人は血筋どころか裏のこともまったく知らないみたいですね。魔力量も多少多いぐらいで一般人とそう変わりありませんし、魔法的覚醒もまだなようですから」

「まさかこの経歴とこのタイミングで転入希望とは、なにか運命的なものを感じるの」

「彼が来る前に彼女の身边を整えておきましょう。入寮に関する問題もありますし」

「そのつもりじゃ。その為の早期転入受け入れじゃからの。早くあのクラスに慣れてもらうとしよう。期待数は多い方がいいことじゃしな」

「元気がいいですからね。2 Aは」

「ほっほっ。ではしずな君の案内が終わり次第、教室まで頼んだぞい、タカミチ君」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは溜め息を吐く。

彼女は今日も今日とて望まぬ籠の中の生活を送らねばならず、一人隅で頼杖をつき、籠の中を眺めていた。

朝日を反射し金に輝く髪。鬱屈とした現状に憂いを込める青い瞳。血が足りていないのでは思わせる白く透き通った肌。可憐な薔薇のつぼみを思わせる紅のくちびる。物語の中から抜け出してきた深窓の令嬢や囚われのお姫様もかくやなその姿に、だが目を奪われる者はいない。

ここは麻帆良女子中等部2 A教室内。すでにそこに集まったクラスメイト達はそんなエヴァンジェリンの姿など、とうに見慣れているからだ。

十かそこらにしか見えない体躯の彼女の身分は麻帆良女子中等部二年生であり、この中等部に通い始めて十五年ほど経つ歴戦の中学生である。

十五。それは日本では一般的に中学三年生か高校一年生の年齢だ。それと同じ年数を中学生として過ごしているという事実には、エヴァンジェリンは飽いていた。十五年前と変わらぬ姿のまま。

ここに通い始めたころに生まれた少女達と共に一つの教室にまとめられた彼女の正体は、真祖の吸血鬼と呼ばれる本物のおとぎ話の存在である。すでにその齢は六百年を超えており、世界最古の吸血鬼の一人にして、最強の魔法使いの一人であった。

であった、のだ。

現状はこの麻帆良の地に封印され、『登校地獄』なる呪いをかけられた、不老の少女にすぎない。魔法の元となる自身の魔力は粗方封印されて使えず、不死性も失われ、呪いのせいで中学生生活から十五年も抜け出せずにいる。その間に出来た友もなにもかも、中学を卒業すると同時に彼女の事を魔法効果で忘れて進級していき、彼女はまた一人中学校に通い出す。そんな十五年である。如何に永きを生きた彼女といえど、飽きない方がどうかしているというものだ。

そのため学校生活以外の点で些細な楽しみを見つけてはそれに一喜一憂するのが彼女の常になっていたのだが、二カ月ほど前に見つけた『楽しみ』の前兆も最近は息を潜めているのか、度々感じとっていた魔力反応を感じなくなっていた。

（活動範囲を私の森付近から外したただけかもしれないのは少々面白くないな。ジジイが言っていたアレが来るのもまだ少し先だ。その前の暇潰しになると思っていたが、このまま消えてしまふのか。……それともアレに関連して仕掛けてくるのか）

エヴァンジェリンが騒がしいクラスメイトの一团に視線を向ける。複数人の女子生徒があと数日で冬休みというタイミングでやってくる転校生について噂をしていた。

ただこの手の情報に一番早い麻帆良のパパッチこと朝倉和美という生徒でも、その転校生の素性は知らないらしい。

（転校生か。ジジイからは聞いていないな）

彼女の視線の先で、教室前の扉が開く。

現れたのは灰白スーツに眼鏡の男性教諭、タカミチ・T・高畑で

ある。

イタズラ好きの鳴滝姉妹などによって仕掛けられた黒板消しのトランプやその他諸々を回避しながら、タカミチはいつも通りの朝礼を済まし、転校生を教室へ迎え入れた。

いつもは何事にも無関心であるエヴァンジェリンが珍しく転校生に興味を示し、追っていく視界の端で、眼鏡をかけた生徒が一人、溜め息を吐いていた。

なんだかわかりづらい1・2話を読まずにこれを読んで3話から読んだ方がわか
1・2話で出していなかった設定等も多量に含みます。

タイトルにあんなこと書いてますが、これでもきつと分かり難いの
は確定的に明らか。

なんだかわかりづらい1・2話を読まずにこれを読んで3話から読んだ方がわか

主人公ズ紹介

目時詩緒・メトキシオ（サル・スプリングフィールド）

> i 3 2 3 6 8 — 4 0 7 5 <

一人称『オレ』

ネギ・スプリングフィールドの双子の妹。一般的な魔法使いより魔力も気も同等か若干少ないくらいで、その上精霊の加護を極端に受けにくい体質だったため、おちこぼれと呼ばれ蔑まれていた。転生者であり、前世は九歳の男の子であった。精霊がいない世界からの直接転生だったことが精霊の加護が得にくい原因であると思われる。

原作知識を多少保有（この世界がマンガにあった世界であることを自覚・及び主要登場人物を認識と、多少のイベント知識）。容姿は母アリカによく似ているが髪をショートにしており、村襲撃事件で右目を石化されたため顔の三分の一を覆う眼帯をしている。なごむに特性眼帯をもらってからは黒髪黒目。眼帯も事象変異で普通の目になっている。母親似の見た目を邪魔に思っており、髪型などをわざと左右非対称にするなどして似ないよう苦慮している。口が悪く乱暴な男言葉で話す。以前の世界にいた幼馴染みの近所のなごむ姉ちゃんを非常に懐かしく感じており、現在の親族や村の人間を自分のホームだとは考えていない。ただ最初に生み、育ててくれた恩はあると考えている。

前世世界から『ステータス』と呼んでいる特殊な能力を持っており、こちらの世界でもそのまま継承している。

体術の才能はあるがネギほどでもなく、兄より優れているのは魔力や気の操作技量、知識量、思考能力、単純な意志力である。ただし操作技量は努力の賜物であり、才能も本来のものであればこれもネギより劣る。右目に宿した永久石化の呪いを反転制御し、永久塩化の触媒にしている。ただし制御の為に自身の命を削っており、使う度に寿命が減っていくという反動がある。

転生や生まれ持った能力のせいで妙に聡く、子どもらしいネギとは対照的なその在り方や母似の容姿に隠し村の人間が怯えていたことを自覚しており、村襲撃事件以降ネカネとの仲はぎくしゃくとして、アーニヤとの仲は悪化の一途を辿った。

魔法学校入学と同時に自身の魔法の才と大人に褒めそやされることを覚えたネギの言葉により、彼をどうでもいい存在として見るようになる。それ以外にも片目を石化されたままのサルがすぐ側にいるのにも関わらず、その才能を治療魔法などに微塵も向けようとしなかった点も、サルにとって彼を家族として見る視点を失わせる要因となっている。

メルディアナ魔法学校地下に石化した村人達が補完されていることは知っているが、治療ができないのではなくしない可能性を加味し、彼らの治療を積極的に行う気はない。

自身や本当に気に入った人間などの安全を優先する。

魔法学校時代に複数の友人を持つも、サルを狙い派遣された殺し屋によって全員殺されており、復讐後行方をくまらずこととなる。

その際公式には（存在自体が元々秘匿対象であったが）死亡したことにされている。

それ以降追っ手から逃れ生き残るために自分の体感時間を三倍ほどに増加させて生活しており、原作開始時点で十五、六歳相当の肉体年齢となっている。これもまた自身の命を削って行っており、体感時間以上に寿命を消費していたため、原作開始少し前に寿命が尽きて死にかけていたところをなごむに助けられることとなった。

逃亡中は正体不明の高額賞金首として有名になっており、『塩害』

『白化碎人』 『穢れた塩竈』 『白銅の鼎』 などの異名で呼ばれていた。

正体不明であったのは賞金首にも関わらずなぜか本名や顔写真等は出回らなかつたため、その特徴である白金の髪と緑の左目、右の眼帯の少女だということと、固有技能『永久塩化』の魔法のみが情報として出回っていた。原作開始時点での『塩害』の賞金金額は百万ドル。三年前の登録時点で賞金額が三十万ドルとなっており、依頼達成項目も生死問わずではなく、残った遺体及び遺品の全回収となっていた。

『ステータス』

詩緒が前世から持っていた能力。

一定範囲内（半径50Mほど）の情報を知覚する能力で、人間を見た際にその人物が持つ能力や現在の感情などを知ることが出来る。また自分自身のステータスを改変することもでき、発達習熟した自分自身の身体能力やスキルを下げることで下げた分の能力値を他の才能に割り振り、強化することが出来る。

正確には『情報統合利用化能力』といい、能力範囲内の存在を情報として捉えて知覚処理し、自身も一つの情報体として捉えることで内在するエネルギーを任意に書き換え出力する能力。

例

魔力量1000を魔力量50まで下げ、

余剰分となつた50の数値を、

気量100に足して気量150にする。

他に、存在しない才能なども大量に能力値を割り振ることで無理矢理生み出すことも出来る。生み出すために必要な能力値は、本来持っている才能との関連性や習熟度合いから決まる。故に元から才能がない分野はその分だけ大量に能力値が必要になる。

例

魔力量1000を魔力量50にまで下げ、余剰分となつた50の数値を能力開発で光属性の才能に割り振り、光属性の才能1が生まれる。

能力値は詩緒が生まれ持ったものや努力によって習熟したものに限り割り振り可能となっており、スキルを下げた余剰能力値にするのも先天性や習熟したものに限る。

努力によって各種能力値は上昇するが、一度努力で習熟した数値はその上昇した数値状態からしか増えることはない。

例

努力によって得た剣術スキル1000を剣術スキル1にまで下げ、素振りをし続けても剣術スキル1のまま。

剣術スキル1000に戻し、

剣術スキル1000に見合った鍛錬をすることで上昇を始める。

『永久塩化』

村襲撃時に受けた右眼の永久石化の呪いを詩緒がステータスを使い命を削ることで制御、反転させて『被う』意味を持つ塩化にさせたもの。

ステータスの能力と連動させることでヘルマンを超える制御性を有しており、ビームなどとして撃ち出すまでもなくステータスの能力圏内の物体を任意に塩化させることができる。使用された箇所には強い光が走り、塩化する。ただし使用の度に寿命を削るため、逃亡中の奥の手だった。

『体感時間三倍』

これも自身の命を削ることでステータスで作り上げた能力。

精神と肉体の体感時間を三倍に引き上げ、異様な基礎知覚能力を得ることができる。筋力などは変わらない。肉体の体感時間も三倍のためお腹が減るのも三倍速。成長も三倍速。声も三倍速。詩緒が

そのまま喋ると声が超高音高速になり、他人の声は超低音低速で聞こえるため、普通に聞こえるように慣れるまで苦労した。そのせいでステータス内に『三分一速発声』『三倍速聞き取り』なるスキルが発生した。

『エンカウンター』

登録した人物にその内会えるだけの能力。

前世ではぐれた『なごむ姉ちゃん』を捜すために作り出した。作って発動した直後で記憶が途切れており、気付いたときには転生していた。詩緒が本当に会いたいと願った人物しか登録できないため、ほとんど死にアビリティ状態であった。だがこの能力となごむが得た『時空間』と『可能性』の能力の影響により、転生したと詩緒は解釈している。

『不老不死』

なごむに助けられた際に気付いたら得ていた特性。

吸血鬼などが持つ不死性とは別種のもの。

『眼帯』

幾つかの事象変異と多胞体術式が仕込まれたなごむお手製眼帯。失われた右眼の機能回復と髪色や光彩色の変更を事象変異で行い、同列で右眼の呪いそのものは残しているため永久塩化なども使用可能となっている。

付けていても蒸れないどころか事象変異でその部分の肌も右眼も存在していることになっており、むしろ眼帯の存在が在るようでない状態となっているため、付けたまま生活可能。解除や内包された多胞体術式使用は詩緒の意志一つの便利アイテム。

宮崎なごむ・ミヤザキナゴム

> i 3 2 3 6 6 — 4 0 7 5 <

一人称『自分』

目時詩緒にとつての前世の『なごむ姉ちゃん』。こちらの世界では男として生まれた。転生者とは少々事情が異なる。

原作開始四カ月ほど前に『魂繋ぎの儀』 『妖精環の縁』 『i f の未完詩篇』 『神々の例え話』 などと呼ばれる特殊な儀式魔法に巻き込まれ、この世界以外の全ての平行世界から『なごむ』の存在が失われると同時に事実上の現人神となった。

一年ほど前に父が婿入り再婚し、麻帆良学園女子中等部2 Aの宮崎のどかと同学年ながら義理の姉弟となった。旧姓は岩崎。麻帆良学園男子中等部2 B所属。やせ形体型の黒髪黒目。前髪が少々長めで目が男の割に大きい。美形というほどでもなく顔の印象が薄い。だがどこか妙にちぐはぐな空気を纏っているためか、一度会えば名前と雰囲気覚えられるという変な特徴がある。

原作知識はなし。なんとなくそんな漫画があつたよね程度。お菓子作りや絵を描くことを趣味としており、麻帆良男子中等部の同学年内では成績がトップスリーに位置している。

先天的に『信受』と詩緒が呼ぶ能力を有しており、認識阻害結界などが効かないという特徴を持つ。『なごむ姉ちゃん』も同様の能力を持っていた。

宮崎なごむ本人の魔力量、気量はともに少なく、体術の才能ももっていない。ただし後天的に得た力によって超常の存在となった。

『信受』

仏教用語。あるべき答え以外の「誤魔化しは効かなく」なり、その「答えを受け入れる」ことができる能力。

なにを答えとするかも曖昧な非常に不安定で取り扱いに困る能力だが、物事に対する習熟速度や理解速度をある程度向上させる効果を持ち、嘘も効かなくなる。

また、認識阻害結界などに代表される脳機能阻害や知覚阻害を起こす魔法、薬品、催眠術などが効かない。記憶操作も効かないが、脳細胞を殺す類の記憶消去は有効。

『事象変異』

『魂繋ぎの儀』により得た固有能力。

『魂繋ぎの儀』の結果、全ての平行世界中に存在する『なごむ』達が存在した可能性をなごむが『信受』で受け入れ、吸収したことにより、この世界のなごむに統一されて生まれた能力。

なごむに内在している他世界の『そうであったかもしれない』事象の可能性を利用することにより、過程を無視して結果のみを出力することができる。これにより存在しないはずのものを生み出したり、ありえない事象を起こしたり、消失したものを再生することが出来るようになった。

なごむの存在そのものが事象変異であるため、彼を傷付けても全自動でなかったことにされる。なごむや詩緒の『不老不死』はこの能力に起因している。

『神の顕現』の現人神化により能力制限がされており、事象変異は局所的なものに限定されている。

それでもこの能力で大概のことはできるが、なごむ本人はこの能力を応用して作り出した多胞体術式で行動することの方が多い。

『神の顕現』 テオフィアー

ピエール・クロソウスキーが提唱した神の表現方法。

超常の存在である神を人間が知覚できるはずがないという思想から生まれた考え方。その神を神話上の姿として人間が捉えられるのは人間がそのように神を解釈し、神自身が人間が思うとおりの存在たろうとした結果であるとした。

目に見えない神を現人神として顕現させる方法。

無限に等しい『なごむ』達と統合したことにより神に等しい存在になったなごむが宮崎なごむで居続けているのは、詩緒を初めとしたどこかの誰かが人の形としての宮崎なごむの存在を願っているからである。

なごむの行動指針もその願いに起因している。

だが詩緒が知っていたのは『なごむ姉ちゃん』であり、この世界のなごむを誰が願ったのかは不明。

『予知』

本来『魂繋ぎの儀』で得られるはずであった能力。

完全な形での予知であり、ほぼ百パーセント的中率を誇る。はずであった。

『信受』によりこの世界にしかなくが存在しないことになってしまったため、すでに近似値を計る対象がなくなり不完全化している。

さらに『神の顕現』で制限されており、限定されている。

『他世界知識』

他のなごむとしての知識。この中にはネギま！の知識も含まれているが、なごむ本人はネギま！知識を使う気があまりない。いいところ多少の人物知識だけある。使わない理由は『予知』と同じでこの世界にしかなくが存在しないため、すでに事象が大きく異なっているためである。

だが必要とあらば他の技術知識などを使うことに躊躇いはない。

『神力』

他世界での『なごむ』が持ちえた全ての力を扱うことが出来る。魔力量や気量もなどその『なごむ』達を足した量に準拠するかたちになるため、ほぼ無限大の魔力などを扱うことが出来る。戦闘技術などもそのまま継承されている。

『神の顕現』で大きく制限されており、魔力などのエネルギー関係はエヴァンジェリン達よりも少ないくらいまでしか出せない。

『天才』

超鈴音とは別種の天才。超が論理思考の末に行き着く天才であるならば、なごむは直感が行き着く先の天才といえる。

思いつきで他世界知識を流用しないまま四次元体としての多胞体術式を独自に構築するほどぶつとんでいる。普通の人間の脳ではまったく理解が出来ない域。理解出来ても意味がわからない。

『魂繋ぎの儀』前からなごむの頭は良い方であったが、天才というほどでもなかった。だがそれは記憶消去の弊害もあつたうえで頭が良いというレベルに甘んじていたのであり、『魂繋ぎの儀』により消去された記憶部分や脳細胞部分を事象変異で再生、さらに時空間パスの影響で思考そのものが上位次元化したため後天的な天才となった。

『多胞体術式・魔法』

なごむが考案した特殊な術式及び魔法。

基盤となっているのはなごむの体に刻まれた時空間パス。

四次元以上の構造体による魔法式を組むことにより、三次元的な限界を超えた魔法を行使することが出来る。なごむ固有である事象変異の一部をこれを使うことで詩緒やエヴァにも再現可能にした。

主なものは転移魔法や結界・障壁魔法、またはそれらを応用した幻覚魔法などであり、完全な攻撃用のもはなごむが構築していない

ため存在しない。

精霊式や詠唱式魔法ではないため、行使には事前にこの術式を組み込んだなにかしらの道具が必要となる。

精霊への魔力譲渡もなく、使用時の魔力をほぼ完全に消費して発動するため、ほとんど魔力反応がでない。また少量の魔力で発動可能であり、逆に使用時に込める魔力量が非常にシビアなため込めすぎると発動しない。使用には高い魔力操作技術が必要になる。

自身の本当の力を隠すため、なごむは事象変異よりもこちらの術式を使うことが多い。

第3話・接近

「 つつかれたあぁ」

どさつ、と詩緒は公園のベンチに腰かけ、だらりと四肢を投げ出した。

首にまわした白いマフラーがふわりと一瞬浮かんで、ぱたりと主同様にだれる。頭はだれすぎてベンチの背もたれを通り過ぎ、逆さまに後ろを向いていた。大股開きの脚は厚手の黒ストッキングに覆われているが今にもその先が見えそうだ。

サル・スプリングフィールド改め、目時詩緒。それが今の彼女だ。初日の授業を終え、2 Aによる歓迎会という名に託けたバカ騒ぎも終えて、一人アパートまでの道を辿っている途中で一休みである。安いところが少々遠くにしかなかったのだ。

諸々の事情からあのクラスに潜入することとなり、幾つもの小細工を使って正式に麻帆良女子中2 Aに入るまでに二カ月を要してしまっていた。危うく『彼』が来るのが先になるか同時になるかというところであったが、なんとかなった。なごむに認識改変でもしてもらえば楽だったろうが、そこまでやる必要はないし、やれることは自分でやっておきたかった。それにあまり人の記憶をいじるのは好きじゃない。なごむも『例の件』で記憶を消す等の処置に対してだけは非常にシビアだ。故になるべく魔法を用いない範囲に収めて、小細工に小細工を重ねた。主に住民票偽造とか、犯罪行為で記憶をいじると詐称などの犯罪とどちらに軽重を置くかは、詩緒の感性として詐称の方が軽かった。それだけだ。

都合良く廃れた呪の血に連なる一家が海外で亡くなっていたのは、

本人達には悪いが運が良かった。名前も詩緒であったあたり、なんとなくだが彼女がこの世界本来のおシオだったのかもしれないと詩緒は思っていた。

戸籍を手に入れた後は多少の偽造だけで近右衛門達は詩緒を2 Aにあっさりと入れてしまった。それほどまでにあそこに関係者を纏めてしまったかったであろうことが窺い知れる。

しっかりと手順を踏めば、魔法を用いない方がここに住む魔法使いの大半にはバレにくい。認識阻害結界に染まり、魔法を信望するあまり万能だと勘違いし、読心すら予想していれば多少の技術でどうにかなることを彼らは知らないからだ。そしてここではまともな警察機構が機能していないため、詐称などからなる犯罪群が判明しにくいという場面が多々あった。

さすがに現段階で意図や正体まで彼らにバレるのは面白くなかったので、今回の近右衛門達に限っては普通に魔法で対処したが。

(……アルビレオ・イマは出しゃばっては来なかったが、いつかは接触することになるだろうな。まあ、こいつの前じゃあ意味ないだろうが)

だれた頭を起こし、顔の右半分を撫でる。手の触覚が訴えるのはしっかりとそこにある肌と、眉毛や睫毛、右目の感触。存在しないはずの視覚すらある。

そこにはその魔法を理解している詩緒本人すら騙す特殊な魔法が仕込まれた、なごむ特製の眼帯があった。これによっていくつかの魔法や特殊技能を無効化し、髪や瞳などの色を変えていた。

これの効果により心を読んでも過去を読んでもその事象を改変される。認識阻害などという生半可なものではなく、局所的な事象変異なのだ。時空間や可能性というものを操るなごむだからこそ出来る芸当であった。この魔法具自体の魔力反応も精霊を介さないこと

やなごむによる効率化によって誤魔化されており、気付ける者は極一部だけであろう。気付けても魔力にだけで、事象変異まで至った認識改変は変わらない。この魔法が発動している限りどう足掻いてもそこにあるという事実は存在するのだから、それ専用の魔眼や特殊な才能の類でもない限りは看破不可能となる。

ただ、逆を言えば気付く者は気付くわけだが。

（十中八九、エヴァンジェリンと龍宮真名は気付いていたな。両者ともおそらくは魔力に気付いただけで、効果に関してはまだだろうが。あーそれにしても　）

姿こそ隠しているものの、複数の視線が詩緒に向けられていた。

それら全て彼女にはステータスの副次効果で完全にバレていたが、気付かないフリをし続けている。

これらの内二つはエヴァンジェリンと龍宮で、エヴァンジェリンの近くには従者の絡繰茶々丸が、龍宮の近くには彼女の友人で警戒心が強すぎる桜咲刹那がいる。

そして何も無いように見える中空、そこには可視光ステルス機能付飛行型の小型カメラが飛んでいた。十中八九、未来人ことクラスメイトの超鈴音チャオシンエンの刺客だろう。

他には学園長の遠見の魔法や、薄ら寒いことに完全に覗き目的の魔法使いもいるようである。いや、学園長も似たようなものであったが。

ステータスはそのにある情報を詩緒に与える。ゆえに如何に姿を消そうと変えようと、その存在定義自体を変えてしまわないことには詩緒から隠れるのは不可能であった。さらにいえば情報に量の差はあれど大小は関係なく、知覚範囲にさえ入れればその精度に距離は関係ない。ゆえに効果範囲内は全てが一目瞭然なのだ。そこに無機も有機も関係ない。見ようと思えば幽霊の情報すら得られるのだから。

ら、この能力から逃れられるものはほとんどいないだろうといえた。感情ですら感情値として詩緒に認識され、考えていることの一端を伝えてしまう。

（ あー、桜咲やべえな。メチャクチャピリピリしてんじゃん。こりゃ龍宮のヤツ、あつさりオレの右眼の魔力教えたな。あんまり教える必要のないことだろうに、無駄に危機感煽ってバカじゃねえの。それともなんだかんだで友には甘いのか？ つうか傭兵として腕が良くても、そこかしこに年相応なところがあるな。エヴァンジエリンは逆に楽しんでるな。事前にオレのこと察知していたとか？ まあ学園長の認識のたるみ具合から考えて、どちらも上にオレのことを教えたわけではなさそうか。超は……ま、いつかはあれとして、放置で良いか。唯一危機管理なってそうだし。睨まれている側だから無茶な介入はしてこないだろ）

一つあくびをして、近くの自販機からホットの缶紅茶を二本購入すると再び帰り道に行く。

（何事もなければそのまま過ごすつもりだったけど、やっぱりそうもいかねえか。桜咲をスルーするための言い訳には……）

「ねえねえそのキミ、こんな時間に一人でうるついてたらダメだよ。見かけない子だけど、転入生？ 寮まで送ってあげようか？」

つらつらと思考に没頭していた詩緒に、若い男が声をかけてきた。

「ん？ ナンパ？」

男は三人。それなりに身形は整っており、粗野な感じはない。麻帆良大学の生徒かなにかだろう。一人は胸になにやらプレートを

付けていた。

「そうそうナンパですよって違うから」

「三人で遊んでただけどさすがに虚しくなってます。その制服麻帆良女子中でしょ？ 帰りは寮まで車で送ってあげるからさあ、一緒に遊ばない？」

「いやだから違うから。俺達そういうんじゃないから。つつかビツクリするくらい綺麗な子だけど中学生相手はマジ犯罪だし、ロリコンじゃないから」

声をかけてきたのとは別の二人がテキトウな感じに掛け合う。いつもこのような会話をしているのだろう。それぞれの役割がこの時点ではつきりしていた。

「ああ、警戒しなくてもいいよ。俺こういう者だから」

そういって、最初に声をかけてきた一人がプレートが見やすいように近寄る。そこには広域指導員の文字が描かれていた。結界の仕様上、警察機構が上手く働かないことが多い麻帆良の治安維持をするためにある組織の構成員の名称だ。大半は魔法関係者で構成されており、一部に一般人も混じっている組織だが、どうやら彼らは魔法使い側の人間のらしい。多少の魔力が感じられた。

だが詩緒はまだここに来て浅く、調べたことがあったので知識としては知っているが、誰からも彼らの存在を聞いたことがなかったゆえに、

「広域指導員？」

と知らないフリをすることにした。先ほどからずっと監視の目は続いているのだ。下手な手は打たないに限る。

「ありや、知らない？ 一応読んで字の如くなんだけど」

「オレここに来てまだ浅いんだよ。でも指導員ってことは学園関係者なのか？」

「そうそう。のみ込み早いね。というわけで女の子が一人夜道を歩いていたら声をかけなきゃいけない、怪しい身分なのさ。あんまり遅くだと指導員として強制連行しちゃうよ」

詩緒の言葉づかいに若干引いた様子を見せながらも、おどけながら男は説明する。

ふうんと詩緒は頷くも、内心はめんどくさいの一言で埋まっていた。

住居が寮ではないことを言っただけでそこまで送ると言われれば、断るのは難しい。ここは麻帆良だ。強力な認識障害結界が施されており、気付かない内に『変』に思う気持ち、いわゆる違和感を感じとる能力が著しく低下している。それは同時に危機感にも影響するのだ。そんな中で守護者的立場であると語る彼らにまで危機感を抱き断れば、魔法抵抗力を疑われかねない。

かといって、いくら詩緒でも知らない男にそうほいほいと家を教える気にはなれるはずもない。

なにより先ほどから非常に臭うのだ。彼らの内にある下卑た喜びが見え隠れしているのが、ステータスに頼るまでもなく詩緒にはわかった。

第一、ありえないことに声をかけてくる少し前に詩緒を巻き込むかたちで彼らは人払いの結界を張っていた。最初ははっきり桜咲達が接触してくるために張ったのかとも思ったが、関西出身で魔法が得意ではないはずの彼女なら人払いは簡易な呪符式を使うはずだ。これは西洋魔法の人払いであることから、少なくとも桜咲のものではない。

(……この様子だと、部屋教えたら押し込んできそうだな。その前にどこかに連れ込まれるか。つうかここでのつもりか？ ったくだから嫌なんだよこの顔。やっぱ顔ごと認識改変してもらえば良かったな)

手際の良さからみてこういったことに慣れているのだろう。一般人相手であれば記憶消去の魔法で簡単に事実をもみ消せる。そこに来て警戒の強い寮周辺ではないエリアを、魔法関係者でもない詩緒が一人で夜出歩いていれば、格好の標的であった。

(ここにいる魔法使いって一応『立派な魔法使い』とやらを目指しているヤツらなんだよな？ こんなのを広域指導員にしていると、犯罪者の巣窟としか思えねえよ。まあ、都合良いか。利用してやる)

内心の愚痴も嘲笑も表には出さない。

それに詩緒はサル・スプリングフィールドとして一人生きていたときから、魔法使い達の醜悪さはよく体験してきている。無知な一般人相手に利己的な正義を振りかざして失敗しても、このような欲望を振りかざしても、彼らには記憶消去がある。本来この魔法を使うには一定以上の役職を持つ上司の許可などが必要なのだが、結局消してしまえば同じなのだ。必要とされる魔力操作が非常に精密なため扱いきるのは困難とされているが、憶えるの自体はそう難しい魔法でもない。記憶障害などの後遺症が気にならないレベルにまで達すれば、その後に残る魔力の残滓も運が悪くない限りそうそうバシることはないだろう。ゆえにこうして下種な手合いが現れる。

特にここ麻帆良は魔法使いの拠点でありながら一般人にも開放されており、一般人との共同生活によって魔法使い達は彼らに対する万能感を無意識に育んでいる。その感情も上手く機能すれば庇護欲となるが、この男達はその感情が腐ったらかうなるという見本であ

るといった。

魔法使いに限らず、手段と力があれば人間は欲望の趣くままにどこまでも下種になれる。魔法が秘匿されるのはそんな人種を増やさないためであり、同時にそれは魔法を秘匿することで公には存在しない強力な力になるという、既得権益を保護するためでもあった。

特に認識障害や記憶操作などの魔法は、一般人にとって核兵器に勝るとも劣らない脅威であると言える。攻撃魔法など、実際は銃や爆弾で事足りる。簡易にそれら脳機能障害型の魔法を使ってしまうことこそが、魔法使い達の危険度を現していた。

なにも欲望は汚いことばかりではないが、なにかを救い守ることを求めるそれも欲望であり、誰にかにとつての下種な行動となりうる。守ろうとして巻き込まれたら、たまったものではないのだ。

そしてそんな保護の下にある麻帆良は一般人にとつて安全な土地とはいえない。むしろその逆、現代日本ではありえないくらいに刃物も銃弾も飛び交い、それらを上回る脅威の魔法や化生が跋扈する魔窟、魔都であった。

途端に黙り込んでしまった詩緒に焦れたのか、刻限が迫っていたのか、一人が彼女の腕を掴んで「さあ行こうか」と引っ張り出す。向かう先は彼らの物であるうワンボックスカーだ。

本物かどうか知らないが、どうやら広域指導員のお役目は終了らしい。こらえ性のない男である。

最後に一応、ステータスで彼らの感情を中継して目的を確認してから声をあげる。

想像通りだったので逆に安心した。

「つちよ！ おい、なにすんだよ！」

こんな雑魚程度、詩緒ならば気も魔力も使わずに叩き伏せる自信があったが、それをこの場でやるのは少々拙い。

だが好都合な点もあつた。強引な行動にでられたら、いくら認識
障害結界があろうとも一般人も危機感を持つ。だから一般人として
その点に恐怖を感じたから逃げる、という選択肢が取れるようにな
つたのだ。

そして、そうなれば

「離せ！ このっ、誰か！ 助けてくれ！」

詩緒は口が閉じたままの紅茶の缶を、腕を掴む男に投げつける。

顔面に熱いスチール缶をぶつけられた男は思わず手を離し、詩緒
はその隙を突いて走り出すと同時に、今度は口が開いている方を男達
に投げつける。

飛び出す紅茶に怯んだ男達は一瞬足を止めた。

素の身体能力で走り、逃げようとする詩緒。それでも確実に陸上
関係からお呼びがかかるレベルであり、このままでは逃げられると
思った一人の男が袖口から魔法発動体となる伸縮警棒の杖を滑り下
ろし、魔法を唱えようとして

タンという濁いた音と共に、男の杖が弾かれた。

音の方を見れば銃を構える長身褐色の美（少）女、龍宮真名。

そして残りの男達が驚いている間に走る影。

影はサイドテールにした髪を揺らし、彼らの間を縫うように駆け
抜けると、次の瞬間には男達は昏倒してその場に崩れ落ちていた。
しかも全員股間を押さえている。きつともう使い物にならなくなっ
ているのだらう。手心を加えた様子はまるでなかった。むしろ気で
強化していた。

鞘に収めたままの野太刀を竹刀袋に収め、頬にかかったサイドテ
ールを払うのは桜咲刹那だ。

彼女達もこの状況では助けに出ないわけにはいかなかったのだ。

もし本当に目時詩緒が一般人であった場合、彼女達の立場上魔法使いの手で怪我を負わせるわけにも、魔法を見せるわけにもいかないのだから。

如何に魔力が宿る右眼を持っていようと、書類上の血筋を考えればありえなくはないのだ。逆にたったそれだけで疑い続けて一般人を魔法に引きずり込んだのでは本末転倒である。あの学園長なら進んでやりかねないが、このような方法での裏の確認など例え止められたとしてもこの二人、特に桜咲刹那は許しはしないだろうと踏んでいた。

予定調和でもある突然の出来事に足を止めた詩緒は、事前にステータスを振っておいた演技の才能をフル活用して、彼女達を驚きの表情で見つめた。

「あ、え、えっと……」

そして龍宮の手元、未だ白く尾を引く銃口に視線を定める。

「エアガンだよ」

「……そ、そうか」

「私は剣道部だ」

説明を求めてもいないのに桜咲が言う。

エアガンはあんな硝煙らしきものを吐かないし、剣道部は鞘に収まったなにかなど持ち歩かないが、そこはスルーするべきなのだと詩緒は知っている。認識阻害にかかっているフリである。

「えっと、同じクラスの龍宮と桜咲でよかった、よな？」

ああ、と龍宮。桜咲はわずかに頷くだけ。

「あ、あの、助けてくれてありがとな？」

「なに、気にすることはないさ。彼らは広域指導員の偽物でね。騙る者がいるらしいと前から問題になっていたんだ」

「あー、じゃあ二人は」

「私達は広域指導員じゃないよ。まあ似たようなバイトをしていてね、今回はそれでここを通りかかったんだ。高畑先生なんかが正式な広域指導員だよ」

似たようなバイトとは夜の保安警備のことだろう。麻帆良は様々な事情から魔法に関連した外敵を多く持ち、夜になるとそれらが活性化するため、一部の魔法関係者が外敵退治をしてまわっているのだ。彼女達もそれに参加しているため半分は嘘ではないのだが、今日はずっと詩緒を見張っていたので通りがかったという点が嘘になる。龍宮が詩緒に説明をする横で、桜咲が携帯をたたんだ。念話を誤魔化すためのフリかもしれないが、どこかと通話していたらしい。

「高畑先生が回収に来る」

知っている大人の名前が出たことで安堵したように詩緒は息を吐き、その場に座り込んでしまう。

「そっか。あー、なんにせよ助かった。改めてありがとう。ところでそいつら生きてるの？」

「安心しろ、峰打ちだ」

鞘でアレを殴ったのだから峰打ちも何もないのだが、リアルで言ってみたいセリフベストテン上位に入る一言を素面で言われた詩緒は吹き出した。

桜咲としてはまじめな一言だったのだが、そんな彼女に龍宮も小さく笑みを漏らしていることに気付き、わずかに顔を赤くしながら

眉を顰める。

「立てるかい？」

龍宮が詩緒に手を差し伸べる。

「悪いね」

詩緒も素直にその手を握り、勢いを付けて起き上がった。

だが起き上がってから龍宮はその手を離さず、じつと詩緒の顔を見つめていた。さらにその手もニギニギと握ってくる。龍宮の手は日頃の鍛錬のせいかわ所々にマメ痕やタコになっている箇所があり、見た目よりも固い。そして詩緒は手も認識改変の対象としているため、普通の女の子の手だ。そこから探ろうとしても抜かりはない。ただし意図はなんとなく察していても、そんな龍宮の態度に詩緒は若干腰が引けた姿勢となった。

「な、なんだよ。お、オレにそんな趣味はないぞ。こんなでもノーマルだ」

「いやなに、君の目の色はよく見ると左右で違うのだなと思ってね」

詩緒の左右の目はほとんど同じ黒なのだが、右側の方が光の加減で赤みがかって見えるのだ。疑われたとき用に入れておいた小細工である。

ゆえに狙い通りそれを指摘され、演技としても実情としても安心した態度になる詩緒。

逆に彼女の視界外では桜咲の警戒度が上がっていたが、そこは気付かないフリである。

「ああ、これか。少し前に事故で右眼をやられてな。角膜移植した

んだよ。そのせいらしい」

ちなみに詩緒内裏設定では、角膜の提供者は呪の家系であった母親ということになっている。聞かれたら答え、それ以上を追及させづらくするための設定だ。

そしてこれを聞いた桜咲の警戒心が一気に下がったのが、気配だけでもよく伝わってきた。逆になんだか申し訳ないというような気配まで出てくる始末だ。もしかしたら学園長から、事故で両親喪失の話が聞かされていたのかもしれない。

騙している詩緒は微塵も罪悪感を感じていなかったが、桜咲の評価を多少は改めた。彼女が大好きな『お嬢様』以外にも気は使っらしい、と。

「へえ、こう言うてはなんだが、綺麗なものだね」

そして龍宮はそんなものをおくびにもださず言う。桜咲とは役者が違うようだ。

そうこうしている間に高畑がやってきた。

「目時君！ 大丈夫だったかい？」

と言いながら手を振り、いいおっさんでありながらも爽やかに駆け寄ってくる。それなりに似合っているあたりこういうシチュエーションをやりなれてそうだ。

お早いお着きは、絡まれたあたりですでに学園長が連絡を寄越していたからだろう。

龍宮の手が離れる。

「ああ先生、二人に助けられたから問題ないぜ。缶紅茶二本ダメにしたくらいだ」

「それはよかった。僕は彼らを引き渡して来るから。二人とも、目時君を頼んで良いかな？」

よくなかない。これが今回見張られていた詩緒でなければ、そのまま闇に葬り去られていた可能性もあるのだ。一般人にとってはたまったものではないだろう。おそらくは夜間警備の隙を突いていたのだろうが、彼らの様子からみて初めてのわけもないのだし、むしろこうなるまで捕まっていなかったあたり最悪といえる。

そしてどこに引き渡してくるのかを言わないあたり、日本国による通常の刑罰執行はないのだろう。あつて魔法世界と呼ばれる別世界にある魔法使いの本国へ強制送還あたりであり、そこから先の刑罰は余罪やらなにやらを考えたら信じられないくらい軽いものになる。いかにもうすでにナニが潰れていようと、罰は本来受けなければいけないはずだ。だがそれが麻帆良を統治する魔法使い達の国から見た一般人の価値であり、現実であつた。彼らは魔法が使えない一般人が住む世界を旧世界と呼ぶ。そこに含まれた侮蔑に気付かないのは魔法世界の住人だけである。

「あれ、いいのか？ 一応オレに事情聴取とかしなくて。オレが難癖付けてヤツらを強姦呼ばわりしたのかもとかないの？」

「彼らは広域指導員でもないのにこんなバツチを付けていたからね、問答無用さ。ああそれと、今回のようなことがないように、なるべく早めに寮の部屋を決めておくから。寮周辺やそこまでの道とかは警備が厳重なんだ」

厳重にしなければいけない現状をどうにかした方がいいという考えがどの程度彼らにあるのか、詩緒は疑問に思つても口には出さない。

「それはありがたい。今週中に借りてる部屋の更新しなくちゃいけないんだけど、それまでには？」

「ああ、二三日中に出来ると思うよ。それじゃあね。あ、真名君と刹那君には目時君を送ってもらっていいかな？」

「わかりました」

「了解。じゃあ行こうか。部屋はこの近くかい？」

「ああ」

運ぶための応援を呼ぶのか、携帯片手に手を振る高畑を後にして三人で詩緒が借りている部屋へ向かう。

「なあ、あんなことあったし、ぶっちゃけあんたらみたいなバイトがいるってことは、麻帆良って治安悪いの？ ていうか労働基準法とか、大丈夫なのか？」

基本無口な桜咲は取っつきにくいので、とりあえず龍宮に話しかける詩緒。少々認識障害から外れる内容となるが、あんなことがあった後なのだ。危機感の関係で不自然さはない。

「そんなことはないよ。私達は学生自治の一環でね、教師が見回りをしているのもそれなんだ。ここは学園都市だからね。今回の件については、運が悪かったとしか言えない。あとさっきは身分を説明するためにああ言ったけど、今の時間はただの自主パトロールだよ。まあ身分に託けた夜遊び中さ」

もつともらしいことを言っているが、実際には答えになっていない。龍宮もそのことに気付いているらしく多少苦い笑みが混ざっていたが、最後にはおどけてみせてウインクのおまけまで付いてきた影になっていたが、桜咲は歯ぎしりの音が詩緒にまで聞こえてきそうなほど憎悪に燃えていた。彼女にとっては大切な『お嬢様』が一般人であるため、彼らをこれまで見逃していたことを悔やんでいるのだ。

詩緒はそれ気付きながらも、ふうんと頷くだけに留める。

「それよりも、あんなことがあったのに思ったより落ち着いているね。目時は」

「ああ、こう言っちゃなんだけど多少は慣れてるからな。海外生活していたこともあるから、連れ込まれそうになるのは初めてじゃない」

その返答に龍宮はそうかの一言で流すが、桜咲はわずかに強張った表情で見ってくる。日本を出たことがない彼女にとっては信じられないのだ。きつと彼女が知る限り、本当に麻帆良はこのような輩は少ないのだろう。

「だから逃げる手際がよかつたのか」

「まあな。一応護身術も習ってたんだぜ。あんたらのアレには敵わないけどな」

「そうかい？」

「そうだろ。特に桜咲のアレ、目で追えなかつたとかどんだけ早えんだよ。一瞬で三人ノしてたじゃん」

「刹那はこれでも大学生も混じる麻帆良剣道部でエースなんだよ。すごいだろう？」

「そりやすげえな。大学生よりもかメチャクチャつえーじゃん。つつかマジすげえな」

「こらっ、真名っ」

顔を赤らめつつ桜咲が龍宮を叱りつける。

素直に褒められるのはあまり得意ではないらしい。

ククツと龍宮と二人詩緒は笑う。

「あ、もうそろそろ着くけど、二人とも茶ぐらい飲んでくたろ？」

親交も兼ねてよ。うまい菓子もあるんだ」

ちらりと携帯で時間を確認する龍宮。

「時間は……まあいいか。私はご馳走になりたいところだけど、刹那はどうする？」

「では、私も」

「かてーなあ桜咲は。顔は癒し系のくせして」

元が三白眼気味の龍宮とは違い、桜咲は常に目を眇め気味にしているだけで顔の作り自体にキツさはない。どちらかというと年相応の可愛らしいものだ。

「なっ！ あ、あのなあ……」

「ハハッ、桜咲はいじりやすいな」

「クラスでは無口クールで通ってるから、あんまりいじると斬られるよ」

「そりゃあ怖え」

「斬らん！」

そんな軽口を叩き合いながら部屋の鍵を開ける。

と、そこですでに鍵が開いていることに詩緒が気が付いた。

「ありゃ、開いてんじゃん」

その一言で眉を顰める龍宮と桜咲。さきほどあんなことがあったばかりなのだ。

だが詩緒は気にせず、二人が止める間もなく扉を開けた。

「うあー？」

などと宣いながら出迎えたのは、バスタオルで頭を拭く上半身裸の少年だ。

扉に付いていた表札にはしっかりと目時の名があった。龍宮と桜咲の二人は彼女が一人暮らして身寄りもないことはすでに知っていたので、不審者の存在に一瞬で警戒態勢に入る。

しかしとうの家主は顔を赤らめてずかずかと部屋に入り、少年の頭を叩いた。

「客来てっから早く服着ろバカ」

「その前に髪乾かしてもらっていい？」

「甘えんな、男だろ、ほっときゃ乾くだろっつが」

「そこ開いていると寒い」

「だから早く着ろよ。つづか自分の部屋で風呂は入れよ。なんでここまで来て入っててっんだ。あ、二人とも中入ってくれ。バカが風邪をひくから。その辺にテキトウに座ってて」

実にめんどくさそうな表情で、だが甲斐甲斐しく詩緒が少年にシヤツを着せる姿に、龍宮は苦笑して、桜咲は呆然としながら言われた通りに動く。

「おシオが寂しいかと思つて。あー、でも友達出来たんだね。初めまして、宮崎なごむといいます。おシオのことよろしく願いしますね」

「ウゼエ保護者かお前は」

「龍宮真名だ」

「あ、桜咲刹那です」

乱暴に髪を拭かれながら二人の手を取り握手をするなごむ。

さすがにこの時期に上半身裸で外気に晒されたのは寒かったのか、

彼は鼻を垂らしそうになりずっと睨る。

「髪もういいだろ。ほら、かめ」

とティッシュを箱ごと渡して、さっきまでの甲斐甲斐しさを払拭するように詩緒はなごむに蹴りを入れる。

結構いいのが入った風なのに少年も気にした様子もなく、「ありがとん」と言つて盛大に鼻をかむ。

「なごむ、茶煎れてくれ」

「はいはい。お二人とも紅茶しかないですけどいいですか？」

「すまないね、ご馳走になるよ」

「え、ええ」

「はいはい」

と湯を沸かしに台所に向かう少年。

それを見送った龍宮が詩緒に問う。

「お邪魔だったかな？ 彼、男子中二年の宮崎君だよな」

「なごむのこと知ってんのか？」

「絵画コンクールで毎年麻帆良賞だし、男子中の成績トップスリーだからね。それなりに有名なんだよ。知らなかったのかい？」

その経歴も本当であったが、実際にはその程度でこの麻帆良では有名とはいえない。龍宮がなごむを知ったのは以前彼が人払いの結界を通過して、夜間の魔法戦闘区域に侵入してしまったことがあったからであった。そのときには戦闘も終了しており、すぐに結界も解いたため、ほとんどの者は解いた後に侵入したのだろうと気にしていなかったのだが、その区域の火器後方支援をしていた龍宮だけは、結界が解かれる前に彼が侵入していたように見えたので調べた

ことがあつたのだ。

当時彼女が調べたときは裏との関わりが完全に白であつたうえ、覚醒した魔力を持つているようでもなかったので、勘違い、もしくは極々稀にいる認識障害型の結界が効きにくい体質の者として学院側に連絡し、後のことは任せただつた。

事実、それはその通りで間違いはなかったのだが。

「ああ、そういうばそんなことも言つてたな」

「馴れ初めを聞いても？」

「こつちに始めて来たときにちよつとあつてな。それ以上は惚気ていいなら語るぜ？」

「いや、遠慮しておこうか」

夜間、女子の一人部屋で男子が風呂に入っていた。

どのような関係か一目瞭然であり、この年頃であればもつと騒がしくなりそうな話題だというのに、二人のやりとりは少々淡泊なものであつた。それでも龍宮は最初上半身裸の彼を見て詩緒が顔を赤くしていたことを見逃しておらず、面白そうに彼女の顔を眺めている。そのことには詩緒も気付いており、セリフとは裏腹にやりにくそうな苦笑を浮かべていた。

「ところで知つてたかい？ 彼、ウチのクラスの宮崎のどかの義弟なんだよ」

その発言に驚いた表情を見せたのは桜咲だ。純粹に知らなかったのだろう。そして彼女が先ほどから喋っていないのは、詩緒の部屋になごむがいることに多大な衝撃を受けていたからであつた。言つてしまえば今彼女の頭の中は年頃の妄想で埋まっているのである。

「知つてる知つてる。あの前髪長い娘だろ。話には聞いてたからな」

「リサーチ済みというわけかい」
「言ってる」

「はいお茶入ったよ。自分が焼いたものですがクッキーもどうぞ。
なんだったら晩ご飯も食べていったらどうです？ 今日ホワイ
トシチューですよ」

ひょっこりと顔を出してセットを並べていくなごむ。

「いいのかい？」

「真名！」

「刹那、この紅茶もクッキーも美味しいよ。晩ご飯は期待できそう
だ」

「図々しいにもほどがあるだろう！ こういう場面はな……」

「桜咲、気にすることはないぞ」

「ほら、目時もそう言っているじゃないか」

「そ、そうなのか？ いや、だがな……」

「うん。自分は今帰るので、おシオのことよろしくお願いします
ね。おシオ、多めに作ったから、ちゃんと食べなよ。パンも焼いて
おいたから。あんまりクッキーでお腹膨らましちゃダメだからね」

「あれ、帰っちゃうのか？」

「うん。ちょっとこの間話してたところ行ってくる」

「あ？ あーあー。わかった」

「おや？ 帰ってしまうのかい」

「ええ、ちょっと」

なごむがその手に下げた袋を少しだけ上げてみせる。今の話やそ
の重量感と角ばり方から見て、タツパに詰め込まれたシチューなど
のようだ。他に届ける人物がいるということだろう。

「大変だね」

「好きでやっているのです。苦じゃないですよ。それじゃあ、また」
「あ、なごむ」

ちよいちよいと手招きする詩緒の元へなごむが寄ると、彼女は彼に何事かを耳打ちする。彼をそれを聞いて頷き、二人で笑い合い、ちゅっ、と音をたてて詩緒がなごむの耳元へ口づけした。

それを見ていた桜咲はぼっと一瞬で真っ赤に染まり、龍宮は耳打ちしたあたりですでに視線を逸らしている。

なごむも少々驚いた表情をしたあとわずかに頬を紅潮させて微笑み、じゃあねと手を振りながら退室していった。

当然のように残った龍宮と、赤いまま固まっていた桜咲。詩緒は手を振るだけで見送ることもせず、早速シチューを盛り始めていた。龍宮は紅茶を啜りながら、目時詩緒は見られるのは嫌だけど見せつけるのは好きなSであると、このとき判断した。

「あ、あー、その、ほ、本当にいいのか？ ご相伴に預かってしまつて」

二人の關係に察しが付いていたとはいえ、こつも見せつけられては免疫がない桜咲の思考回路はショート寸前である。何度も深呼吸をしていた彼女が気付いたときは、目の前には湯気を立てるシチューとパンが並べられていた。

「気にするな。あ、さっきの歓迎会で食べたから、腹空いてないか？ あれなら無理に食わなくてもいいんだぞ」

「いや、そんなことはないのだが……」

龍宮はまだしも、桜咲は詩緒を見張るのに気を張っていてほとんど料理に手を付けていなかったため、正直これはありがたい申し出であつた。

ここにきてやっとな紅茶に手を付ける桜咲。

そんな彼女を龍宮は微笑ましげに眺めていた。歓迎会中彼女が敬愛するお嬢様の敵かもしれないと警戒していたのが、嘘のようである。

いただきますと手を合わせ、シチューを口に運ぶ龍宮。彼が焼いたというお菓子ほどの感動はなかったが、中々の味だ。

「ところで彼はどこに夕飯を届けに行ったんだい？　彼も寮生だろう。宮崎のところか？」

基本、麻帆良中等部の生徒は男子も女子も寮住まいだ。特殊な事情がない限り家が近くてもそのようになっていく。

「んー？　違う違う。他の女んとこ」

「ごぶっ、と桜咲がむせた。

部屋から出て来た少年を、金色の少女が木陰から目で追う。

「あれは？」

「データ照合。麻帆良男子中等部二年B組所属、出席番号二十三番、宮崎なごむ。一年前父親が婿入りしたため宮崎姓となる。女子中等部二年A組宮崎のどかさんの義理の弟。旧姓は岩館。のどかさん同様、一般生徒です。目時詩緒さんとの関係性は不明です」

「魔力は……異常なしか。やはりなんの関係もないのか？　……目

時詩緒のあれも……茶々丸が医療記録が残つとるといっし、角膜に残留した微量魔力が……とりあえず目時詩緒は桜咲達に任せて私達はこちらを……」

「マスター」

「なんだ茶々丸。今考え中だ」

「申し訳ございませんマスター。ですが　ターゲットがこちらに向かつてきています」

「は？　ほう」

「外部光、瞳孔サイズ及び位置からこちらを視覚的に捉えていることを確認。認識障害結果が効いていないものと判断。対象の危険度を暫定的に二段階上昇、戦闘モードに移行します。……マスター、笑いかけられています」

「見ればわかるわ。ふん。随分となめられたものだな。癪だが、まあいい。いくぞ、茶々丸」

「はい。マスター」

第4話・嘘付

「ジジイ宮崎なごむの資料を見せる」

翌日の早朝、麻帆良学園学園長室の扉を叩き割る勢いで開いたエヴァンジェリンの第一声がそれであった。

部屋の主、近衛近右衛門が、ほ？ と驚いているのを余所にエヴァンジェリンは室内に設置された戸棚を勝手知ったると開き、麻帆良内に存在する魔法関係者の資料と、特殊な一般人達の資料とを持ち出すとその場で読み始める。

「一体どうしたのじゃエヴァ」

近右衛門は昨日の夜、タカミチが魔法犯罪者達を拘束したところで監視を止めていた。ゆえに突然エヴァンジェリンが宮崎なごむの名前を出してもわからなかったのだ。だがその名前には覚えがあった。

「昨晚目時詩緒と接触していた宮崎なごむだ。お前はあいつの能力に気付いてだろう？ なにせ」

特殊一般人の資料の中から、宮崎なごむのそれを見つける。

「脳機能阻害魔法抗体質。やはりな」

「……宮崎君が目時君と接触しておったのかの？」

「見ていなかったのか？ どうやら友人らしいぞ」

「フオ？！……そうか。それはのう……してエヴァ。そこまで確認したということは、魔法も見せたのじゃろう？」

「ああ。一般人となっているのに、私の認識障害結界を無視してきたのでな。攻撃して拘束した。現在魔法球内で隔離している」

資料を読み込み続けるエヴァンジェリン。

「それでは記憶を消しておいてくれんかの」

「断る」

「フオ?! それはなぜじゃの?!」

魔法に関わった一般人は記憶消去が原則だ。それをにべもなくエヴァンジェリンは断った。

「私も最初は消そうとしたさ。だが止めた。お前だつて気付いてい
るだろう? あれは後数回下手なヤツが記憶をいじれば、死ぬぞ」

昨晚宮崎なごむを拘束したエヴァンジェリンは、彼がなんの抵抗もせず攻撃を受けて捕まったことを訝しんだ。そしてそのまま自分の家まで連行し、記憶を覗くなどの処置の後、そこで彼女は彼の『事情』を大凡に理解した。

「ジジイ、お前の魔力残滓も確認したが、ヤツの記憶域は消去跡で虫食いの方が多状態だったぞ。ここに載っている記録では施術数が十回となっているが、消した時間を足すと一年分に相当しているではないか。これだけ記憶をいじければ、とつくに精神か思考力のどこかに異常をきたしているはずだ。」

私が確認出来ただけで百二十四の消去箇所があつたのだ。正確な時間量は計測していないが、消された時間はヤツの半生には値するだろうよ。虫食いの記憶など、本来なら異常をきたすどころか精神が死んでもおかしくはない。それでも今なお、宮崎なごむは生きて
いる。

だが もう限界だ。あれはもう、いつ死んでもおかしくない」

「フオフオフオオウ?! ひ、百二十四回じゃと?!」

非常識なその数字に、近右衛門は今朝最大の奇声と驚きを放つ。

記憶は人を構成する最重要要素の一つだ。人格に最も影響を及ぼすのは経験であり、その経験とは生きてきた記憶に他ならない。それを虫食いの如く消し続けられれば、どこかに変調をきたして然るべきなのだ。最もわかりやすい例が記憶消去や封印による学習能力の低下である。その部分へ至る思考パス、脳神経パスを遮断するため、思考力や記憶力などに異常をきたすためだ。一度の消去や封印でもその時間量次第でそういった弊害が出ることもあるというのに、そんなことを幾度も続けていけば思考や記憶などを司る大脳皮質部分だけではなく、長期記憶の海馬や生体機能の小脳部分にもダメージは及ぶようになる。最悪の場合精神を初め脳機能が完全に失われ、あげくに心臓の動かし方や呼吸の方法を忘れて死ぬのだ。

特になごむの場合、封印ではなく脳細胞を直接死滅させることで記憶を消す消去法をとられている。早い段階で精神に異常を来すが普通だ。

エヴァンジェリンや近右衛門ほどの魔法使いともなればそういった弊害を抑えることも出来たが、ここまでの数や量をこなして無事で見させるのは不可能だ。数で見れば、精々が五十回といったところであろう。精神が死なない程度に抑える、というのが。

それなのに宮崎なごむがこれまで無事でいられたのは、偏に彼の精神力の異常な頑強さによるものといえた。

そしてそれは『信受』の影響でもあった。

「お前が何回まで確認していたか知らないがな。実際はそれ以上やられているだろう。多すぎて途中から数えるのも面倒になったからな。なぜ人として自我が保っていられたのか不思議でならないよ」

宮崎なごむの記憶消去状況に関して、近右衛門も実は二年ほど前に非公式に六十回ほどまでは確認していた。ゆえに彼の精神と脳の耐久性には以前から注目していたのだ。だが実際の回数がそれ以上だと知って、純粹に（・・・）驚いていた。

エヴァンジェリンが手元も資料をめくる。

「……なるほど。幼少の頃母親を連れて深夜の森に入り、結界を越えた結果母を失ったことが最初か。母に関する記憶の半年分近くをここで消していたな。だが記憶をいくら消してもそれが本能レベルでトラウマとなったのか、深夜徘徊をするようになる、と。主な活動域は森。ゆえに度々結界を越えて戦闘区域に侵入、体質のせいかわらぬか。記憶封印や改竄は受け付けず、記憶消去を繰り返してきた。お前も把握していなかったようだし、記録外の記憶消去はどうせ『正義の魔法使い』どもが失点をおそれ、勝手に消していたのだろうか。……本当に、あんな下手くそな記憶消去でよく生き残ったよ」

エヴァンジェリンだからこそ記憶消去の回数を細かく測定できたようなもので、上位の魔法使いでも記憶をいじった回数を正確に測定するのは極めて困難な作業だ。どれだけいじられていたのか、気付く者などいかなかったのだろうか。だから『彼ら』は秘密裏に、遠慮無く、記憶を消していった。

資料を読み込んでいくエヴァンジェリンを、近右衛門は冷や冷やしながら見ていた。本当はその資料にも記載されていない、他の事実もあつたからだ。宮崎なごむが魔法使いによって失ったのは何も母親だけではない。二年前、恋人と言っても差し支えない人物を彼は失っていた。その事実はある理由から秘中の秘となっていたため、資料が別冊にしてあつたのだ。

そこに関する記憶は近右衛門が入念に消去したので復元される心

配はないと言い切れたが、資料は残っている。それをエヴァンジェリンが知ったところでどうこうするということはないと思うが、知られていい内容でもなかった。

「それでジジイ。なぜこいつを今まで放置していた？」

資料から顔を上げたエヴァンジェリンが問う。

このまま記憶を消し続けていけば近いうちに死んでいたのは確かだ。魔法の秘匿という問題があるうが、それをわかっていながら放置していたのは緩やかな他殺としかいいようがない。だがそれを回避するために、麻帆良最高権力者である近右衛門であれば、理由を付けて彼を麻帆良の外に追い出すことくらい出来たはずなのだ。

だが彼は宮崎なごむを麻帆良に置いておき、そのままにしていた。資料を指で弾き、指摘するエヴァンジェリンの口元が妖しい弓張りの形に笑み曲がる。

「ククツ。まあ、あの状態で外に出すなど出来るわけがないだろうな。とつくに死んでいてもおかしくはないのだから、なごむの存在が敵対する魔法組織に知れば、麻帆良の一般人への対応を攻められる口実となる。お前が対応を後手に回したツケだな。だが 他にも方法があつただらう？」

近右衛門もエヴァンジェリンが言わんとするところは理解していた。

それは魔法を秘匿される側から秘匿する側へと、つまり魔法使いへと彼を引きこんでしまうという選択肢だ。近右衛門が信用できる誰かに彼を弟子入りさせればいいのだ。

麻帆良内における事実関係など、近右衛門であれば簡単に取り繕える。本国に報告するのは近右衛門であるし、事情が事情だ。本国への帰依意識が低く、口が固い者に宮崎なごむの事情を話して任せ

ればいいだけのこと。さすがに候補となる者は少ないが、いないわけではない。

だがそれも彼はやっていない。

「母親の件に関しての説明を恐れたか？　ここにある資料の限りであれば殺したのは侵入者側で麻帆良に非はなかったようだから、嘘がない限りあれの性格的に考えてちゃんと説明すれば問題はないだろう。それに情報を握っているのはお前だ。嘘があっても誤魔化しはきくだろうしな。幾度も記憶をいじったことに関してても嘘を交えて事情を話せばいい。それで事足りる。だがお前は、宮崎なごむを魔法に引きこんでいない」

エヴァンジェリンの笑みが深くなった。

近右衛門は組んだ手で口元を隠すようにしてそんな彼女を見ている。エヴァンジェリンのそれはすでに、答えを持っている者の表情であった。

「宮崎なごむの潜在魔力量は一般人の半分。魔法使いの家系一般でみれば四分の一以下だ。気の量に至ってはさらに少ないうえ、身体能力も一般人で比べても低い。……欠片も才能がなくて、誰も弟子にしたくなかったのだろう？　それで見殺しにし続けたな？　ええ？　『正義の魔法使い』　いや、『立派な魔法使い』殿」

本国への帰依意識が低い者は実力主義者が多い。そんな者達が才能の欠片もないどころかマイナスな者を弟子にするなどと、受け入れるはずがなかった。いてもすでに手が埋まっただけで、どうにも出来そうになかったのだ。

「……時間や人手がなかったのじゃよ。魔法を教える手間や時間がどれほどかかるか、エヴァならわかっているじゃろう。麻帆良の警

備も人手が足りなくて、封印された君を頼っているほどじゃからの」
「……ククツ。そういうことにしておいてやるう。ただな、それならば私が魔法を教えても問題は無かるう。宮崎なごむを私が弟子に取り、保護するぞ」

近右衛門の眉が顰められる。

エヴァンジェリンは記憶を消さないと言った。だが消さないだけで、まだ他の口止め策も存在するにはするのだ。それをわざわざ真祖の吸血鬼にして、魔力さえ解き放たれば最強の魔法使いである彼女が師となることを申し出るなど、思ってもみない話であった。

如何に魔力を封印されようと、エヴァンジェリンの魔法戦闘技術は魔法界最高峰の一角だ。現在は自身の魔力の代用品として魔力を封入した魔法薬で戦うことしか出来ないとはいっても、この麻帆良で一对一で彼女に抗えるのは近右衛門を始めとした一部の上位陣しかない。

一番の実力主義者は彼女のはずなのだ。

だが例の『彼』に彼女の魔法を教導することも考えていた近右衛門にとって、それは前例が生まれるため悪い話ではなかった。

ゆえにそれほど深く考えず、了承した。

「構わんが、どうしてじゃ？」

「言質はとったぞ。まあなに、たまには後継者を育ててみるのも一興だと考えただけだ」

「こ、後継者じゃと？」

潜在魔力量は修行してもほとんど増えることはない。魔法に絶対必要な才能だ。それが先天的に少ないということは、それだけ才能がないということである。魔法使いとして致命的な弱点だ。なにせ

事は体内に留めておける魔力貯蔵量だけの問題ではなく、一度の魔法に込めることが出来る魔力出力量もこの潜在魔力量に比例して上下する。その出力量の差は貯蔵量の差よりも小さなものではあるが、数も質も劣ることが決定しているようなものなのだ。

そんな彼を弟子にして、言質すらも取り、あまつさえ『後継者』と嘯くなど、絶対的な魔力量と技量、そしてその不死性で魔法界に知らぬ者無しとなったはずのエヴァンジェリンの考えが、近右衛門には理解出来なかった。

「ああ。後継者だ。私の魔法技能を全て叩き込んでやるよ」

「本気でいっとるのか？」

「ああ。本気だ。あいつは天才だよ。もはやバグと言っていていい。なにせ」

エヴァンジェリンがその懐から丸いガラス玉のようなものを取り出す。

と、途端にそれは大きくなって学園長室を取り囲む結界となった。

その中で起きた事態に、近衛近右衛門は驚愕し、冷や汗を流す。

封印されているはずのエヴァンジェリンの魔力が、全盛期のそれに近いほど内部に充満していた。

「これは魔法球作成の技術を応用して、私が作り上げた物だ。この魔力が外に漏れることもない。結界としても一級品だ。そしてこれの理論を考案、術式を構築したのが……魔法に触れてたった数日の宮崎なごむだ」

ダイオラマ魔法球という物がある。

魔法世界でも非常に貴重で、最高級品ともなると購入金額で三世代が遊んで暮らせるほど高額なそれは、その金額に見合った性能を持っている。

その性能とは、異空間の作成と維持。

特にエヴァンジェリンが個人で所有しているそれは彼女のお手製の最高級品で、現実時間での一時間を内部時間にして一日に置き換え、広大な空間を提供する事を可能にしていた。その上福次的効果として内部に魔力素が充満しており、魔力を封印されたエヴァンジェリンも魔法球内では完全とまではいかなくても復調出来るのだ。つまり魔法球内にいるエヴァンジェリンはかつての最強に近い状態となり、ほぼ敵無しのチートモードになることができた。この中で彼女に逆らうなど、麻帆良最強と謳われる学園長近衛近右衛門でも差し違えるつもりでなければ出来ないのだ。

そんな魔法球内になごむが連れてこられて二十日ほど、外部時間で二十時間ほど経過したところで、自室として割り振られた部屋で魔法書を読み漁る彼に近づく影があった。

「おい、なごむ。経過の方はどうだ？」

授業を終え学校から帰ったこの場の主、エヴァンジェリンだ。後ろには茶々丸が控えており、彼女が押してきたカートの上でお茶の用意を始めている。

「うあー？ あー二人とも、おかえりい。解呪の術式はまだ出来ないよ。学校はどうだった？」

「ちつ、まだか。早くしろ。近右衛門にはお前が言っていた通りに説明しておいたぞ。疑っている様子はなかった」

「なごむさんの欠席連絡はしておきました。明日もお休みということではよろしかったでしょうか？」

茶々丸が二人分の紅茶をいれて、なごむがこちらに来てから焼いたクッキーをテーブルに並べていく。

「茶々丸さんありがとう。それをお願い」

一口紅茶を含み、寮の自室にあった自分の茶葉とは段違いな味と香りに相好を崩すなごむ。それから同じ紅茶を憮然とした表情で少し冷めるのを待つエヴァンジェリンに向き直す。

「魔法関連をまったく知らなかったということ以外、魔力量とか全部本当のことだからね。学園長も関与していることだし、記憶消去とかは疑いようがないんですよ」

エヴァンジェリンが近右衛門に語った話は八割以上真実だ。母のことも、記憶消去のことも、紛れもなくこのなごむに起きた事件であり、これまでのなごむを形成してきた過去であった。

ただすでになごむはそれらの事実をあの儀式魔法の時点で知っており、消失した記憶も過去の自分と同期することで脳細胞ごと復元させて理解し、自分のなかで昇華してしまった事実となっていた。

過ぎたことは過ぎたこと。他世界の『なごむ』が全ての世界から失われ、その幸せも不幸せも『そうであった可能性』となりなごむの内以外から消滅したのも過ぎたことであり、この世界のなごむにすでに起こった不幸も過ぎたことなのだ。今の彼にとって重要なのは現在の自分が大切な極一部の者が望む通り（……）の幸せで

あり、彼が人を超越した存在となりながら人で在り続けるのも、そんな誰かの無意識の願いからであった。

そして彼が為そうとしていることも、その為すことの矛盾も、誰かの望みであり、大切な人を大切だからこそより大切に想い、人で在り続ける彼の望みであった。

ただ人であるが故に、体を不老不死化しようとも人の限界を超えることが敵わず、その神にも等しい能力を十全に振るって望みを叶えることが出来ないという、新たな矛盾を抱えることとなってしまっていたが。

「私としてはお前の演技になんぞ付き合わず、さっさと解いて欲しいのだがな。そのような演技などせずとも、お前であれば目時詩緒達を守ることぐらいわけがないだろう？」

「それは同時に、実力を教えてやる必要もないということでもあるんだよ、エヴァ。現存する術式から発展させて、かつ自分の魔力量で出来る解呪魔法を作り、エヴァが英雄殿と交わした約束や勝手に魔力抑制式を組み込んだことを盾に、エヴァ自身かもしくは身内が解呪すれば学園長はぐうの音もでないんだしさ。それ以外の犠牲を伴う方法や、事象変異能力を初めとした彼らに理解出来ない方法でやると、隙を作ることになるし自分の本当の実力を疑われかねない。だから少しの間はその魔法球で我慢してて」

「私はお前の本気を見せて示威活動をした方が、効果的だと思うのだが」

「自分の『可能性』を操る事象変異能力は万能だけど完全じゃない。そして自分の目的は闘争じゃないんだよ。今の自分の本気なんて見せたら、それこそ魔法世界から軍隊がやってくることになる。発明だけが能の多少我が俚な甘ちゃん。でもって政治的には操作可能と思わせないと」

事象変異能力。それが例の儀式魔法によってなごむが獲得し、自

身や詩緒を不老不死化させた力の名前だ。

ノーリスクで願った物事を、願われた物事を、そのとおりに実現させる、まさしく正しい意味で神の如き力だ。

だがこの能力は神の領域であるが故になごむが人で在り続ける限り完全ではなく、出力にはさほど問題は無いが、主に規模の面でスケールダウンを余儀なくされていた。例えば目の前の真祖の吸血鬼を消そうと思えば一瞬で消せるが、麻帆良をまるまる一瞬で消すことは出来ない、みたいな状況だ。

そして心身を操ることも出来るが、なごむは過去の経験からそれを好ましく思っていない。確かに彼にとって過去は過去であるし、少々人間を逸脱した思考を持つてはいるが、人として、宮崎なごむとして存在する以上どうしても嫌悪感が生じるのだ。

さらに人であろうとしているが故に、この事象変異能力もなるべく使用は控えたいという思考が生まれている。

この麻帆良での目的のことやそれらの要素があつて、なごむはこの能力を半ば封印していた。

「やってきてもお前なら対処可能だろうが。私も協力してやるぞ？」

エヴァンジェリンの言葉に、なごむはこれ見よがしに溜め息をつく。

「そしたらこの日常が壊れるでしょうが」

なごむは目的の為に、エヴァンジェリンに意見できる立場を得ていた。

二カ月前の儀式魔法とその結果、彼が新たに作り上げた転移魔法などの情報や、エヴァンジェリンが抱える学園結界による魔力抑制の事実の開陳と、登校地獄の解呪に関する契約。それらに対価になごむは彼女がとる行動を逐一報告で受け、意見する権利を得られる

ように契約したのだ。

エヴァンジェリンに関する情報は大量にあった。詩緒の前世知識と彼女が麻帆良に来る前に集めていた情報だ。元々彼女はそれらを使つて真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンと接触。自分の血や呪に関する知識などを対価に吸血鬼化で延命を図るつもりでいた。

だがそれは別の形で叶つてしまい、これら宙ぶらりんとなつていた情報をなごむが再利用した。

そしてなごむの目的は単純。詩緒の目的である復讐の補助と、例のクラスにいる彼の大切な人の日常を見守り、本当に望まないことを排除することにある。それが今の彼女の望み(･･････････)だからだ。

そのうえで邪魔になると同時に利用出来るのが麻帆良上層部というのが詩緒となごむ共通の見解であり、さらにあと二月ほどでやってくる詩緒の^{サル}実兄、ネギ・スプリングフィールドであるとした。

そしてそれらを利用及び抑止するためになごむが思いついたのが、魔法側と一般側の両方からの介入であった。

能力や性格的なものも考慮して女性でありあのクラスに潜入しやすい詩緒を一般側へ、なにが起きても対処可能ななごむが魔法側へと行くとして、麻帆良上層部や将来的にネギに影響力を持つに至るであろうエヴァンジェリンとなごむが接触。彼女に対し抑止力を得ることで危険の一つを取り払い、自身も行動しやすくしたのだ。

その上で彼はエヴァンジェリンにも嘘を吐いていた。詩緒が魔法関係者ではないと言って、彼女とその友人達を守る対象であるとしたのだ。

まるで詩緒を守ることが最大の目的だあるかのように思わせるのだ。

実際のところ、詩緒の現在の實力はなごむの不死化などを初めと

した加護もあり、全力全開のエヴァンジェリンに匹敵するものとなっている。とつくに魔法側の存在であるし、わざわざ彼が直接守護する必要など無いと言っている。

だがバカ正直に本当の守護対象を教えるのは、後になにがあるかわからない。手札を伏せておくことに越したことはない、彼は嘘を吐いていた。

「ふん。まあいいさ。魔力魔法球を見せたらジジイも顎が外れそうな顔をしていたしな。あれは笑えたぞ。魔法球制作技術にこんな使い方があったとは。これは魔法具界に革命をもたらす発明だ。魔力が少ない者でも運用技術と資金さえあれば高みに上り詰められる。元の実力があるものはそれ以上になれる」

本来の能力を隠し、いくつかの条件を守りながらだとエヴァンジェリンの解呪には少々時間がかかる。そのため契約の前払いとして提案したのが魔力魔法球であった。

「作る技術と資材さえあればそれほど難しいものでもないんだけどね。でもこの魔法球に使われている異界結界技術があつて、魔力薬や魔法薬の制作技術もあるうえ、魔力供給という必要に迫られていたエヴァが、これらを組み合わせることに気付いていなかったのは意外だよ」

魔力魔法球の原理は全て既存のものの組み合わせであり、なごむはそこに少々のアレンジを加えただけの代物のつもりでしかなかった。

「私は魔法の開発はやってしたが、魔法具の開発は専門ではない。それでもそこいらの一流を語る俗物より知識も技術もあるが、お前の発想力が異常なのだろう？ それに簡単に言うがな、思いついた

としてもお前がオリジナル転移魔法にも使っているあの空間安定用の多胞体術式、ほとんどブラックボックスじゃないか。原理は確かに現行の平面術式の発展だと理解出来るが、立体も多面体も球体も飛び越えて、構造を単純図形化できない上位次元多胞体だぞ？ あれは組めと言われて組める物ではない。私ですらそういうものだとは理解出来るだけだ。人間の創造力の範囲内だが、創作できる範囲は逸脱しているよ。それなのに例の平行世界とやらの技術流用もしていないのだろうか？」

「うん。まあ。思いつきで作ったし」

多胞体術式とは、なごむの体に刻まれた時空間パスを基盤にして作り上げた特殊な魔法式のことだ。その構造そのものが上位次元体のため、計算上では想像できるが実際に構造体として創作するのは不可能なはずの代物である。

彼はこれを用いて、魔力ロスや余剰放出がほぼ存在しない転移魔法や結界魔法を作り上げ、事象変異能力の代わりとしていた。

「アリアドネーを始めとした研究者共や技術屋共からすれば、魔力魔法球そのものよりもこの多胞体術式の方が革命だろうな。精霊への魔力譲渡がないうえ、符なども違い魔力ロスがゼロに等しく、少量の魔力で高い効果が期待できる。欠点としては現状お前ぐらいいしか構造を完全に想像できないから発展性が欠けることと、同じ理由でお前が式を組み込んだ道具がないと使えないという点か」

つまりなごむが思っていた以上にアレンジが過ぎたらしい。

「そういうもん？」

「そういうものだ」

「ぶっん」

「ああそうだ。ジジイがな、今晚会って話をしたいそうだ」

「うん、わかった。んー、でもそっか、多胞体はやり過ぎか。学園長だけじゃなくて一般魔法使いにも理解出来た方がいいから……：そ
うなると今の解呪案を一度見直さないとだ。魔力運用効率悪くなる
けど多胞体以下のランクでやるとしたら多重球体かな？ いやでも
それも行き過ぎか……：ここは立体をすっぱり諦めていっそのこと通
常の平面術式で……：期間は一年を目処に……：」

「ちよつと待てなごむ、それは別に気にしなくていいことだ。見直
さなくていいからさっさと私の呪いを解け。一年など待てないぞ！」

聞き捨てならない言葉を耳にし、エヴァンジェリンがカップに伸
ばしていた手を止めて叫ぶ。

「ダメだよエヴァ。ちゃんとわかるようにやってあげないと」

「やれ！ 多胞体なら数日で目処が立つと言っていたじゃないか！」

「ダメ」

「やれ！」

「ダメ」

叫ぶエヴァンジェリンを横目に、なごむは歯牙にもかけないとい
う風に椅子に深く腰かけてくつろぎ、紅茶にミルクを入れて変化し
た味わいを楽しむ。さて次はクツキーを漬してもしやりと……：とい
うところでそんな態度のなごむにエヴァンジェリンが爆発した。

「強情な！ 力尽くでもやらせてやる！」

「痛いのでヤだから遠慮しとく。どうせやってもまた「お前は防御ば
かりで面白くない！」とか言うんでしょ？ それにその沸点低いの
直しなさいって言うてるじゃないか。子どもじゃないんだからすぐ
暴力に訴えないの。十五年も自由を奪われ続けて苛立っているのは

わかるけど、短慮は美德たり得ないよ」

うまいうまいとクツキーを貪るなごむ。

「こ、のおおクソガキがあ……私に説教だとう……?!」

「この間も言ったでしょ。自分がエヴァに接触したのは、君もまた自分の庇護対象に勝手な暴力を振るいかねない存在だからだよってそれをさせないために苦言を訂するのは契約の範囲内だから、意見に腹たてたって理由での決闘も受け付けなないよ」

「私は女子供は殺さんといつとろうが！ 元から目時詩緒に手出しせん！」

「殺さないだけで血は吸うし記憶も消すでしょ。自分の目的の為にあれば利用もするしね。それに庇護対象にはおシオの友達も含めているんだよ。エヴァは調子に乗ると自制が効かなくなるところがあるみたいだから、なるべくそういつた危険行動は控えてもらえるように、慎みを憶えてもらいたいんだ」

「ああ言えばこう言う！ 本当にかわいげがないな！ 私は悪の魔法使いで吸血鬼なのだぞ！ 体面上とはいえお前はもう私の弟子なのだぞ！」

「別に悪の魔法使いも吸血鬼も否定してないじゃん。エヴァが持っているやつたらやり返される覚悟も理解しているつもりだよ。それの上っ面を正義で塗り固めないと立てない輩より、自分の欲を理解している悪の方が断然かつこいいし、吸血鬼は血を吸うからこそ吸血鬼なわけだしね。」

あ、知ってた？ 悪も鬼も、元々は強いことを示す意味合いの方が強い漢字だったらしいよ。

ところで、紅茶冷めちゃうよ。いらなきゃもらっていい？」

「う、ぬ、そ、そうだったのか。紅茶はやらん」

「なごむさん、おかわりお容れしますか？」

「お願いします」

エヴァンジェリンが自身の紅茶にやっとな手を付け、ほっと一息吐く。

「でもさ、女子供を殺さない主義にしても、エヴァの私欲で利用されて不幸になっている人が出て来るんじゃない、主義としてちよつと安易じゃない？ あれはどうかと思うんだ。エヴァは生き地獄を知っているわけだしさ。何も知らない他人からするとね、あれは主義っていうよりも、建前とかその辺を声高に語っているように見えちゃうよ」

「そう見えるか？」

「うん。悪の矜持を保つのならいつそ殺した方がそれっぽいと思う。エヴァは悪党じゃなくて悪、つまりは象徴なわけだしさ」

「ぬうう、だがなあ、私としては刃向かってきたわけでもない弱者を殺すのは……」

「だったら、やっぱり利用すること自体を自粛するべきだと思うんだよ。無関係な人間は無関係なまま放置。絶対に手を出さず、エヴァのことをちゃんと知って立ち向かってきた者のみを相手にする。それにエヴァ個人としての欲望は、エヴァ個人の暴力のみで掴み取った方が実力を示せるでしょ？ あと人間を殺すのって結構簡単だから、もっとこう……そうだな、大量破壊かな？ そんな感じの派手さの方が悪の象徴っぽいかも。いや、大儀ある悪？ 霸道？ なんかそつち系かな？」

「……お前の言いたいことはわかるがな、なごむ。過去教会によるの魔女狩り然り、正義の魔法使い達の制裁然り、奴らは自分達の欲望と都合の良い面しか見ないのだぞ？ お前の示した道にどれほどの意味があることやら……。それに私は覇を唱えたいわけではない」
「なに言ってるんの、絡繰さんがいるじゃない。現代は情報化社会だよ。魔法使い達ですらマホネットの時代だ。電子的なアプローチからの記録を利用して、それこそかつてのカトリックのようにプロパ

ガンダ。情報戦だよ情報戦。エヴァがどういった種類の悪であるか、知らしめてやるのも手だと思うよ。そして最終的には気に食わないのを叩き潰して、エヴァが認める正義のみを残してやるのさ。これってなんかすっごく悪っぽくない？ まあ、ただ暴れるだけだとあっちの都合良いようにされちゃうけど、それを逆手にとればいいわけだしさ。それに相手がやってくることに屈していたら、それこそ小者じゃないか。弱腰になっちゃダメだよ、エヴァ。まあ慢心もダメだし、覇を唱える必要も無いと思うけど、静かな情報戦はやっておいて損はないと思う」

「ぬうう、はいてくはわからん。その辺りは茶々丸に任せる」

「マスターの意のままに」

「ハイテクはあんまり関係ないけどね。そうだ、解呪のために真祖の吸血鬼の構造を調べたいんだけど、新しく作った解析用の魔法かけていい？」

「……ああ、構わん。とにかく解呪を早くしてくれ」

「おーけーおーけー。じゃあちいっとリラックスしてねー。……とここでエヴァは成長したい？」

「なに?! 出来るのか?!」

「時間かかるけどたぶん」

なんだかんだで二人の仲は良好であった。

ノックと入室応答の後、深夜に差し掛かった麻帆良女子中等部学園長室の扉が開いた。

「失礼します。近衛学園長先生」

「遅かったのう。宮崎なごむ君」

エヴァンジェリンとの話で学園長が呼んでいると知ったなごむである。

彼は近右衛門の言葉に目を瞬かせると、にっこりと笑い遅れた理由を語った。

「てっきりお迎えが来るものだと思って、エヴァの家でくつろいでいました」

「それは済まなかったのう。気がきかんで」

「ええ、ほんとに。明日は平日で学校あるんですよ？ それなのに人伝で夜に呼び出され、時間指定もなければ場所が女子校舎の学園長室なのに迎えもない。普通、男子生徒が夜間勝手にここに入ったら変質者扱いじゃないですか。この内容で迎えを用意する予定がなかったとか、犯罪歴作って追い出すつもりだったんですか？」

「ほっほっほっほ、担任の先生から聞いていたよりも中々毒舌じゃのう。いや済まなかった。これは完全にこちらの不手際じゃわい。ほれ、立っておるのも疲れるじやろう。そこにかきなさい」

「ありがとうございます。はあどっこいしょ。エヴァの家から徒歩だと、やっぱり少し疲れますね。ああ、ところで、えっと、先ほどからずっと読心魔法使われていますけど、これって行使権も相手の同意も無い場合は魔法界では訴えられましたよね」

言われた通りにソファに腰かけ、お茶もないままに彼は卓上にあつた茶菓子の封を開けながらも喋り続ける。

「フオツ?! …………… 実際に心が読めてしまった場合はの」
「無効化されたから立件にはならないというわけですか。なるほど。では過去の記憶を消去されている件については?」
「………… 一般人の魔法に関わる記憶の隠蔽は魔法使いの義務じゃから、なにも問題は無いのう」
「まあ、そうですね。記録上は規定量しか記憶消去はしていないわけですし、それがまかり間違つて致死量に達していようと知らないものは知りませんものね。自分勝手に魔法使いが作り上げた義務云々は置いておいても」

やだなにこれ美味しい、と呟きながら茶菓子を開けていくなごむ。近右衛門には最初以降一瞥もくれない。

「………… 世の中には必要悪というものもあるのじゃよ。それに事情を知らない一方から見れば悪に映るうとも、事情を知ることとで反転することなどままあることじゃ。君が記憶を消された理由とて」
「いやいや、母の件でしたらエヴァから聞かされました。自分の能力の事も、自分がどのような立場にいるかも理解しているつもりです。ですからそんな御託を並べる必要はないのですよ、学園長先生。どうせこのままいっても読心すら必要悪と権力で潰して終わりでしょうから。でも自分のような者が外部には出て欲しくない、と。ええつとそれで、自分の件についての諸々の責任はどういった形で取ってもらえるのでしょうか?」

「おほん。そうじゃのう。宮崎君は聞いていたよりも現実的なようじゃから、まずは麻帆良内での学費の全額免除及び就職先の斡旋。次に君は魔法具などの作成や設計に才があるらしいからそれに関する資料の無料提供、図書館島秘密図書の見覧許可、などかの」

「ふむ。全然足りませんね。それらの条件プラス自分の身分を麻帆良の『魔法使いではなくエヴァの弟子且つフリーの魔法使いとい

う扱いの確約。そして自分の大切な者達の安全と安寧を守る権利を。具体的には、えっと、自分の家族及び先日から麻帆良女子中等部二年A組に転入した目時詩緒周辺への政治的魔法的絶対不干涉契約と、麻帆良内における対象への護衛権を下さい。ああ、もちろんエヴァや絡繰さんはこれに含めなくていいです。さすがに彼女への不干涉は無理でしょうし、自衛能力は過剰にあるので」

「フオツ?! ……それは些か欲張りすぎではないかのう……」

転移魔法を応用した技術で魔法瓶を取り出し、暖かいほうじ茶にほっと一息つきながら。

「では学費免除と職場斡旋は要りませんので残りの許可を」

「ふおおお、それも非常に……」

「弟子の件はすでに吞んでいただけたものとエヴァから聞いていましたし、元々その場合麻帆良所属ということにはなり得ないでしょう。彼女は関東魔法協会に拘束され協力していますが、属してはいませんので。そして護衛権についても、エヴァや絡繰さんを除けば全員一般人です。魔法の秘匿や魔法からの保護は義務ということですから、麻帆良側からするとこれといって通常の対応と変わりありません。そのままのみ込んでいただいても問題が無い条件に思えますが」

「いや、のう? 麻帆良所属でない者に自衛はまだしも護衛権となると、そう簡単に認めるわけにはいかんのじゃよ。言うだけは簡単じゃが、無用な混乱や敵対を招きかねん。いきなりのことじゃし、エヴァの弟子という立場も他の魔法使い達にとっては印象が悪い。弟子入りそのものは認めだが、彼女の弟子が護衛であろうと麻帆良の意志を外れた行動をとるとなると、敵対行為と捉える者も出てくるじゃろう。何もせずとも我々の方でも一般人は守っておるのじゃから、そこまで拘ることはないのではないかの?」

「あのう、一般人であった自分が受けた、麻帆良にいる魔法使いの

対応をお忘れですか？」

「ぬ……確かに宮崎君からすると当然の要求かの。じゃがのう……完全な外部の者による護衛はちと……」

「んー、では不干涉契約と自衛すること自体は認めるということですね」

「……なぜそこまでしてそれらの権利や契約を求めろのじゃ？」

「自分の家族の安全を願うのはおかしなことですか？」

「そうは言つとらん。宮崎君が金品や将来の類ではなくそれを頑なに求める理由もわかった。ただ目時君とその周辺への不干涉契約というものの理由が見えんでの」

「まず目時詩緒 おシオは自分の友人です。そしてエヴァの家で待っている間、彼女から先日あったという強姦未遂事件の話を電話で聞いたのですが、学園長先生もご存知ではありませんか？」

「……知つとる」

「ですよね。あれは魔法使いが起こした事件、なんですよ？ となるとこの理事である学園長先生が知らないわけがないですから。そしておシオを助けた龍宮さんと桜咲さんは魔法使い側の人間であり、おシオをそのとき監視していましたね？」

「その話はエヴァから聞いたのかの？」

「聞きましたが、この予測を立てたうえで確認の為にです。こちらの世界を知っていて、事件の仔細を聞けば、事件も二人も魔法関係であることなどすぐにわかります」

「そうかの」

「んんつと、よければ続けますね。その際エヴァから聞かされたのですが、おシオの右眼には魔力が宿っているそうです。それが原因でエヴァと二人に監視されていたと聞きました。後日直接会って自分も確認するつもりですが、彼女はその右眼の影響で認識障害魔法が少々効きづらくなっているようなのです。正確には、効果が中途半端に現れている、ですね。龍宮さんが銃を持っていたことや、桜

咲さんが日本刀を持ち歩いていることを憶えていました。笑っていたので違和感は覚えていなかったようですが、銃刀法違反とかで二人が捕まらないか心配はしてました」

「フオ？ それは真かの？」

「あくまで自分の予想ですが、前述の通り少し効きづらいのは本当です。それもあつて自分と彼女は知り合いましたから」

「……なるほどのう。そういうことじゃったか」

「おシオには、自分のような目に遭わせたくありません」

「じゃがそうは言っても、すでに仲良くしとるらしい龍宮君や桜咲君は彼女と同じクラスじゃ。接触は避けられん可能性が高い。別のクラスに変えても」

「別に変える必要はありません。彼女の場合、麻帆良にいれば多少のズレは仕方がないでしょうから。ただ魔法的な接触だけは控えてもらいたいです。きっかけはどうあれすでに友人関係を築いたようですから、それを引き離すつもりは自分にもありません」

「そうかそうか、では宮崎君の家族と目時君への不干涉は」

「その周辺も含めた不干涉、です。現時点で魔法関係者となつている者は省いてもらつて構いませんが、一般人は全て含みます。つまり友人となつた者達も含みます。そうでないと、特におシオは魔法に近づきやすいですから」

「……宮崎君。お主……」

「どうかしましたか？」

「……いや。その条件じゃと少々問題があるのじゃよ。あのクラスには儂の孫娘や他の魔法関係者の娘もある。彼女達は今は魔法を知らんが、いつかは知ってしまう可能性が高いじゃろう」

「それに関しては仕方がないですね。そういつた魔法関係者及び予

備軍の方は後日リスト化して教えていただければ、おシオにそれとなく注意も促せます。ちなみにエヴァとは席が隣同士らしいですが、二次災害的な魔法接触を避けるためにすでにあまり関わるなど言っておりません。龍宮さん達と違って、エヴァは敵が多いようですので「ほっ、そうか。だが……なんとというか、過保護じゃのう。……ふう……わかったわい。その条件をのもう。だがこちらからも条件があるのじゃが」

「なんですか？」

「宮崎君に関東魔法協会に所属してもらいたいのじゃ。そうすれば護衛権も認めよう」

「……わかりました。それで護衛権ももらえて、所属時の拘束が今回の契約に支障をきたさない限りであれば、自分は構いません」

「ほっ、そうかそうか。話は纏まったかの。では今晚はそういうことで」

「えっと、では忘れない内に契約書を纏めて、契約も完了させてしましましょう。契約内容の草案は事前に作ってきましたので、魔法具資料と秘密図書の閲覧許可についてを書き起こして、フリーの魔法使いという点を消して所属部分を作り直すだけです」

言つが早いか、なごむは転移魔法で数枚の書類と筆記用具を取り出す。

「……よ、用意がいのう……」

「予習復習は勉学の基本ですよ、学園長先生。自分は誰かさん達のお陰なのか忘れっぽい性分なので、こうしてないとダメなんです」

宮崎なごむが卓上にあつたお菓子を全て胃袋に修め学園長室を退室するまでの間、終始空気のようにそこに佇んでいただけであつたタカミチ・T・高畑は近衛近右衛門の話聞き、戦慄と嫉妬を禁じ得ずにいた。

事前に話には聞いていたのだ。エヴァが宮崎なごむをバグと称した、と。

あの『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがバグと称するほど存在。それが指し示す意味は、彼が憧れて止まないかつての仲間にして英雄達、『紅き翼』のメンバーとも比肩しうる才能ということに他ならない。そのことの意味を、圧倒的な才能の差を、タカミチは本当の意味で初めて目の当たりにしたからであつた。

彼とてわかつていたつもりではあつたのだ。

エヴァはこの手のことで嘘を吐かない。彼女がそう言ったのであれば、紛れもなく天才の類であろう。

だがそれでも所詮は昨日まで一般人でしかなかった、気も魔力もタカミチより少なく体術も修めていない、魔法の術式を組むのが非常に得意な、頭が良いだけの少年であろうと思つていたので。

だがそこにあつたのは、他者との、タカミチとの圧倒的なまでに純然たる才能の差であつた。

それは潜在魔力量でもなく、潜在気量でもない。ましてや体術の才でもなければ、何かしら先天性の戦闘能力を持っていたわけでもない。むしろ彼は本当にそれらの要素は他の平均的な一般人と比べても低いものであり、持っていた先天性の特殊な能力も、どちらかといえばそれが原因となつて彼は不幸に遭い、死にかけていたとい

うのだから、マイナスな代物であったといえるだろう。

しかし圧倒的な魔法開発能力・魔力操作技術、そして単純な頭脳によって、宮崎なごむはそれらの要素を覆した。

目に見えていただけでもあの転移魔法だ。タカミチは最初あれは影魔法などにあるような倉庫魔法・空間圧縮魔法だと思っていたが、近右衛門に聞くところによると転移魔法であったという。しかも近右衛門すら見たことがない術式。つまり彼のオリジナルだということだ。倉庫魔法でも難度は高い。それが転移となると飛躍的に難度は上がり、魔力効率が高いオリジナルともなれば世紀の大発明だ。

だがそれだけではない。宮崎なごむが退室してすぐに、近衛近右衛門は転移魔法とは別の彼の異常性をタカミチに語った。

対面してすぐに行われた近衛近右衛門の読心魔法の無効化。入室後すぐに無効化と聞いて、タカミチも拙いとは思った。学園長の軽率な行動に怒りが湧いたほどであった。

すでに彼らにとって宮崎なごむが外に出るということは風評被害問題どころではなく、エヴァに作らせたという魔力魔法球のような超高性能魔法具開発者を野に放つという、新たなデメリットを生んでいたからだ。たった一日で魔法具界を席卷するような発明を行った彼を手放すなど、ゼロどころか著しいマイナスであるといえた。それなのに宮崎なごむはその経歴から、麻帆良の魔法使い達に良い印象をもっていないはずなのは確定していたのである。

故に現在以上に悪印象を与えることは絶対に回避しなければいけない事態であり、だからこそ知識のみの相手であろうと侮った近右衛門に憤ったのだ。潜在魔力量の少なさ故に魔法抵抗力が小さかるうとも、頭が回るのであれば、記憶を消された過去を持つのであれば、用心して障壁を張っていてもおかしくないのだから。

だが近右衛門は語った。障壁は張っていなかった。探知魔法でまずそれを確認したからこそ、絶対に説得を成功させるために細心の注意を払いつつ読心魔法を使ったのだ、と。

ならば何故読心出来なかったのか？

宮崎なごむは魔法障壁を張ってレジストしたわけでもなければ、内在魔力圧で押し返したわけでもない。ただ事前に作っておいた、意識介入系魔法を綺麗に紐解き無効化する術式を体内に仕込んでおいただけだ。これは言うなれば解毒薬のようなものだ。近右衛門は防ぐことを前提とした、既存の魔法障壁しか探知していなかったから気付けなかったのだ。

そして近右衛門がすぐにその事実気付かなかったのは、その一度紐解かれた魔法の矛先を近右衛門自身に向け変え再構成されていたからであった。なごむは無効化と同時に解けた魔法を縊り集め、再利用するための術式を瞬時に作り上げ放ったのだ。結果、術中にはまった近右衛門の思考は円環のようにループし、違和感を覚えることがなかった。そして若干遅れて読もうとした思考が読めていないことに気付くと同時に、宮崎なごむはその事実を彼に突きつけた。

仕込みがあつたとはいえ気付かれないように解くのも、一瞬で書き換え向きを変えるのも、麻帆良最強の一角である近右衛門にすら不可能な芸当だ。

そして彼、宮崎なごむは解毒の術式と反射時に作った術式を、あろうことか同じ読心魔法を利用したもので近右衛門の意識の中に送り込んでいた。

その意趣返しによる近右衛門の動揺は相当なものだ。近右衛門とて伊達に関東魔法協会の理事をしていない。送り込まれたその初め

て目にする魔法の情報に、今自分がされたことをすぐに理解した。反射の魔法構成が今この場で作られた物だということもわかってしまった。なぜならこの読心魔法自体が近右衛門のオリジナルであり、従来のものよりも隠密性や諜報力が非常に高い特殊仕様であったからだ。その特殊性から他人に教えたところで使うことができない、近右衛門の個人技術と違って差し支えない代物であった。そして近右衛門はこの魔法を戦闘中も使いこなす技量を持つからこそ、麻帆良最強の一角たり得ていたのだ。

それを初見で看過され、あまつさえ魔法の構成も知られてしまった。もう宮崎なごむにこの魔法や、この魔法から発展させた他の魔法が効くことはないだろう。

何十年と被り続けた狸の皮が剥がれかかっていたのが、傍目にもその長大な額に流れる汗で理解出来るほどであった。

タカミチには言わなかったが、近右衛門はこの場で宮崎なごむを殺すという選択肢も脳裏をかすめていた。

さらにそこにきてあの転移魔法だ。

どこまでも圧倒的な天賦の才。

凡才から上り詰めたタカミチにはなかった、生まれ持った力。

宮崎なごむが見せた才能の一端は地味なものだ。派手な戦闘も、一撃必殺の煌めきもない。実際エヴァの話では彼には戦闘者としての才能はほとんどないらしい。だが専守防衛やカウンターに関してはそのエヴァですらすらに一目置くほどだという。

ただ直向きな努力によってここまで来たタカミチが嫉妬を覚えるのも無理はないことであった。エヴァンジェリンの魔法球に入っていたとしても、この対談までにあったのは二十日程度だろう。たったそれだけの時間でここまで魔法をものにしてているなど、確かにあのナギ・スプリングフィールド達に並ぶバグだ。

だが、宮崎なごむは結局それ以上の攻めをしてこなかった。やはりその気質そのものが防御に向いている、もしくは根っからの開発者ということなのかもしれない。最初の策がはまったことで気をよくしたのか、自分が作ったものに驚いたことで制作者として満足したのか、言葉による牽制はあったものの、それだけで魔法的な行動はそれっきりだったという。

如何に異常な天才といえどまだ十四の子供。特に今までにない力を得て、それが目の前の大人に通用することを知ってしまえば、そこに奢りが生まれてもおかしくはない。

そして経験は何事にも勝る武器だ。特に老獪さは己を熟成させる時間がなければ得ることは出来ない。

だからこそ近右衛門は途中からペースを取り戻し交渉を続けることが出来た。

宮崎なごむの求める物が少々意外であったが、リアリストになれそうでありきれない、欲しいのは身内の安全、そんな心根の優しい少しませた子供の本音が垣間見えたのも大きい。

そういった優しさは非常に御しやすいものだ。近右衛門は圧されているように見せながらも誘導し、そして今回の交渉の最低条件である彼の麻帆良逗留から、さらに進んだ麻帆良所属までこぎ着けた。意外なことに、彼に近右衛門達を忌避する感情があまりないようだったことが幸いした。

宮崎なごむの魔法開発技術はたった一人で魔法世界にある魔法学術都市、アリアドネー全体と同等かそれを凌駕している。これほどの人材を条件付とはいえ、秘密裏に入手できたのだ。近衛近右衛門もまた彼の才に恐怖と戦慄を覚えたものの、交渉を終えた今の表情は福祿寿もかくやなものとなっていた。

そんな近右衛門に、タカミチは煙草片手に問いかける。

「学園長、でも良かったのですか？　あのような条件を呑んでしま
つて」

「ほっ？　彼の家族や目時詩緒周辺への魔法不干涉のことか？」

「ええ。あの約束を守るとなると、いくら関係者や潜在的関係者を
除外できるからといって、『彼』の件に問題が出ませんか？」

「まあ問題ないじゃろ。彼は随分と詰めも性根も甘いようじゃから
の。あれはなんだかんだと言いながら大を切り捨てられるタマでは
ない。彼自体をあのクラスに関わらせ、最初は魔法的に不干涉であ
ればいいわけじゃよ。彼自身はすでに麻帆良の魔法使いなわけじゃ
しな。それにじゃ。彼は義姉である宮崎のどか君よりも目時君のこ
とを気にしておるようじゃから、彼女一人を魔法側に自主的に来る
よう仕向ければええ。目時君さえこちら側に来させることが出来れ
ば、後は成り行きでどうとでも出来るじゃろうしの」

「ですがあの内容ですと、その自主的にとというのが難しいのでは？」

「ほっほっ、目時君の部屋、まだ決まっていなかったはずじゃと思っ
たが、どうだったかの？」

「まだですが……それがどう」

「ほれ、一人で二人部屋を使っておるあのクラスの娘がおったじゃ
ろう。後はそれとなくエサを蒔くだけでいい」

「……ああ、なるほどそういうことですか。たしかにそれであれば
独りでに魔法に関与しそうですね」

タカミチは老獺という言葉の意味を噛みしめる。

「如何な天才といえど、完全に消された記憶は取り戻せんじやろう。
彼に使った魔法は脳内の細胞自体を消滅させるからの。存在しない
物を作り出すことは出来ん。仕方がないことだったとはいえ、それ
が生きたわい」

『ていう会話が今頃されていると思うんだ。だからおシオは引っ越しの準備しておいて』

『そんなに上手くいくもんか？』

『大丈夫じゃないかな？』

『疑問系かよ、存外に不確かだな。まあいいや。準備しとくよ』

『うん。お願い。じゃ、おやすみー』

『ああ、おやすみ、なごむ』

独自の秘匿性が高い念話を切り、少年は一人エヴァンジェリン宅までの道に行く。

その後ろ姿を、物言わぬレンズがじっと捉えていた。

第5話・千雨

長谷川千雨が彼と会ったのはほんの二カ月ほど前のことだ。突然携帯に未登録のアドレスからメールが届いたのが最初であった。

？麻帆良に違和感を覚える方へ

明後日の日曜日に麻帆良第二会館で開かれる麻帆良学生絵画展に来て下さい

時間はそちらにお任せします

時間が決まったらこのアドレスに返信を下さい

男子中等部二年宮

崎なごむより？

これを読んだ瞬間、千雨は恐怖し、警戒した。当然だ。見知らぬアドレスからほぼ本人指名でメールが届くということは、相手はこちらを知っているということだ。そしてなによりも、周囲との密な人間関係をほぼ断っている千雨のアドレスを知っている人間など限られている。というよりも家族だけのはずなのだ。クラスメイトに教えると強制的な呼び出しがありそうなので、千雨は彼女達に携帯アドレスを教えていなかった。

だが同時に興味も引かれた。

千雨を指名しているとわかる最初の一文。麻帆良への違和感というものに心当たりがあった。いや、心当たりというよりもそれはすでに彼女にとって一種のトラウマとでもいうべきシロモノであり、湧いた興味はすぐさまさらなる警戒心へと変換された。

なぜならその違和感なるもの、つまりは麻帆良という場所に蔓延

る非日常に彼女の精神は追い詰められ続けており、自身の中にある日常と周囲に広がる日常（非日常）との差違によって生まれる軋轢でストレスを感じない日などなかったからだ。それに小学校の頃はそれを主張したせいでイジメられたこともある。もしまたこの違和感を外部へ出した場合に、異常であるのは千雨の方だと言われてしまうのが怖かった。

彼女、長谷川千雨は宮崎なごむと同じ、麻帆良学園結界と魔法使い達が呼ぶ認識阻害結界が効かない希有な人種であった。

故に誰一人としてその違和感を共感する者がいない中で突然手を差し伸べられても、新手の非日常が攻めてきたとしか考えられなかったのだ。

事実その考えは間違いではなかったのだが。

だが警戒心へと変換されてなお幾ばくか残った興味に則り、最後に記載されていた名前を調べてみると、すぐにそれらしき人物は知れた。

麻帆良の学生によって発行される麻帆良学生新聞のウェブ版に、同じ名前が載っていたのだ。

実際に宮崎なごむなる人物は同学区に存在する麻帆良男子中等部の二学年に在籍しているらしく、毎年開催されている麻帆良学生絵画コンクールでここ四年ほど麻帆良賞なるものをとり続けていた。招待された麻帆良学生絵画展では、このコンクールで一定以上の判定を得た作品を公開展示しているらしい。その関連で記事と顔写真が掲載されているのを見つけた。

聞き覚えのない名前。見覚えのない顔。どう考えても長谷川千雨の知らない人物であった。接点をざっと調べた限り同じ小学校であ

ったこと以外には見当たらない。憶えがないということとはクラスが同じであったこともないはずだ。唯一名字にだけは聞き覚えがあったが、比較的よくある名字であり、同じ名字のクラスメイトの彼女とも千雨はあまり話したことがない。

だがとある画像を見つけた千雨は、それを見た瞬間に心臓を鷲掴みにされたような感慨を覚えた。

それは宮崎なごむが過去に麻帆良賞を取った四枚の絵の写真であった。

全て麻帆良の風景やそこに住む人間を描いた物で、それは都市部であったり、学園校舎であったり、森であったり、通学風景であったりした。だがその全てに共通するものがあつたのだ。

絵のバツクにある異常に巨大な木と、『不思議な風景』と題されたタイトルだ。彼は全ての絵に同じタイトルをつけていた。

さらによく見てみると、各絵の中には日本の日常で考えると異常な光景が何点か描かれていることにも気が付いた。人垣の中から舞い飛ぶ人影。工学部校舎らしき場所より昇る黒煙。何隻も空に浮かぶ飛行船。何か強力な一撃で抉られたような傷を持つ木々。路面電車で掴まりながらスケートボードで通学する生徒に、ローラーブレードやそれに足で並走する生徒。

麻帆良に住む人間にはわからないであろうそこに込められたメッセージに、千雨は泣きそうになるのを堪えながら他に彼の絵がないか調べた。

宮崎なごむなる人物は小学校低学年のときからすでに絵の才を示していたらしく、その頃から何点かそれぞれの学年に応じたコンクールで賞を獲っていた。ほとんどは画像がなかったが、いくつも見つけられた物もあつた。ここ最近の物でも麻帆良学生絵画コンク

ル以外への参加も多くあり、どこでもそこそこの成績で入賞していたため、過去の上位入賞作品一覧の中に載っているのを数点見つけることが出来た。そのどれもが一度は千雨も異常だと感じたことがある麻帆良固有のものを描いており、彼がなにを求めて絵を描き出展を続けているのかが嫌というほど彼女にもわかった。

気が付くと千雨は返信のメールを打っていた。

そして絵画展当日、千雨は悩んだあげく制服姿で麻帆良第二会館に向かった。彼女は過去の経験から人前に出るのが好きではなく、私服もこの歳の女の子らしいものは持っていなかったため、無難なものと思つてのことだった。

予定の時間より早く着て入り口から順繰りに展示作品を見て歩き、最終的に目的地である今年の麻帆良賞作品の前で立ち止まると、彼女はあることに気が付いた。

今年の麻帆良賞も例の彼であり、タイトルも内容も麻帆良の異常を描いた物には変わらない。高校生以下の学生主体な展示のため全体的なレベルは低くなりがちなのだが、そこは麻帆良、入賞以上ともなるとプロと見間違ふほどの物がそろそろと展示されている。その中でも彼の絵は一際素晴らしいものに見えたのだが、なにかがおかしい気がした。

気になった千雨は他に並んだ作品群をもう一度見て回り、パンフレットも確認して、最後にまた麻帆良賞のところに戻って来るとやっとそれが理解出来た。

麻帆良賞はその年のコンクールの中で一番ではない。一番や二番は最優秀賞、優秀賞として存在し、それらは全国高校レベルの美術コンクールにもエントリーされるのだが、麻帆良賞はあくまで麻帆

良内部で評価された作品であるとしてそれ以上のエントリーはない。つまり外部に出ることはないのだが、どう見ても今年の最優秀賞作品よりも彼の絵の方がいい気がしたのだ。賞の評価基準も知らない素人判断であるし、絵の内容から来る千雨の鼻窟目があった可能性もある。だがそこまで考慮しても、どうしても彼女には納得しなかった。

そして思い出してみると、千雨がネットで確認した彼の絵は全て入賞はしていたが一番や二番ではなかった。

釈然としない思いで絵を見てみると、そこで同じように彼の絵を見ていた大学生くらいの男女の会話が聞こえた。

「やっぱり彼は今年も麻帆良賞なんだ」

「子供らしさが足りないかね？ でも冒険心は人一倍だしな、わかんねえな。俺的には始めて彼が麻帆良賞獲った小四のときから、優秀賞だった高校生のと比べて遜色なかったんだが」

「だよー。早熟な人は大概こちら辺で壁にぶつかるものだけど、まだ成長しているみたいだしね。見てよこの配色と立体感。大概どつちかに偏るのに、それもないわ。この盛り方はひよつとしてパテで全体デッサン作ってるのかしら？ ていうかおかしくない？ このヒビの入り方、わざとだしてるとしか思えないわ」

「わざとだろーうな、焼きと圧縮の応用だ。本来は贗作作る為の技術だ。下手すつと全体ダメにするから、こんな冒険普通はできねーよ。はあ、俺こいつ見る度才能の差を感じるわ。一昨年スゲー悔しかったもん」

「でもあの年に賞獲れてなかったら、貴方推薦きつかったんじゃない？ それに冒険しすぎなせいか、彼はデッサン力が他の分野に比べて低い気がするわ」

「だから悔しいんじゃない。俺には練習で得たデッサン力しかねえつてさ。あんときは小学生で自分よりいい絵描いたヤツがいるのに、のうのうと推薦受けてるこの身が惨めになったわ。ホント、なんで

これでもっと上行かないんだか」

「うーん、やっぱり審査員受けが悪いのかな？ 纏まりのなさとか、年齢考えて時期尚早と見られているとか？ 不思議なものね」

そう言い合いながら立体展示ブースに向かう二人の背を視線で追いながら、ほとんど理解出来なかった会話の内容を千雨は考えた。

やはりその筋の人間から見ても宮崎なごむの実力は優秀賞以上であり、だが不思議と評価が低い。ということなのだろうか。そしてどうやら宮崎なごむも麻帆良に蔓延る非日常の一種らしいことは理解出来た。小学生で高校生よりも絵が純粹に上手いとは、十分に異常と言えるだろう。その上調べた限りでは彼は男子の成績上位常連でもあった。

本来であれば千雨はこの思考に至った時点で逃げ出していただろう。彼女は非日常に触れることを極端に嫌う。自分の中の日常というアイデンティティを壊されるからだ。

だが彼女は宮崎なごむの絵を見上げて待ち続けていた。

そこに込められた想いは紛れもなく自分と同じ、自己同一性を問いつける声であることも理解していたからだった。

見上げ続けながら考えてもいた。

何故評価が低いのか。

ふと脳裏をよぎった答えに、千雨は苦笑して頭を振った。まさかそんなわけがない。そこまで大がかりなわけがない。それこそ非現実的ではないか。自分もこの麻帆良の非現実にのみ込まれて来たのだろうか、思考と視界が揺らぎ気持ち悪さを感じたときだった。

「こんにちは。長谷川千雨さん」

後ろから声をかけられた。

振り返り、声をかけてきた相手を視界に収める。そこには記事の写真で見た宮崎なごむがいた。警戒心が湧いて睨むような目つきになってしまったが、何故か千雨は得も言われぬ既視感を覚えてもいた。

「あ……こんにちは。宮崎なごむさん、……でよかったですか」

「はい。予想しているとは思いますが、例の件でお話があります。ですがその前に、とりあえず外に出ましようか。ここは絵の具の匂いが酷いので、慣れない方にはきついかもありません」

「……はい」

確かにこの場所は絵の具の油の匂いや人の熱が充満しており、千雨も胸がむかむかしていた。先ほど感じた気持ち悪さもこれのせいだったのかもしれないと彼女も考えた。

そして彼に着いていきながら、もしか先ほどの気持ち悪さが顔に出ていたのではないか、彼の絵を見ながら顔を顰めていたりしたのではないだろうか、それで気を使わせてしまったかも知れない、気を悪くさせたかもしれない、などと思考が巡らせつつ、当日中であれば何度でも入館できるチケットを片手に第二会館を出て、同じように外に出て休憩しているらしき人達が集まっているオープンテラスがあるカフェテリアに向かう。

常連なのか宮崎なごむはその店員らしき男性に手を振ると、男性が手で示した奥の席にかけた。千雨も彼と向かい合うように席を取った。

それぞれ注文をとり、お冷やをちびりと飲んでから呼吸を整える千雨になごむが笑いかける。

「えっと、テラスの方がよかったですか？」

「いや　いえ、ここでいい……です」

嘘ではなかった。テラス側は天気が良いせいで店内より人が集まっ
っており、日差しは気持ち良さそうだが千雨はその光景に気後れし
ていた。少し影になっているこの席の方が彼女は落ち着いた。

「普段通りでいいですよ。敬語とか、得意じゃなかったでしょ」

普段通りも何も千雨はほとんど人と話さない。若干対人恐怖症の
きらいもあり、喋ること自体が最近ではあまりなかった。それでも
仮面を被ることは慣れていたが、思ったよりも現状に動揺してい
ない割に、なぜか地であるぶつきらぼうな口調が出かかってしまっ
ていた。逆に普段であれば外で他人と話すときはもつと緊張するも
のなのに、していないことに今ごろ気が付く。先ほど彼に対して少
々の負い目を感じたはずなのに。

いや、それよりなにより、

「……なんで得意じゃないの、知っているん……だ？」

千雨は、どうせ同い年だから問題はないだろうと開き直すことに
した。いつもの彼女であれば胡散臭いと感じたであろうなごむの柔
和な笑みに、メールを読んだときよりも警戒心すら薄くなっていた。
それはもしかしたら、彼が頼んだのが彼女と同じジンジャーテイ
ーだったからかもしれない。それとも彼が今から言い出す理由から
かもしれない。もしくはその両方なのだろう。千雨は直感的にそう
思った。

宮崎なごむが、緩く握った右手でテーブルを叩いた。第一関節だ

けが当たりこつんと音を上げると、違和感が千雨の体を透過した。

「約束を守りに来たんだ」

共学制であった麻帆良小学校では、三年時と五年時の始めにクラス替えが行われる。二人の出会いはその五年時始めに行われたクラス替えであった。

出会ってすぐには行かなかったものの、あるとき千雨がなごむの絵を見たことを契機に二人は互いの存在を認め、意気投合した。他にはない唯一無二の共感、それぞれの中で閉じていた二人の心を至極簡単に繋いでしまったのだ。

そして二人は二人になったからこそ話し合い、理解していた。

如何に自分達こそが正常だと思った所で、ここ麻帆良では自分達こそが異端である。そして現状はその異端一人ずつが二人になっただけであり、数の暴力の前では手も足も出ない。だからこそこれまで通り、否、これまで以上に自分達を守るため、互いの現状を表面的にでも維持する必要があった。

同じ年のほとんどの子供達よりも精神的に賢しかった二人は、この年齢の時期に異性同士が仲良くすることで発生する問題に気付いていた。特に他に友人がいない二人である。二人が良くとも周囲が、クラスメイト達が別の意味で彼らを異端視しかねなかったのだ。

そこに悪意が無くとも、加減を知らず容赦がない子供特有の思考や行動は、ややもすれば簡単に歯止めを失い暴走する。多くの物事を傷ごと受け入れてきたなごむと違い、千雨は特にそれに敏感であった。

故に彼らはクラスメイト達から隠れながらその拙い交友を深めた。

一人じゃない。

当時の二人にとっては唯それだけで良かった。

たった一人の本当の友人である。自由に会える時間も限られていたし、傷の舐め合いもした。だからからこそ互いを尊重し、知り合い、一人であった頃よりも強くなった。

そして約束をしたのだ。

おかしいものを見つけたら、次に二人で会えるときにそれを教え合おうのだと。麻帆良の日常が非日常であることの証拠を見つけたら、絶対に教え合おうのだと。

約束したのだ。

だからなごむは儀式魔法に巻き込まれた当日に憶えていたアドレスにメールを送り、接触を図った。

そして魔法について、麻帆良について、宮崎なごむについて、現在の自分が知る限りの全てを長谷川千雨に教えたのだ。

千雨は何度か反論や反証を提示しようとしたが記憶の欠落を指摘され、五年生時六年生時の男子の席に、常に一箇所だけ思い出せない誰かがいたことを否定出来なかった。それに決まって二人が会っていたという時間に関する記憶もない。

そして彼が使ってみせた認識阻害結界やその他の簡単な魔法に、魔法の存在を納得するしかなかった。

麻帆良そのものが魔法使いの巣であり、なごむの絵が麻帆良外に出ることがなかった理由にも納得出来てしまった。あの絵を前にして、彼に話しかけられる直前想像したものがそれとほぼ同じ、麻帆良が巨大な隠蔽組織であるという内容のものだったからだ。

千雨はそれらが全て現実であると認めると、ぼろぼろと涙を流して泣いた。

泣き終えてお冷やを飲みほすとまた少し泣いて、空腹に気付き再度顔を上げたときにはテラスは閉められ、外では雲上に紺、遠く向こうでは朱が光を振り絞るように輝いていた。素晴らしく綺麗な夕日が、暖かいような寒いような、不思議な印象を伴って千雨を照らしていた。

そして頼んでおきながら一度も手を付けていなかったジンジャーティーの存在を思い出し、口を付けてから泣き腫らした目でなごむを睨め付けたのだった。

「……二年前、私とあんたはなんで記憶を消されたんだ？ 魔法に接触しただけで、二人が互いに関する一切の記憶を消す必要があったのか？ 魔法に接触したことが原因であれば、その時の記憶だけを消した方が効率的だと思うんだが」

「うん。知りすぎたことと、情報交換のせいで二人が揃っていると魔法に接触する機会が確実に増えること、そして君の利用法を見つけたからだと思う」

「……私の利用法、だと？」

「えっと、正確にはまったく別方向の性質の力なんだけど、魔法使い達から見て自分達は、同じとしか思えない認識阻害に対する強い抵抗力を持っている、ってのはわかるよね？ それはつまり魔法使い一般が使う方法では騙されないということ。魔力や気を使わずともその手の結界を看破できるということ。そして君は自分とは違い、一般的な魔法使い平均のおよそ二倍ほどの魔力を持っている。鍛え上げれば一角の物になると思わない？ 特に固有の能力は、集団での行動において司令塔役で非常に重宝するだろうね。つまり、自分の逆だよ」

「……本気で言ってるのか？」

「現在のクラスメイト、おかしいと思ったことは？」

「……ああ、うわぁ……くそぉ。あそこまるまるかよ……」

「まだ確証はないよ。でもざっと見た限り、君のクラスに関東魔法協会に正式所属ではない魔法生徒や、特殊技能持ちの一般人、魔法使いとして高い素質を秘めていたり、その片鱗を見せている同年代女子が集められているのは確かだよ」

「保護をするためって可能性はないのか？」

「もちろんその可能性もある。自分達が利用するためではなく、利用されるのを防ぐために纏めておくのは道理だから。他に才能や戦力がいかなないようにするのも重要だしね。むしろ現在まで直接的な行動がなかったってことは、多分保護が目的なんじゃないかな。なにかあつて真つ先に異変に気付くのは」

「私だからか。確かに今のところは……異常だが、魔法が飛ぶような事態にはなっていないな。なら、危険だとは限らないんだな？」

「うん」

「……だがあんたが見捨てられていたのも事実なんだな？」

「おそろくはね。彼らの真意を知っているわけじゃなし、何故自分が放置されていたのかについては保留かな。現在の状況を考えると才能がなさ過ぎて魔法側に連れ込むにしてもメリットが薄かったから、っていう可能性が高いってだけだから。あ、君の利用価値を計るための実験台だった可能性もあるか」

「……そんな風に見捨ててる奴らが、何故私達だけを保護するんだ」

「さあ、そこまではわからないよ。自分も正確な意味で魔法を知っ

たのは一昨日の話だし。追って探ってみるつもりではあるけど」

「逆に、あんたが私を魔法側に引きこもつとする最初の一手である可能性は？」

くすりとなごむが笑った。

「安心して、自分は君が望む通りにするよ。理由も報酬も入らない。自分がやりたいから、長谷川千雨の願いを叶えるよ」

ある種の異常性が覗ける発言に千雨は顔を歪め、呟く。

「……………なんで、その言葉が信用出来ちまうんだらうな……………」

だがその表情も呟きも彼に向けたものではなく、自身の内に向けたものであった。

なごむの言葉は千雨の心の内にすんと落ち着いて、彼が本当にそうするのだと彼女は納得してしまっていた。そしてそのことに不快感をまるで感じていないのだった。

「特定の人物の記憶を消したとしても、それまでにあった人間関係から来る心の成長や変化は消せないんだ。影響されて変わった好みももちろんそのままだし、記憶を消しただけじゃ消された時の感情なんかは根強く残ることになる。あまり自分に警戒を抱かなかつたみたいだし、完全に自分のことを忘れていたようだったら、君は今の話をまず全て否定で捉えていたんじゃないかな？ 非現実とか非日常とか嫌いだったし。否定出来なくなつて許容せざるを得なくなつても、状況の把握に時間を要したはずだよ。でもそうはならなかった。

きつとそれだけ千雨は、自分の仕草とかを好んでくれていたって

ことだよ」

なごむの話聞いてばかんとしていた千雨は、理解が追い付くと共に徐々に顔を赤くさせていき、終いには真っ赤になって叫んでしまつ。

「 なつ?! なに言つてやがんだ?! てめえなんて知らねえよ!」

叫んでからハツとするが、魔法で他にはまるで声が届いていないため周囲からの注目はない。目の前のなごむはにこにここと笑うだけで何も言わないので、千雨は金魚よろしく口をぱくぱくさせてからぷいとそっぽを向き、落ち着けるためにジンジャーティーのカップに手を伸ばした。

ふわりとシナモンの香りが絡まった思考を解き、舌先にぴりりとする生姜の刺激と、それを包み込むようなクリーム of 柔らかかな感触が解けた思考を再編する。すでに冷めてしまっているのは癪だが、これはこれで悪くない。冬使用のジンジャーティーはこのシナモンと生クリーム入り限ると千雨は常日頃から思っていた。

だがそこでふと気付く、宮崎なごむの前に置かれたカップの中身も同じジンジャーティーであることに。

それから思考が巡った。自分はいつからこれを愛飲するようになったのだろうか。これは紅茶としては所謂邪道系であり、どこのお店にもあるようなメニューではない。第一これはカロリーも値段も高く、自分で作ると手間がかかる。だが食事には物ぐさな千雨が、これだけは寮でも自分で入れて飲んでいた。

思い出せない。いつからこれを飲むようになったのかが思い出せ

なかった。

いや、もうすでに答えは目の前に居るのだ。ただ認めるのが冷めてしまったジンジャーティーの如く癪なだけで。

つまり千雨の理性は認めたがらないが、感情的にはやはり認めるのもやぶさかではないのだ。

「……ちっ」

千雨がカップの中身を一気に飲みほし少々乱雑にソーサーの上を下ろすと、なごむを睨んだ。

「……私の記憶も戻せるのか？」

「戻したい？」

「いや……今はいい」

「うん、わかった」

「……私の、望む通りにするんだよな？」

「うん」

「……ならこのままの私の平穩を守るのを、手伝ってくれ」

「このまま、を守ればいいの？」

「ああ、このままでいい。非日常の理由はわかったし、それに今の話だと私も半分くらいは元から非日常的な存在だったってことだろ？ 利用される危険性がある以上、外に出ただけじゃ新たな厄介事と出会うことも考えられる。当面はここにおいても人払いとやらの結果を抜けなきゃ直接の危険はないみたいだし、だったらこのままでいい。非日常もすでに日常の内だ。巻き込まれたくはないけどな。私は外野がいいだけだ」

千雨は気付かないが、この選択こそがなごむと過ごした時間があった証拠であった。自身も非日常の一端であることを受け入れる。それは彼女のこれまで（過去）が真に孤独であったならば出てこない強さだからだ。そしてこれまでの自分の常識を支えてきた、その非日常を知覚する非常識な力を否定したくないという、彼女自身すらも気付かぬ矛盾と葛藤ゆえでもあった。それに現在の千雨が本当に嫌っているのは、理解者がいない孤独だ。認識阻害された一般人では千雨が言うことを理解出来ず、ネット上にいる麻帆良外の間もここで知ったことを伝えたとこで信じない。魔法使いに至ってはまた記憶を消されかねない。

だが千雨にとってこの目の前の非日常は理解者たり得ていた。

あの絵は、間違いなく長谷川千雨の心を捉えていた。

「それで、これは可能か？」

「千雨は今の自分にとっても大切な人だからね。君がそれで幸せになれるのなら、いくらでもやらせてもらうよ」

「なっ！ ……私はあることなんて知らないんだぞ。記憶を戻さない限り、あなたの知っている長谷川千雨は死んでいるも同然だ。二人が交わした約束は教え合うことだったはず。なぜそれ以外の望みも叶えるんだ？」

「本当に死んでいると思う？」

「記憶がなければ、別人と同じだ」

「そう？ まあでも、君はこの宮崎なごむの真実をすでに知っているし受け入れている。自分にとってそれで充分だけど」

「！ ……私は、記憶を戻すことを拒絶したんだ。受け入れている

なんて、どうして言える？」

今は、と冠を付けて断ったが、千雨が記憶の復元を拒んだのは怖かったからだ。記憶を戻せば、ここにいる自分が自分ではなくなるかもしれないことが恐ろしかった。事の真実よりも、ここにいる自分がどうにかなってしまふかもしれないことに恐怖したのだ。

断っても、目の前の存在が居なくならないことを半ば本能的に理解していたから、ともいえた。

さらに言えばこれ以上の証拠が無くてもなごむの話信じていたからでもあった。

「少なくとも、話を聞き終えてなお否定していない」

「……それはあんたが他の奴に教えていないからだろうが」

「えっと、教えたとして、受け入れられる人間がどれほどいると思っ？」

母親の死の原因はなごむだ。父親がそれを許容するかどうかは微妙なところだろう。なにせ母はなごむの言う麻帆良の異常を受け入れたが為に森に入り死んだ。そして父は一度として彼の語る異常を受け入れたことがなかった。

魔法使い側に現在のなごむのことを教えて受け入れるかどうか微妙だ。能力を見せつければ存在を認めはするだろうが、それは能力の利用やそこから湧く恐怖からだ。能力の由来やこれまでなごむにしたことを思えば報復が脳裏をよぎり、彼らが勝手に猜疑心を抱くことは想像に難くない。

逆に何も知らない、関係がない者に教えれば案外あっさり受け入れられるかもしれない。だがそんなことをする必要はもちろんどこにもない。

そしてなにより、なごむは彼らがどうでもよかった。問われれば教えるのも別に構わない。だがだからといって積極的に教える理由

もない。当面は隠していた方が互いにとって有益であり平穩である。
う。

儀式魔法に巻き込まれた直後のなごむに確固たる目的意識などなく、眼前に広がるほとんどの物事に対して冷め切らずとも熱することもない思考しか持ち合わせていなかった。悪く言えば無気力。よく言えば中庸といったところだ。受け入れてしまったものの強大さに、彼の思考は人としての感覚が麻痺したような状態になっていたのだ。変化を求めるわけでもなく、ただ茫洋と流されるままそこにあること。可もなく不可もなく、あるがままであること。それだけであった。

ただ長谷川千雨には真つ先に教える理由があった。宮崎なごむが宮崎なごむという人間の過去を受け入れこの世界に生きる以上、あの約束は非常に重要なものだったからだ。だから千雨の平穩を冒すことになるうとも約束の履行をした。

つまりそこにあったのはきつかけとなるものの有無だけなのだ。

そしてきつかけを持っていた千雨は宮崎なごむを否定しなかった。記憶を復元するまでもなく、彼という事実を受け止め、棄却せずにした。

非日常を否定し自分の内から排除し続けていた少女が、今まで見た中で最大級の非常識な存在を受け入れたのだ。

現在の少年にとって、彼女はそれだけで大切な存在たり得た。

人は他者があって始めて自己を認識する。このときのなごむも、千雨という存在があって始めて一人の人と成れたのだ。

そしてその時点で唯一といっても過言ではない大切な人の不幸せを、彼は否定したいと考えたのだ。それがなんでも望みを叶えるという、少々即物的且つ露骨で色気に欠ける申し出であったわけであ

る。

自身と同じであるがためにぐうの音も出ない千雨に、なごむが追い打ちをかける。

「それに本当に受け入れられなかったら、すぐにでもこの記憶の消去と約束の破棄を願ったんじゃない？ あとは能力の消去とか」

もつともである。

「あと人間は忘れる生き物だし、成長（変化）する生き物でもあるんだよ。ちよつと忘れられたぐらいで、千雨を別人だとか言わないよ」

結局その日はカフェで食事を済ませ、携帯の番号を交換して、簡易な緊急避難装備を千雨が受け取って解散となった。

装備の見た目は安物の指輪シルバリング。中身も実際にそこいらで買った安物の指輪だったが、千雨に危機が迫ると自動発動する事象変化がなごむによって仕込まれた代物だ。後に詩緒に渡すことになる眼帯に仕込んだ多胞体式事象変異魔法ではなく、純粹な事象変異能力である。そのため魔力も気も使わないが、一回しか発動しない制限が付いていた。

千雨はそれを一緒に受け取った銀のチェーンに通してネックレスにした。

そして二人の能力上接触していることを知られると警戒され、千雨の平穏を冒される可能性が高くなるので、以降は何かない限り会わないことと決まった。

千雨もその取り決めに異論はなかった。理解者が存在する。そのことが重要だからだ。それに会えないだけで隠れて電話などは問題

ないとのことだった。

ただ少しだけ、会えないとわかったときに千雨はなんともいえない気分になったが。

だがそれから三日後、サル・スプリングフィールドが麻帆良に現れたことでごむは2 Aの存在理由を考え直すこととなる。そしてその情報はすぐさま千雨にも伝えられ、再開は早い内に行われた。

そしてさらに二カ月後、寮にある長谷川千雨の部屋に同居人がやって来ることとなった。

「つまりだな、あの糞爺はなごむを抱き込むために、千雨の認識障害無効化とオレが持っていると思っっている認識障害抵抗を巡り合わせ麻帆良と魔法への疑問を促して、そこにきっかけを作ることです。オレ達を自主的に裏に関わらせるつもりなんだよ」

「なるほど。過去の私となごむがなったという状況を作るってわけか。じゃあ私達は予定通り、逆に関わらないよう気をつけて知らぬ存ぜぬを貫けばいいわけだな？」

千雨の部屋に予定通り入居してきた詩緒の荷ほどきを終えた二人は、ジンジャーティーを片手になごむが届けたマフィンで休憩していた。

二人の自己紹介は、千雨となごむの二度目の会合時に詩緒が同行したことです。済ませてある。当初こそ何故かけんか腰の詩緒と

それに反発した千雨とで口論になったものだが、何度か秘密会合を重ねる内になごむの取りなしもあり、普通に話せる程度にはなっていた。

ただこの二人にとって普通に話せる人物というだけで非常に貴重な存在といえるため、自分達がどの程度親しいのかが互いによくわかっていなかったが。

「ああ。どのみち奴らはなごむとの契約上強行手段は不可能だし、なごむの反感を買うことを恐れているからな。必然搦め手を使って来る可能性が高くなるが、それを回避するために実はオレがいるっつう現実がある。策もいくつかもってきたから安心しな」

「だけどよく学園長達もなごむと接点があった私と詩緒を同室にしたな。最悪の可能性は考えなかったのか？」

「だからこそなんだろうぜ。奴らはなごむを一般人思考の甘ちゃんだと侮ってるからな。記憶を消去することになごむは表面上否定的ではない態度を取ったから、もしバレたとしても必要な事であった、で終わらせるつもりなんだろ。そしてそこから千雨やオレごと取り込むわけだ。ま、このタイミングでオレ達を同室にしたって事は、保護ではなく『アレ』に対する生け贄で決定だな。もうあいつらに容赦してやる必要はねえわけだ」

「……………はあ　　学園長共も大概だが……………全部、あいつの計画通りなんだな……………」

「だが行動指針を決めたのはお前だぜ？　長谷川千雨」

「わかってる。力も何もない私の保身（甘え）の為に動いてくれている二人には感謝している」

「ハンツ、オレはなごむの頼みだから聞くだけだし、どちらにせよこのままいけばどこかしらで復讐のタイミングは掴めるようになる。なによりなごむの近くに居れるんだぜ。わりい話じゃなかっただけ

だ

「……ツンデレかよ」

「よく言うぜ。お前の決めたアレだってお人好しなツンデレちゃん
じゃねえか」

くくつと笑い合う。

口は悪くとも、お互いに話の筋が通っていて敵意や嫌疑感情がない存在というのが心地好かった。

詩緒はその出自や経歴から、ほとんど問答無用で盲目的で狂った正義と戦わされるような生活を強いられてきた。

千雨も常に自分の正気を疑い続け、話し相手との会話の齟齬や常識を説いたときに向けられる訝しげな視線に心を削られ続けてきた。両者に共通しているのは不条理だ。各個人よりも周囲の問題的な部分で晒された不条理こそが、二人の過去を埋めていた。

誰にだって不条理な運命は襲いかかる。まだ生きていられた分だけ二人は幸運な方であったとも言える。だが元来二人とも理路整然とした思考を辿るタイプの人間であり、だからこそ不条理を余計に嫌うし非合理的な物事に忌避感を持つ質であった。

詩緒はその辺りも色々と吹っ切っていたが、だからといって本質は変わっていない。嫌なものは嫌なのである。

千雨は言わずもがなだ。

彼女の場合は詩緒のように本当の意味での裏をまだ見たことがない。なごむと詩緒の二人から聞いた話でしか知らず、どこまでも甘えた部分が残っている。だが彼女は知識を持ち、幻想に惑わされないうが故に想像も出来てしまうのだ。想像してしまうからこそ考え得るこの麻帆良の暗部に苦悩し、そこに晒され続けていた過去と現状を知ってからはその不条理に一人毛布の中で震えもした。こみ上げ

る怒りや恐怖に涙も流し、逆流する胃液で喉を焼いた。

互いに立場や覚悟の違いはあれど、不条理を不条理として知り、自分の中にもある不条理を認めて条理で歩こうとする二人は気があったのだ。

だけどなにより、ぶっちゃけてしまうと二人は魔法使い達によって被害を受け続けた存在であり、敵の敵は味方であり、そして、

「もう一杯」

「自分で入れろよ。ついでに私のも入れてくれ」

同じものを愛飲する同士なのであった。

第6話・謀議（前書き）

気付いたらすごく長くなってました。

第6話・謀議

「ジジイ来てやったぞ」

明日から冬休みのある放課後、数日前と同じように問答無用で学園長室にエヴァンジェリンが入ると、その後に「失礼します」と彼女の従者と弟子の二人が続いた。

部屋にいた者達の視線が、その弟子の方に集まる。

そんな視線になどまるで気付いていないかのように彼、宮崎なごむは、顔見知りを見つけると薄く笑んで会釈した。

された桜咲刹那と龍宮真名は多寡は差はあれど驚きの表情で会釈を受け取る。

近右衛門がそんな彼女達を愉快そうに眺めたあと、口を開いた。

「揃ったようじゃの。それではさっき話した内容ですでに察しとると思うが、彼が今度から夜間警備に加わることになった」

「学園長先生、お話の途中ですがよろしいでしょうか？」

だがそれは聖ウルスラ女子高等学校の制服を着た金髪の少女によって遮られた。

「なんじゃね？ 高音君」

「なぜ『闇の福音』の後に彼が着いて来たのですか？ 私達は今晚新しい魔法生徒の紹介とその魔法生徒を夜間警備に加えるための打ち合わせで集められたとお聴きしていたのですが」

彼女の近くに立つ肌黒メガネの男性教諭が一瞬止めようとしたが、彼ら以外の皆も疑問に思っていた内容だったのであえてそのまま質問を続けさせた。

「エヴァは遊軍じゃが、第二エリアの警備もしとるじゃろ。他区を主管轄にしとる者達は後回しとしても、彼女の打ち合わせ参加は必要じゃと思うたが、なにか問題でもあつたかの？」

「いえ、そうではなく」

「誤魔化す必要もないだろう、ジジイ」

エヴァンジェリンがにやついた口で割り込み、睥睨するような視線を周囲に向けた。そんな彼女の態度が気に食わなかったらしい高音と呼ばれた生徒がエヴァンジェリンを睨みつける。

「貴方は自身の身分を弁えて」

「高音君。ちよつといいかな？ 学園長」

声を張り上げた高音を高畑が止め、近右衛門になにやら許可を求めめる。

それに対して近右衛門は「うむ」と頷きで応えた。

「おそらく君が疑問に思っていることへの答えはね、彼の魔法の師がエヴァだからだよ」

その回答に、魔法使い達がどよめいた。

「どういうことですか学園長！ 『闇の福音』に弟子をとらせるなどー！」

「そうですね！ 彼女に師事させるなど、悪を増やすことになりかねません！」

「なぜそのような無謀なことを」

「第一、封印されている『闇の福音』に師など務まるのか？」

「あの方は恐そうに見えないけど……怖い人なのでしょうか？」

「へえ、これはまた……」

「……一体いつからだ……？」

だがその騒ぎを止めたのは意外な人物であった。

パンパンと手を叩き合わせた渦中の人物の一人、先ほどまで黙っていた宮崎なごむである。

その様子に近右衛門が慌てたように手を伸ばし「僕から説明を

」と続けようとしたが、気付いていないかのような態度で彼は話を進めてしまう。

「えっと、それら経緯を纏めた物をご用意しましたので、こちらをご覧ください」

そう言って彼はいつの間にか手に持っていた紙ヒコーキを学園長室の中央に向けて飛ばした。

紙ヒコーキはほんの少しだけ前進するとすぐにくるりと一回転、先頭を上に向けるとそのまま上昇し、今度は天井を突く前にまた回転して下を向くとバラリと紙束に化け、かと思うとその紙束は一枚ずつその場にいた者達の手元に落ちてきた。

突然の出来事に全員がその様子を見送って呆気にとられていた。

「式神召喚符の応用か？ 面白い術だななごむ。いつの間で作った」「さすがに分かりますか。さっき作ってみただけですけど、でもまだ甘いですね。手元に届かなかった方がいたのか、少々余ってしまいました」

誰の手にも捉えられず、足元に落ちてしまった数枚をなごむが拾い集める。

「あ、それを読んでいただければ自分がなぜエヴァを師事することになったのかがわかると思います。それとこの警備エリアに入れていただくことになった理由もありますので、しっかり最後まで読んで下さいね」

言われて未だ呆然としていた者達が手元の資料に目を通し始める。何人かが読み進めるほどに顔を青くさせて資料となごむとを交互に見たり、震えながら白くなった顔を上げる事が出来なくなるなどの様相を浮かべていた。そうでない者達は確認するように周囲を伺い、様子のおかしい者を視界に収めると困惑や憂慮、中には侮蔑の表情を浮かべる者もいた。

近右衛門とタカミチは資料に目を通すとそのどちらでもなく、唯々なごむのを見ていた。

「……学園長。ここに書かれていることは事実ですか？」

最初に口火を切ったのは、詩緒やエヴァンジェリンのクラスメイトでもある朱石祐奈の父、朱石教授だ。

「うむ。全て事実じゃ」

「彼が我々の記憶消去のせいで死にかけていたのも、そのことを学園長が把握していたにも関わらず放置していたのも、それを救ったのが『闇の福音』だというのも、事実なのですか」

次に怒りに震える手で資料に皺を作る肌黒メガネの男性教諭、ガンドルフイーニが資料から顔を上げないまま近右衛門に問うた。

「結果的には、全て事実じゃ」

近右衛門はこのとき、なごむに悪感情を抱かせないためにこの資

料公開を受け入れることにした。自分の方から説明し、誤魔化せるのであれば誤魔化したいところであったが、こうなってしまうとはどうしようもない。なごむが公開した資料にはエヴァンジェリンが確認することが出来た記憶消去回数と時間量、そしてその結果起きる可能性があった脳障害例。そして普通なら麻帆良での人生で二度三度とあるかないかの記憶消去を複数回された理由と、近右衛門の関与、エヴァンジェリンがなごむを弟子にするまでの経緯について記されていたのだ。

近右衛門にとって幸いであったのは、近右衛門は特殊一般人資料に書かれているとおりの回数と時間量にしか関与と把握をしていなかった、ということになっていったことだろう。その時間量だけでも十分に人が狂えるものであったが、あの非常識すぎる回数と時間量については近右衛門の関与について問いただされていなかった。だがそれでもなごむが人払いを抜けて巻き込まれる可能性を考慮できたはずなのにも関わらず、放置していたことは明記されてしまっていたが。

「なぜですか？ なぜ把握していたにも関わらずこのようなことを？！」

ガンドルフィーニの糾弾の声が室内に響き渡る。
近右衛門が重々しくまぶたを閉じて語り出した。

「彼の認識阻害抵抗は別格じゃ。特定の魔法効果に対してのみとはいえ、抵抗ではなく無効化していると言っても過言ではないほどのじゃ。だが彼を鍛えようにもそれ以外の彼の当時の才は乏しいとしかわからず、魔法が飛び交うこの裏に関わればすぐに命を散らせることしか想像できんかった。かといって彼を外界に出しても見出されれば利用されるのは目に見えておるし、認識阻害が効いていなかったせいで外界に出ると逆に齟齬が生まれ、彼の特異性を発見さ

れる可能性も高かった。彼は度々絵で麻帆良の裏を描いておつたからう。じゃが結局そうやってなにも決めきれないままずると引き伸ばしてしまい、以降これといって彼に不幸が降りかかったという報告もなかったため、儂の孫が魔法に触れずに暮らせているのと同様、なんとかなっているものだと思つとつた。……全ては儂の注意不足と傲慢さが原因じゃ。宮崎君には本当に済まないことをしたと思つとる。本当にすまなかつた。この通りじゃ」

近右衛門がなごむに向かって頭を下げる。

対してなごむはそんな近右衛門に許しを与えるでもなく、ただ黙つてその長い後頭部を眺めていた。

学園長室を長い沈黙が支配し、各々の心臓の音すらもつるさく感じるほどになつたところで、再度なごむが柏手を打つた。そして口上を始める。

「えっと、わざわざみなさんにこのような自分の恥ずかしい過去を公開したのにはわけがあります。まあすでにご理解いただいていると思いますが、同じ様な被害を今後出さないようにしたい、という事です。資料最後の一部学区及び寮区周辺への独自の結界展開も、自分にとって大事な人がそこにいてその人も認識阻害が効き辛い傾向があるためです。これらを吞んでいただけなのであれば、自分の身に起こつた出来事を問うつもりはありません。他の人にもすでにやっていた、という場合については知りませんが、自分からはそれだけです」

人によって打算か理解かは違いがあつたが、数人の魔法先生や生徒が言葉をのみ込み、なごむに頷いてみせる。

だがもちろん顔かない人間もいた。その内の一人、先ほど高音と

呼ばれた少女が口を開いた。

「……謝罪を、学園長先生の謝罪を受け入れないんですの？」

なごむが首を傾げる。

「自分の要求は伝えましたが」

「なっ？！ 目上の人間が頭を下げたのですよ！ そのことに対する何かしらの」

「いいのじゃよ高音君。彼は今の要求を儂が呑みさえすれば謝罪も要らないと言ったのじゃ」

「ですがっ！ 学園長先生！」

「ほっほっほっほ、すまないのう宮崎君。彼女は良い子なのじゃが少々生真面目な」

「いえ、それもといえればそれものですが、えっと、でもそうではなく、不真面目な態度の謝罪なんて要りませんということなのですよ」

困ったように、本当に困ったようになごむが頬をかきながら訂正をいれた。

近右衛門と高音、そしてそれ以外の魔法関係者達の表情が固まった。ただにやりと笑うエヴァンジェリンや、極々限られた者だけはああやつぱりといった顔をしていたが。

「……なにか儂の方で他にも不手際があったようじゃの。すまぬが、それを教えてもらってもいいじゃろうか？」

「構いませんが……。その、謝るときくらい椅子に座っていないで立って頭を下げたらどうですか？ 腰をどうにかしたというわけで

もないのでしょうか？」

至極当然のことであった。

表情が固まっていた者達の口がぽかん開いていく。

「まあ正直言つて、自分も前回お話ししたときは人の話を聞くような態度でもなかったですし、他人に言えた口ではないのですが、ですがあの時は学園長先生が入室一番にどくし」

「すまなかつた宮崎君」

気付けば近衛近右衛門が席から立ち上がり、頭を下げていた。

彼のすぐ側では高畑が冷や汗をかきながら笑んでいる。

だがなごむの表情は動かない。

「……えっと、どちらにせよ謝罪は受け取りませんよ。謝ろうと思えば前回の会談時に謝れたのです。御託は要らないと言いましたが、謝罪まで要らないと言った覚えはありません。なのに謝らなかつたのは貴方です。そして自分は要求を通しました。そのような謝罪など、今更過ぎませんか？」

それでも近右衛門は頭を下げ続けた。下げているその面で、自身の不備や見通しの甘さに眉を顰めていた。

椅子に座つたままだったのもそうだが、謝るべき時に謝らなかつたのも完全に近右衛門自身の非だ。彼はこの席に長いこと座り続けたせいで、宮崎なごむに関して何となつていたせいで、立場と状況を見誤っていた。宮崎なごむを下に見過ぎていた。今更ながらにこれまで彼に打つた手で他に悪手がなかつたかどうかを考え出す、彼次第で全て悪手に繋がりそうであることに気付き、さらに顰めることとなつた眉間を誰にも見せないように腰を下げ続けた。

だがそれでも彼はどうにかなると思っていた。

そして実際にそれはどうにかなった。

「……すみません。自分も強情でしたね。学園長先生の誠意を受け取らせていただきます」

近右衛門はこのとき思った。やはり彼はまだ子供である、と。

だがなごむも思っていた。このくらいで引いておけば今後も最後の詰めが甘くなるだろう、と。

本当はもっと責める事も出来たのだ。先の説明でもなごむの処遇を決めかねていたといったが、それであればなごむの存在を通達しておくだけでもするべきだったのだ。たったそれだけでも、だいぶ結果は違うことになっていただろう。龍宮真名が以前後方支援時になごむを見つけていたように、事前に彼の動向をチェック出来るよう処置をしておけば、記憶消去が必要となる機会は確実に減っていたのだから。

「ありがとう宮崎君」
「いえ」

近右衛門が面を上げる。それをなごむが受ける。傍目には諍いが起こらずに済んだ場面であったかもしれないが、両者とも内心は碌でもなかった。

そして未だ治まらない気持ちを持って余している者もいた。
やはり高音である。

「……ごほん。それだけではありませんわ。悪の魔法使いである『闇の福音』の弟子になるなど、許されることではありません。いくら彼女に助けられたといっても、それは結果論であり出会った当初は攻撃されているではありませんか。魔法使いは正義であるべきなのです。別に彼女に義理立てする必要もないのですから、他にいい師を見つかるなり、ちゃんと魔法学校へ通うことをお勧めいたしますわ」

「こいつは義理立てしているわけでも、肩を持っているわけでもないぞ」

それに答えたのはエヴァンジェリンだ。少女が幼女に陰の籠もった視線を向ける。

「第一その資料を読んでなお、加害者側がなごむに正義や悪を訴えるとはな。それにお前たちとて、魔法侵入者にはほとんど問答無用で攻撃を加えているではないか。そして私もそれをジジイに許可されている。」

認識障害を通り抜けてきた正体不明の存在に攻撃し、拘束した。初手に出したのは威嚇射撃だ。もしこれが一般人であったなら私が記憶処理しておくだけ。だが今回はたまたま記憶を消せば死ぬかもしれないことに気付いた。気付いたからこいつの能力を調べた。調べた結果興味深かったから生かすことにした。

お前たちだって同じ情報を得ていたら同じ様な行動をしていたんじゃないか？ 私の行動のどこに非や矛盾がある？

ああそういえば、記憶消去の魔力痕の中に、お前の魔力によく似たものがあつた気がするな」

「それ、は……」

エヴァの言うことに反論が思いつかなかつた高音の声が小さくなる。

なごむに心当たりもあるのだろう。だが高音がどういった事情でなごむの記憶を消去したにせよ、それが彼女の方から勝手かつ一方的に魔法を教えて消去したのもなければ、この場にいる魔法使い達のほとんどは彼女を責めることが出来ない。今のエヴァンジェリンの発言も彼女を責めるためのものなどではなく、なごむが本当に誰にも義理立てしていないことの証明であった。

一般人に魔法に触れられそうになったら記憶消去する。これは本来上司などの許可を求める規則となっているが、世界各地に存在する数え切れないほどの一人者の魔法使いに許可をとる対象など存在するわけもなく、彼らは個人の裁量で記憶の隠蔽処理を行うことになる。そしてその個人裁量は、一般人と魔法使いが混在する麻帆良の魔法使いにとっても魔法バレの線引きの曖昧さと発生件数の多さから非報告が常習化しており、自分こそを最上としているエヴァンジェリンも当然のように非報告自己裁量でそれらの処置を行ってきた。

それでも麻帆良でなごむのような症例が表沙汰にならなかったのは、一度に消したとしても多くて一日分の記憶、少ないと数分の記憶にしか手を出すことがないことと、大概が消去ではなく封印や改竄による処置となるため脳へのダメージも少なく済むこと。回数も一生で一人当たりが三回いけば多い方であること。そしてなによりも、問題があれば麻帆良の統治者が握り潰してきたことが大きかった。

だから魔法学校で一度は習うはずである過度の記憶消去や封印の危険性は軽視されるようになり、ここにいるほとんどの者が資料を読むまで忘れていたのである。まさか記憶消去で人が死ぬなどと、大概の者が微塵も思っていなかったのだ。

被害者であるなごむが発言する。

「エヴァは初撃を外して警告してくれたからね。怪我なんて縛られた跡ぐらいしかなかったし。いやあ茶々丸さんに拘束されてエヴァに足蹴にされたとききたら、魔法撃たれたときよりも衝撃的だったよ。……うん、まあそれは置いておいて。自分に教えることが出来るほどの使い手となると、聞く限りエヴァか学園長先生ぐらいしかいないんじゃないかな？」

「……我々では不足と聞こえるのだが？」

色々と無視して最後の言葉を聞きとがめたのは、オールバックにサングラスをかけた強面の男性教諭、神多羅木だ。

「うあ、えつと少々語弊がありました。正直なところ、自分は戦闘に向いた才能がまったくありません。魔法戦闘の訓練をするだけ無駄なくらい才能がないんです。魔力量も一般人の半分以下。気に至っては四分の一以下。体術の才能もまるでなく、もちろん戦闘経験もありません。痛いの嫌いですし、したくないことはしたくありません。ですので普通に魔法を教えられても、意味が無いんです」

その散々たる無能っぷりにつつかかっていた高音も鼻白んだ。資料にも書かれていたとはいえここまで才能がなく、その上やる気もないのでは確かに教える気はならない。

記憶を消されたときは、そのやる気の確認もなにもなかったわけだが。

「なら私が魔法を教えよう。なんにも直接戦闘が魔法戦ではない。君は認識障害抵抗という独自の武器もあるのだし、たしか絵が上手く学業の成績もよかったはず。想像や計算は得意なんじゃないかな？」

なら幻覚や情報戦の方が向いているのかもしれない」

メタボ気味な腹を一撫でしつつそう提案したのは式集院教諭だ。

「僕も痛いので障壁や結界が得意だから、その辺りなら教えられるよ」

今度は教師陣の中で一番若い糸目の男性、瀬流彦である。

「お二人ともありがとうございます。ですが自分はまだエヴァを師事したいと思っています」

だがなごむはそんな親切な申し出を断ってしまう。

「なぜですか？」

「他の方よりもエヴァの下が安全だからですよ。自分にとってエヴァは信用できる存在ですから」

どんなに言いつくろっても、ここに所属する魔法使い達の中にはなごむの記憶を消した者達がいる。そして彼はそれによって死にかけた。

本当は記憶などとうに復元してあるが、していないことになっている今の宮崎なごむが魔法を教えたエヴァンジェリン以外の他の魔法使いを無闇に信用することがないのは当然だ。

だがだからといってエヴァンジェリンの元が安全かというところには大きな間違いだ。

「彼女は真祖の吸血鬼ですわ。側にいれば知らぬ間に襲われ、吸血鬼にされてしまいかねません！」

そう、吸血鬼は血を吸い仲間を増やすのである。その能力の一つとして、洗脳と同義な魅了もある。
だが、

「エヴァは魔力が濃い女性の血が好みだし、薄味の自分のは襲う価値もないらしいですよ。それに真祖の吸血鬼にとって血は必須ではなく、完全な眷属化もエヴァは誇りがあるからやりません。実際にエヴァは現在まで人形やガイノイドの従者しか連れていないじゃないですか。過去歴を調べても他の従者の記述はありませんよ。一時的な眷属化はありえますが、恒久的なものはまずないと言えるでしょう。ですよ？ エヴァ」

「ああ。大昔に吸血鬼にしてくれと頼んでくる輩はいたがな。そういう奴らは決まってする価値もないやつらばかりだった。結局これまで眷属なんぞ持ったこともない。

それにもしなごむを眷属にして洗脳し、こいつの大事な者に手を出してしまった場合、眷属化が解けた後が面倒くさすぎる。やる気にもならん」

一人ソファに腰かけ、どこから出していつ入れたのか茶々丸から受け取った紅茶を飲むエヴァンジェリン。最後の方は声が小さくなっていたが、しっかり耳に入れた数人がその真意を確かめようと口を開きかける。

しかしその前に、高音が激情の趣くままにエヴァンジェリンに詰め寄った。

「そんなもの、信じられるわけが！」

「自分は信じられますよ。だってエヴァの過去を覗きましたし」

ブーツと紅茶が高音に吹きかけられた。気道に入ったのかけほげほとむせ続けるエヴァンジェリンになごむは追い打ちをかける。

「本当は永遠を生きなくちゃいけないから、仲良くなるほど認めた人の吸血鬼化はやりたくないんですもんね？」

やっと復活したエヴァンジェリンが「いつ覗いたあああ！」と斜め後ろに従者よろしく立っていたなごむに目にも止まらぬ速さで躍りかかる。だがその獣じみた攻撃性は黒く透明な壁に阻まれて止まり、さらにその上からビデオテープに似た黒い帯がどこからともなくやってきて彼女の全身を拘束してしまうと、終いには猿ぐつわをされて頭部以外の全身を黒い卵に埋めたような形にされ、茶々丸の腕の中にぼすんと投げ込まれて頭を振ることしかできなくなった。

突然の出来事にほとんどの者が反応できなかった。

できた者も武器に手を掛けたり、魔法発動キーの冒頭を唱えたときには、すでに真祖の吸血鬼は無力化されていた。

むー！ うー！ と暴れる、柔らかそうな金糸束がはみ出た黒卵になごむが笑いかける。

「嘘ですよ。大体にしてですね、六百年以上を生きるエヴァの人生を覗き見るのは時間がかかりすぎます。必要な箇所を見るのも運の要素が強すぎます。単にエヴァの蔵書を見ていたから貴方がどんな人生を歩んだか、なんとなくわかったのですよ。自分も独りの経験がありますから」

言われて、真祖の吸血鬼はその足掻きを止める。

彼女の蔵書群をなごむはごく一部を除いた自由な閲覧を許可されていた。そこで彼は吸血鬼から人へ戻る方法が記された書物などに

着いた手垢に気付き、彼女について聞いていた話とでもしやと思っていたのだ。

それにわざわざチャチャゼロという人形を創造して自意識を与え、第一の従者にして何百年とすごしていたのだ。誰に聞くでもなく、これだけ情報があれば如何に残忍にも残酷にでもなれる真祖の吸血姫といえど、その存外に単純な思考などすぐに辿れた。

真祖の吸血鬼となったことで孤独となったエヴァンジェリンと、認識障害を受け付けないが為に孤独であったなごむ。実際の状況は色々と込み入っていたし、二人は見目も近況もましてや歩んできた道程もまるで違うものであったが、ただ孤独であったという過去を持ち、それを自分だけで受け入れてしまっていたという点においては相似であった。

黒い拘束が解かれ、エヴァンジェリンが茶々丸の腕から降りる。

「……不愉快だ。帰るぞ茶々丸」

「嘔吐いてごめんなさい、エヴァ。とりあえず今日はもう家に帰ってゆっくりして下さい。茶々丸さん、後ほど連絡事項を伝えまします。夕飯はどうなるかわからないので、自分の分は用意しなくていいです。送りますのでそのままです」

「はい。なごむさん」

真祖の吸血鬼とその機械仕掛けの従者の姿が淡い光に包まれ、周囲を囲んでいた者達の目から二人の遠近感が急激にずれると共に消え去る。

しばしの沈黙が訪れ、取り残されて呆然としていたガンドルフィ―二が呟いた。

「……今のは、一体……」

「今のは自分が作った封印拘束魔法と、転移魔法です」

「作った？ 転移魔法を？」

「はい」

二人の間で交わされた会話の内容が、学園長とタカミチを除いた者達の中に染みこむまでこれまたしばしの時間を要した。

「そんなバカなっ！」

意味を真っ先に理解し、叫んだのはまたしてもガンドルフィーニだ。

「真祖の吸血鬼を拘束する魔法と、複数の他者を同時転移させる魔法を作ったなど」

封印されているとはいえ、真祖の吸血鬼。それをほとんど何の抵抗もさせずに拘束してしまった事実と、さらには元から高度な転移魔法の中でもさらに高度な複数人転移を媒介も無しに個人レベルで行うなど、魔法使いとしてすでに上級者の域だ。

だがそれよりなによりも、いくら戦闘面では弱いといってもそれ以外の面、魔法制作や補助に関しては魔法使いとしての域が上級者どころではなくさらに上、上の上級か準最強クラスに届く域にあるということになる。

「本当じゃよ、ガンドルフィーニ君。宮崎君はエヴァから魔法を習い始めてたった一日で、まあちょっとズルして実時間になると二十日ほどらしいがの、先ほどの転移魔法やその他多くの歴史的発明をしておるのじゃ。そしてその全てが彼自身が使えるように非常に魔力コストが低く効果が高いものばかりじゃ。実際にこの部屋には防諜や対奇襲用に転移防止結界が張ってあるが、彼の転移は防げたら

ん。既存のどんな魔法でもないということじゃな。彼はの、魔法の常識をひっくり返すほどの天才的な魔法発明家なのじゃよ」

再起動から、わああ、と冷や汗と共に呟いたのは瀬流彦だ。

「それなら確かに、僕らじゃ教えることはないですね。逆に色々教えてもらいたいよ。　ああ、もしかしてさっきの紙ヒコーキも？」

「ええ、式神召喚符を応用して一つの物を複製と、複製物に簡易な命令を加えることで魔力反応がある方向へ飛ぶようにしたんです」

召喚術などは基本、地獄や異界にいる鬼や悪魔の魂を投写し疑似顕現として地上に義体を形成させる魔法である。そのため地獄と地上の両方に同じ鬼や悪魔が存在している状態を作ることとなり、その義体に服従を刷り込むことで召喚者の命令を聞かせるのだが、なごむはその義体を創造し召喚するシステムを、擬似的に物体を複製する魔法と捉えることで低級霊を憑かせた一枚の紙を複製し、さらには刷り込みによって外力が加わらない極々簡単な指令であれば実行するようにしたのだ。外で風に吹かれてしまっただけで紙が手元に届かなくなる、完全なお遊び魔法であった。

「　えっと、まあそんなわけで。自分は積極的な戦闘力はないのですが、見ての通り自動型^{オート}、自立型^{セミオート}の結果や障壁、それに封印拘束を自分にかけていて、転移が得意です。あと魔法を作るのも得意ですね。そして自分は個人的にエヴァに対し意見することもでき、なにかあっても先ほどのように封印拘束することも可能です。魔法球内で使用した際も問題なくエヴァを拘束出来たので、彼女の呪いが解けたとしても実質自分にとっては脅威ではないのですよ。弟子でいるのも彼女が持つ知識や知恵を得るためと、彼女が暴走して自分の大切な人を襲わないよう、監視するためです。これは一応彼女の

同意あつての監視となります。それに彼女は自分と利害関係においても契約を交わしており、もし自分や周囲の者達に害が及べばその契約が即時破棄されるため、当分の間は襲つということ自体がまずありえないと考えています。

あ、さらにですけど、お見せした術式の知識を麻帆良に公開する準備もあります。結界とか障壁はさっきの捕縛同様、魔力や気を抑えて拘束する類のもので、召喚された鬼などの義体にも効果があります」

矢継ぎ早ななごむの説明に未だ大半の者は目を白黒させていたが、若干名はその意味するところを理解し始めていた。

意見を聞いてもらえる。封印が解けても拘束可能。利害による契約関係。当人の同意による監視。強力な魔法の公開。そして先ほどは少々喧嘩気味であつたが、あれは半ばじゃれ合いであり関係も良好なようだ。つまりそれは彼、宮崎なごむの存在そのものが『闇の福音』の抑止力になるということだ。

なごむはエヴァンジェリンの側を安全だと言っていたが、先ほどまでの状況ではそうとは言い難かつた。確かにエヴァンジェリンはなごむやその周囲を襲わないだろう。だが彼女を悪の魔法使いとしてしか見ない正義の魔法使い達が、弟子であり強力な魔法を使う彼を危険視して彼や彼の周囲に手を出す可能性があつた。彼にとつて本当に危険なのはエヴァンジェリンよりもこの魔法使い達の方なのだ。集団である分思想が行き先を求めて暴走を起こしやすい。だが彼は明言した。監視するため、と。この発言はこの学園長室から麻帆良の魔法使い達全員へと伝わっていくだろう。もちろんエヴァンジェリンは除いた全員だ。そして彼からもたらされた魔法があれば、例えば彼女が彼女の側に着こうとも、誰でもエヴァンジェリンを止めることが出来るようになる。集団心理に余裕が生まれ、暴走が起きる

可能性もぐつと下がる。最後に問題となるのは彼に対する罪の意識の暴走と、そこから発生する猜疑心だが、それも逆に『闇の福音』の弟子であることでちょうどいいのかもしれない。あとは近右衛門が各所に手を回せば良いだけだ。

非の打ち所がない内容だった。

否、一箇所だけ不透明な点があった。

真っ先にそれに気付いた近右衛門が問う。

「して、その利害関係が絡んだ契約とはなんじゃね？」

「身体の成長です」

ほう、と近右衛門は安堵と感嘆、そして歓喜が緋い交ぜになった息を漏らした。彼はその契約が、エヴァンジェリンに十五年間かかりっぱなしになっている登校地獄の解呪ではないかと思っていたからだ。だが身体の成長であれば麻帆良に害はなく、その上確かに彼女が求めそうな内容である。

「その契約期間はどのようになってたかの？」

「すでについ先日施術しました。ちょっと特殊なので自分が近くにいないと効果が切れません。成長速度は年一歳ほどになると予測しており、つまり普通の人間と同じです。最低でもあと六歳は欲しいそうですよ？」

これを聞いた近右衛門は内心笑いが止まらない思いだった。実際にほっほっほっほっほっそうかそうじゃったか、と笑い始めていた。少なくとも六年はエヴァンジェリンが大人しくしていることになる。そしてその間は宮崎なごむもその側にいるのだろう。さらに彼がここを動かないなら、彼女もまた動かない。つまり例の件で解呪が成功してしまってもここに居ることになる。

宮崎なごむとてなにも考え無しでこのような策を巡らせたわけではないだろう。つまり政治力もそれなり以上にあるということだ。だが同時に彼の個人的な守護対象がはつきりとしており、少年らしい善意に対する甘えもある。押しにも強くないようだ。

有能だが経験が浅く、弱点も割れており御しやすい。

そんな彼の政治力を近右衛門は自分が育てるのもいいと考え始めていた。もし機会があれば、『彼』ではなく彼の方を孫に宛がうのも悪くない。どの道あのクラスには関わらせるつもりでいたのだ。そして彼自身を例の彼女達の疑念を高める材料の一つにでも出来れば……と、近右衛門は案と策を巡らせ始める。

彼がもつと麻帆良に関わりを持ち、その上『彼』がこの麻帆良で成長すれば、最高の戦力が揃うことになるだろう。

イレギュラーはあった。だが全ては想像以上に最良の方向へ動いている。

茫然自失から復帰した魔法使い達から質問攻めにされている宮崎なごむを視界に収めながら、近衛近右衛門は笑い続けたのだった。

「宮崎さん、お話ししたいことがあるのですが、少々よろしいでしょうか？」

「私もあるんだがいいかい？」

「あ、……桜咲刹那さんと龍宮真名さん、でよかったでしたよね？」

「はい」

「ああ」

近右衛門からの要請で学園長室に独自転移魔法でも転移不可能になる結界を張り、今日は歩いて帰ろう、と小声で歌いながら女子校舎を出たなごむを呼び止めたのは刹那と真名だった。

歌を聞かれていたのではないかとわずかに顔を赤くし、緊張した面持ちになったなごむに刹那は気付いているのかいないのか、彼女を知る者からは普段通りと言われるような引き締まった表情でこくりと頷いた。その斜め後ろからついて来ていた真名の口端はいつもより確実に上を向いていたが。

「ええっと、お二人には自分からも話があったので、晚ご飯奢りますのでちょっと移動しましょうか」

二人が頷いたのを確認してからなごむは探査魔法を麻帆良に走らせ、目的の場所とその付近で人目が全くない場所を見つけると、周囲の人目も探査で無いことを確かめ、転移の淡い光が三人を包み込んだ。

現在の時刻は二十一時前。明日から学生達は一斉に冬休みで今日はクリスマスイヴのイヴという日のため、麻帆良の街はどこもかしこも派手なイルミネーションで着飾っている。

午前中で終業式は終わっており、本日招集を受けた第二エリアを警備の管轄とする魔法先生や生徒はいつもよりも大分早く学園長室に集まること出来たのだが、なごむの独自魔法の情報開示に思ったよりも時間がかかってしまったせいで、あそこに集まっていた面々はこの時間まで未だ夕食にありついていなかった。

それはもちろんこの三人も同じだ。

三人は人気のない路地の奥まった所に転移で現れると、なごむを先頭に少し歩き、イルミネーションからは少々外れた地区にある一軒のぼる屋台に近づく。外部に幾らかの折り畳みテーブル席が設けられたラーメンの屋台だった。

三人が席に着くとねじり鉢巻きを頭に巻いた大柄で筋骨隆々な男性がお冷やを置いて注文を取り、屋台で湯切りをしていた細身で綺麗な女性に注文を叫んだ。女性は麺を器に移しながらちらりと三人を見て頷くだけだ。

屋台の少し後ろで設置型の大型ガスコンロで火にかけられている大鍋から、鶏ガラ出汁の香りが辺りに漂っていた。

「クリスマススムードの中、異性に屋台ラーメンに誘われるとは思っていなかったよ」

いたずらっぽい真名の発言になごむは照れたように頭をかいた。

「ちゃんとしたお店の外食先をあまり知らないのと、知ってる場所も今日辺りからほとんど埋まっているはずなので、こついった屋台系しか思いつかなかったんですよ。かわりに味は保証させていただけます」

言っと、なごむがテーブルを握り拳で軽く叩く。その場面を真名は注意深く観察していた。彼女の魔眼では、不可解な構造としかいえない球体のようなものの集まりが周囲に展開したのがわかっただけだ。学園長室で見たものと変わりはない。

「先ほどの説明会でも見せましたが、魔法認識阻害用の認識阻害結界です。内容は一般的なものと同じですが、自分の魔力量でも使えるように魔力消費量が従来の百分の一程度になっています」

「改めて見ても、転移も結界もすごいですね」

刹那が素直に感嘆の声を漏らした。ただ彼女の場合魔法関連は不得手としており、その数字に驚いただけであつたが、先ほど学園長室に集まっていた魔法使い達はこの反則的な効率化に目を剥いて開いた口が塞がらない顔をした後、歓声を上げものだった。

ただ問題はその次にあつた。

「だけど結局、誰一人として使えなかつたんじゃないのかい？」

「うあーそうなんですよねー。それであそこに自分用の転移防止結界を自分が張るハメになりましたし」

誰もなごむの多胞体術式を理解出来なかつたのだ。

教えを請うた者の中には無茶苦茶な術式を教えることで本当の魔法を教えることを誤魔化し、『闇の福音』に味方しているのではと言い出すような輩もいたが、なごむが実際に起動させた多胞体術式との差違確認を真名がしていた上、近右衛門や朱石教授、瀬流彦など一部の者が初期起動までは成功させていたので、これは純粹に相性や実力不足ということ収まった。

そのためさしあたって多胞体式魔法を仕込んだ魔法具を作り与えることとなつたのだが、作るためには高価なうえ特殊な素材が必要になり制作にもそれ相応に時間がかかる、その素材を集めるのにも時間がかかる、となり、自立人形を作るためにも使われる類の素材だったため、エヴァンジェリンであれば在庫を有しており比較的す

ぐに用意できたのだが、彼女に頼るわけにもいかないと魔法使い達は言いだし、とりあえずは材料集めと決まったのだ。まずは冬休み中に五個ほどの封印捕縛用魔法具を作るのが目標だ。転移は座標指定の関係で魔法具化不可能な術式内容ということでお流れになり、あとは警備のシフトを決めて解散となった。

なににせよ、なごむは魔法具が出来上がり彼らが自由に使えるようになったとしても作成者ならば簡単に術の解除や魔法具の自壊を引き起こせるようにするつもりであり、さらに隠匿用の多胞体術式でその自壊術に暗号化などを施すつもりであった。

もちろんエヴァンジェリンにも彼らにこの魔法具を与えることは伝えてあり、自壊術についても伝えてある。

そしてその自壊術は彼らに教えた中にも、見せた中にもすでに含まれている。つまり教えられたものをそのまま憶えて使ったところで、なごむには絶対に効かない魔法となっていたわけである。

なごむに嫌疑をかけてきた魔法使いが言ったとおり、彼は最初から彼らに本当の魔法を教えていなかったのだ。

そして一連の流れには龍宮真名も一枚噛んでいる。

彼女は学園長室でなごむが起動させたものと皆に教えたものが同じものであることを教えた。それは嘘ではなかったが、元の魔法に最初から仕掛けがある可能性も真名は理解していた。だがあえてその発言したのだ。

なごむにそのように依頼されていたからだ。

その切欠からなごむは初期起動を成功させた者達の意見をまとめ、妥協案として魔法具案を提出。嫌疑が解消したように見せかけた。

・・・)のだった。

余談だが、魔力魔法球は内包魔力を本人のものにするために作成から使用者が携わる必要があり、素材も超がつくほど高額になる。そのうえ維持のために使用者本人が空間安定用多胞体術式を展開する必要があつたため、これが欲しければお金と、少なくとも空間安定用の多胞体術式を理解しないことにはどうしようもないことを近右衛門に伝えると、彼はエヴァンジェリンが魔力魔法球を所持していることを秘匿するように接触念話で伝えてきた。これも暴動に繋がる可能性があつたからだ。なごむもエヴァンジェリンが所持していることが知られると芳しくないことは理解しており、それは快諾された。そして近右衛門が空間安定を理解出来たら魔力魔法球を作成する約束をしたのだった。エヴァンジェリンのものとは違い、自壊術入りの魔力魔法球となるが。

魔法具の件を見ると明らかにエヴァンジェリンに肩入れしているなごむだが、彼としてはエヴァンジェリンの性格を考えると教えておいた方が何かあつたときに面倒を起こさないとわかりきっているからの行動でしかなく、多少一緒に居る時間があるため友情や親近感を覚えてはいるが、これといって特別な他意はなかった。

第一あの封印捕縛魔法は超至近距離でなければ完全発動できない。それになごむのようにカウンターで使えるようになるには、確率と敵の意識を読みとり自動発動をさせる別の多胞体術式を自己制御する必要がある。あの魔法具はあくまで魔力を込めて発動させるだけでしかないのだ。魔力魔法球を持つ現在のエヴァンジェリンにはほとんど意味が無い代物といえた。魔力魔法球の件を知らない麻帆良魔法使い達は大絶賛していたが。

「こうやってみると、改めてエヴァがすごいつてわかりますね。あの人は比較的すぐに多胞体術式を理解してましたから」

「魔法に関してはさすが、ということかな？」

「ですねえ」

「作った君の方がすごいんだけどね」

「ありがとうございます」

真名はなごむを品定めするように見つめると、彼女の本題を切り出した。

「それで、今回の件の報酬は後払いということだったけど、どうなるんだい？」

真名が何かしらの依頼を受けていたことを知らなかった刹那が、驚いた様子で二人に視線をやる。

「これを」

そういうとなごむは先ほどから握りっぱなしでいた拳を開き、そこに納まっていた小指の爪ほどの水晶を真名に渡した。

「これは？　　ふむ。多胞体術式は魔法処理済みの大型ダイヤにしか刻めないのではなかったかな？」

真名の魔眼が、水晶に閉じ込められた多胞体術式の魔力を捉えていた。その構成は現在周囲に展開している認識阻害結界と同じものだ。

なごむがくすりと笑う。

「んーと、一言もそんなこと言ってませんよ？　見ての通り、安価な無処理水晶にも刻めます。ただ込める魔力がその分シビアになり

ますけどね。あの場にいた誰にでも扱えるほどの強度を得るには、大型の魔法処理済みダイヤモンドが必要だった、というだけです。龍宮さんに渡したそれは少しでも魔力を込めすぎると簡単に割れてしまいますが、その目で何度か発動を見ていた貴方なら扱えるんじゃないですか？」

これは半ば嘘だ。事象変異能力を用いればどんなものにも多胞体術式は刻むことが出来るし、壊れることはなくなる。

「君は思った以上に狸だね。だが払いのいい雇い主だ。鼻屑にしてもらいたいから、次は少しサービスしよう」

「おー、それはありがたい。今後のために伝手作るだけのつもりでしたが、喜んでいただけただけなによりです」

真名は自分で認識障害結界を張れるし、既存の認識障害結界一つでどうこうなるような魔力量でもない。だがこの水晶の他の使い道に気付かないほど愚かではなかった。

確かにこの水晶の価値が理解出来る者は少ないだろう。真名は魔眼があるからこそ内部にあるのが多胞体術式だと気付いたが、ぱつと見はただの水晶片でしかないし、微量の魔力で刻まれた多胞体術式に気付いたとしてもただの魔力痕にも思えてしまいそんな構造だ。発動を見ていた限り必要な魔力量は極端なまでに少なすぎるくらいであり、なごむが言うとおりオーバークロックで簡単に壊れるようであれば、構造を知ろうと少し魔力を流しただけでおじゃんになりかねない。

だが、機械的に魔力量を調節できる存在であればどうだろうか？ 少しでも必要魔力量を少なくする研究をしている者であれば？

単純に知的好奇心が強い者や、コレクター精神が強い者だったならば？ 多胞体術式の存在を知りながらにして、現物を得る機会が無くてやきもきしている者がいたら？

真名にはその存在に心当たりがあった。彼女であればすでに多胞体術式のことを知っていて、サンプルのためにこれを高額で買い取るだろうと予想できた。例え知らなくとも、真名が説明すれば一も二もなく買い取り交渉が始まるはずだ。

しかし問題もあつた。彼女と真名の関係に彼が気付いている可能性の問題だ。完全に知っていることはありえない。だが何かしらに気づき、かま掛けも兼ねてこのようなことをしている可能性は十分にあつた。学園長室での真名の発言など無くとも、なごむは問題なく誤魔化すことが出来たはずだからだ。真名がやったことなど小さな切欠を作っただけで、仕事としてわざわざ依頼するほどのことでもない。第一、真意が隠れていることを真名に伝えるような真似をする必要性がどこにもない。だが彼は真名に依頼し、この水晶を渡してきた。

(……伝手を作るため……さて、彼はどこまで知っている？ 魔法具で学園側を謀ったあたり、少なくともあちら側というわけではなさそうだが……)

ちらりと向いた真名の視線に、刹那は二人の話が終わったものと判断して頷く。二人の会話内容のせいだろう。その表情はここに来たばかりの時よりも警戒が強くなっていた。

「龍宮との話は終わりでいいでしょうか」

「あ、もうちょっとあつたけど多分関係があることなので桜咲さんどうぞ　　っと、少し待って下さいね」

そこに注文していたラーメンが届いた。

のびる前に食べちゃいましょう、ということ、いただきますと箸をつける三人。味を保証するというだけのことはあるなと真名が

関心し、ずるずると麵を啜る合間になごむが話を再開させる。

「えっと、桜咲さんの話って、多分近衛木乃香さんのことですよね？」

「……お嬢様のことをどこで？」

さらに強い警戒の空気を纏った刹那を気にすることもなく、なごむは制服のポケットから折りたたまれた紙を出して広げて見せた。それは彼女達2 Aクラスの名簿の写しであった。各人の顔写真と名前、そして魔法に関わりがあるかどうか、あつた場合はどういった関わりかがそこには書かれていた。

桜咲刹那の欄には魔法 神鳴流剣士 近衛木乃香護衛 の文字が、

龍宮真名の欄には魔法 狙撃手 傭兵 とあり、

近衛木乃香の欄には魔法 学園長の孫 関西呪術協会長の娘 魔法関係者だが現在は魔法を知らない とあつた。

「近衛近右衛門から貰いました。あとクラス内の状況はエヴァや茶々丸さんからいくらか聞いてます。貴方方に言うのもなんですが、随分と騒がしいクラスの様子ですね」

なるほどと納得して警戒を解く刹那であつたが、真名はなごむが学園長先生ではなく近衛近右衛門と言つたことに気付きわずかに目を細める。それにこれをなごむは貰つたと言つた。刹那は気付いていなかったが、本当なら彼女たちの情報をただで与えなければいけない事態になつているということだ。

「桜咲さんの話は寮周辺の結界展開時に彼女を気にするよう頼むつもりだったとか、そのあたりですよね？　彼女は世界屈指の潜在魔力量と西日本の長候補ということで、外部から狙ってやってくる者が多いとエヴァからは聞いています」

「はい。お嬢様のこと、お願いできますでしょうか？」

刹那は学園長室でなごむが話した守りたい大切な人がいるという話や、公開した結界魔法や障壁魔法に彼女なりに感銘を受け、協力を願いに来たのだった。

「桜咲さんは自分が誰を守ろうとしているかご存知ですか？」

「目時詩緒さんや宮崎のどかさんでは？」

「何から守ろうとしているかは？」

この時点で、真名はなごむの仮想敵がなんであるかわかってしまった。

「え、何からといいますと、その、宮崎さんのような目に遭わせたくないということだと、資料を読んだ限りでは思いましたが」

「自分をあのような目に遭わせたのはどこの誰ですか？」

さすがに刹那も彼が言いたいことに気付いて眉を顰めた。

「……麻帆良の魔法使いですか？」

「いいえ、全ての魔法使いです。一般人であつた自分達の日常を非日常で塗り潰し、自分や自分の大切な人を襲つたのは他でもない、魔法という秘匿された力です」

「……全ての魔法使いを敵に回すつもりですか？」

それはつまり、世界を敵に回すようなものだ。そしてその中には刹那が守るべき近衛木乃香の家族も含まれてしまう。

微量の殺気を含んだ刹那の睨みに、ぷつとなごむは吹き出した。

「くくつ、ふは、すみません。自分はアレです、復讐者だなんて柄じゃないので、ただ守りたいだけです。そんなに睨まないで下さい。桜咲さんは近衛木乃香さんを、何から守ろうとしていますか？」

不真面目ななごむの態度に気を害した刹那は睨んだまま答える。

「お嬢様を傷付ける、ありとあらゆるものから」

「なら、今の貴方では守りきれませんね」

瞬間、刹那の怒気が、殺気が、暴風のようになごむに叩きつけられる。彼女の手はすでに竹刀袋の中にあり、いつでも斬りかけられる間合いでもあった。

だがなごむはラーメンを啜りながら上目遣いで刹那を見て、呆れた表情になるだけだ。

「ほら、そうやってちょっと不信な者を障害だと簡単に思い込む。おシオの登校初日もそうやってあの子を怪しんで、不審な点があったら襲うつもりだったのでしょうか？」

「っ！　なぜあの日のことを……？」

「おシオからあの日のことを聞いて、ちょっと考えたらわかります。貴方の性格とかエヴァにも聞きましたし、近右衛門にも確認をとり

ました。認識阻害や人払いに抵抗力がある自分はその日、エヴァに襲われました。そしておシオも認識阻害に若干ですが抵抗を見せています。なにかが少しでも間違っていたら、貴方はあの子を傷付けていたんじゃないですか？」

「……それが、お嬢様を守れないこととどこに関係ある」

「今のようことを言われて主題がブレないのは結構。ですがそのように考え無しに敵意を振り撒き斬りかかるだけでは、いつかその刃は毀れます。それまで向けてきた敵意に折られます。」

貴方がおシオを斬っていたら、自分は近衛木乃香を殺していました」

刹那は刀を抜けなかった。どんなに力を入れようと、ぴくりとも体を動かせなかったからだ。

唯一自由であった首を回して見れば、制服の袖から出る自身の手が真っ黒に染まっているのが確認出来た。それは脚も同じだ。気を巡らせようとすると上手くない。学園長室でエヴァンジェリンを拘束した黒い紐のようなものが、いつの間にか全身を拘束していた。

「今桜咲さんが自分に向けているのは猜疑心です。勝手に疑って、勝手に自己完結して、勝手に喧嘩をふっかけてくる、守りたいものがある人にとっては最も邪魔な代物です。考えてもみて下さい。今のはもしもの話でしかなく、すでに結果は変わっています。なのに何もしていない自分を斬り殺したら、『闇の福音』はどんな感情を抱きますか？ 誰に対してその感情の矛先を向けますか？」

あ、ちなみに今のエヴァ、ちょっと強力な魔法具をあげたので全盛期に近い戦いが出来ると思いますよ」

エヴァンジェリンとなごむが彼女の成長に関しての契約をしたことは刹那も知っている。そして彼がいないと成長できないことも知っている。だが、

「……『闇の福音』は、女子供を殺さない」

麻帆良の魔法関係者達は耳にたこが出来るほど近右衛門にそれを聞かされる。だから無論、刹那もそれは知っていた。この一年半以上の学園生活で、彼女はこちらから手を出さなければ問題を起こさないことも知っている。

なごむが頭を振った。

「殺さないだけです。傷は付けるし、洗脳だって出来ますよ？ それだけではありません。麻帆良は彼女に黙って追加の魔力抑制を施して、それも呪いの一種だと言って何食わぬ顔をしています。それに実は彼女にかかっている登校地獄の呪い、成長できなかつたから歪んでいる部分が大いんです。何せ子供用の呪いですからね。解析したところ、歪んだ解呪キーの中に身体的な変化が含まれていたんですよ。あまりに当然のことに誰も気付いていなかったんですね。気付いてもどうしようもありませんし。そしてそれらをエヴァはもう知っています。あと一年も過ぎして身体が成長すれば、自分が作った他の魔法式と合わせて解呪出来るようになる予定なんです。

そんな歪みを正せる可能性が手に入ったのに、ただ猜疑心をこじらせたどこぞの愚か者のせいで途絶えたとなったら、どう思うと思いますか？」

ぼんぼんと出て来る新事実我真名はある種呆れた視線をなごむに向け、刹那は最悪の想像をして蒼白になっていた。

近衛木乃香はエヴァンジェリンが好むという血の条件を満たしている。全盛期の彼女であれば一人で麻帆良を滅ぼせるだろう。少なくとも麻帆良を支配してしまえば、魔力抑制は解除できる。そしてまだ彼女用の捕縛魔法具は一つもない。刹那は麻帆良の魔法使いと相対したエヴァンジェリンの下で、洗脳され魔力タンクのように扱われる木乃香の姿を想像してしまった。

これはあくまで最悪の想像でしかなく、実際はエヴァンジェリンのことだ、八つ当たりのようなこんな真似はまずしないだろう。だが刹那は確実に無事では済まないし、麻帆良に与える損害も無視できるものではなくなる。なにせせつかく手に入れたかに思えたエヴァンジェリンへの抑止力を失うのだ。確実にこの地もエヴァンジェリンも荒れることになる。その機に乗じて木乃香を狙う者が現れないとも言いきれない。

言葉もない様子の刹那に、なごむは拘束を解いて問いかける。

「今の貴方は、近衛木乃香さんをあらゆるものから守ることが出来ていましたか？」

愛刀の柄から手が離れ、だらりと下がった頭を刹那は力なく横に振った。

「第一、もし自分が近衛木乃香さんに手を出したら麻帆良と関西とを敵に回すことになります。守りたい人がいるのに、無駄にそのようなことをする人がいますか？」

いたのだ。刹那は先ほど同じことをやろうとしていた。多少の挑発はあったものの、それを拡大解釈して彼女は最悪の一手をとろうとしていた。どこまでも叩きつけられる自身の不甲斐なさに、愚かしさに、刹那は唇を噛みしめた。

「えつとですね、人に頼む前に、自分がやろうとしたことを見つめ直して欲しかったんです。おシオに危険が迫っていたことを後になつて知りましたからね。裏の有力者の中にも表に大切な人を持つている方がいます。近衛木乃香さんだつてそうです。先ほどの朱石教授の娘さんも一般人ですよ？ 彼女達以外にも意外なところと裏と繋がつていて、下手を打てば問題がある人は存外にいるものです。別に裏に限らず、表だけでも侮れませんよ？」

言いたいことはこれぐらいかな。今後このようなことがないようしていただけるのであれば、危険から遠ざける程度しか出来ませんが、自分も近衛木乃香さんのことを気に掛けましょう」

最後の一文に、刹那が顔を上げる。

「ほ、本当ですか？」

「ええ、本当です。ですからラーメンのびちやう前に食べちゃいましょう。自分と龍宮さんは食べ終わってますよ」

「はっ、はいっ！ ありがとうございます！」

言われた通り箸を進め始めた刹那に、微笑ましいものを感じたなごむは少しだけ考える素振りを見せて、再度口を開く。

「えつと、桜咲さんはそのまま食べていいので、聞いて下さい」

真名も刹那も視線で了解の意を表した。

「傭兵である龍宮真名さんと、関西呪術協会所属神鳴流剣士、桜咲刹那さんのお二人に相談及び依頼と協力を求めたいことがあります。

自分や桜咲さんの大切な人を含む女子中等部2年A組一般生徒全員の、常識的な安全に関わる問題です」

刹那の箸が止まる。

「三学期始まりと同時に、麻帆良に一人の西洋魔法使いが着任する予定になっているそうです。名前はネギ・スプリングフィールド。彼と近衛近右衛門達が生むであろう災禍から、彼女達を守りたいのです」

第6話・謀議（後書き）

次回から原作入りします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792w/>

ネギま！ 塩派！

2011年10月22日03時31分発行